

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第342集

沢田 I 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査
(五次調査)

財団法人 岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

沢田 I 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査
(五次調査)

序

岩手県には旧石器時代の遺跡をはじめとする多くの埋蔵文化財包蔵地が各地にあり、平成7年度の岩手県教育委員会のまとめでは980箇所を越えております。先人の残したこれらの埋蔵文化財を保護し、保存してゆくことは私達県民に課せられた重大な責務であります。

一方では、地域開発に伴う社会資本の充実は重要な施策であります。発掘により遺構が消滅することはまことに惜しいことですが、その反面それまで闇に包まれていた先人の営みに光明があたるのも事実であります。

財団法人岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、埋蔵文化財の保護の立場にたって、その記録を残す措置を取ってまいりました。

三陸縦貫自動車道は、宮古市と宮城泉仙台市を結ぶ自動車専用道路で、延長距離は約220kmあります。国道45号を使うと7時間あまりかかっていたものを約3時間で結ぶものです。時間の短縮のみならず、地域間交流の拡大、地域経済の発展・活性化、安全確実な交通の確保などが期待されています。

工事は1988年度（昭和63年）に事業着手され、それに先立つ1987年から岩手県教育委員会文化課による遺跡の分布調査や試掘が行われ、路線変更の不可能な遺跡を順次発掘調査して参りました。

本書は、平成11年度に発掘調査が行われた、沢田1遺跡第五次調査結果をまとめたものであります。遺跡は、三陸海岸中央に立地している、縄文時代前期から平安時代までの集落跡の資料を提供するもので、過去に行われた一〜四次調査の成果を合わせ、該期の集落構造の解明に寄与できるものと思われます。

この報告書が広く活用され、斯学の研究のみならず、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご援助、ご協力を賜りました建設省東北地方建設局三陸国道工事事務所・山田町教育委員会を始めとする関係各位に衷心よりの謝意を表します。

平成12年9月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 千葉浩一

例 言

1. 本書は岩手県下閉伊郡山田町山田第3地割8-3ほかに所在する沢田I遺跡の第五次発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の発掘調査は、三陸縦貫自動車道山田道路建設に伴う事前の緊急発掘調査であり、岩手県教育委員会文化課の指導と調整のもとに、建設省東北建設局三陸国道工事事務所の委託を受け、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施したものである。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳番号はLG94-0032、当センターの調査略号はSDI-99である。
4. 野外調査の期間、調査面積、担当者は以下の通りである。
平成11年6月29日～9月30日 480㎡ 星 雅之、前田 稔
5. 室内整理期間、担当者は以下の通りである。
平成11年9月1日～平成12年3月31日 星 雅之、前田 稔
6. 出土品の鑑定は次の方々、機関に依頼した。
石器・石製品の石材鑑定……………花崗岩研究会
火山灰の分析鑑定……………橿古環境研究所
年代測定……………橿古環境研究所
炭化材樹種同定……………早坂松次郎（岩手県木炭協会）
鉄製品保存処理……………橿古ニッテツ・ファイナ・プロダクツ釜石文化財保存処理センター
7. 本報告書の執筆は、星 雅之、前田 稔が執筆・編集した。
8. 調査および室内整理に際しては次の方々、機関に御指導・御協力を賜った。（順不同・敬称略）
熊谷常正（盛岡大学）、川向聖子（山田町教育委員会）、鎌田裕二（宮古市教育委員会）、鎌田精造（大槌町教育委員会）、小田野哲憲・中村英俊・斎藤邦雄・日下和寿（岩手県教育委員会文化課）、三浦憲一（岩手県立博物館）、堀江 格（福島市振興公社）、中村哲也・茅野嘉雄（青森県埋蔵文化財センター）、中村明央（一戸町教育委員会）、末光正卓・阿部明義（北海道埋蔵文化財センター）、山口慶一（東京都埋蔵文化財センター）、松本建速（筑波大学）、神原雄一郎（盛岡市教育委員会）
9. 野外調査は山田町教育委員会をはじめ地元の方々のご協力をいただいた。
10. 室内整理参加者は、下記のとおりである。
小笠原邦子、本館京子、吉田育子、高橋史佳、須藤千賀子、小笠原千春
11. 発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。
12. 調査成果は現地公開資料、調査略報ほかに掲載したが内容は本書が優先する。

本文目次

序
例言
報告書抄録

[本文]

I. 調査に至る経過	1	4. 石製品	67
II. 遺跡の立地と環境	1	5. 鉄製品	67
1. 遺跡の位置	1	6. その他	67
2. 地形・地質	1	VI. 分析・鑑定	95
3. 基本層序	3	沢田Ⅰ遺跡出土火山灰の分析鑑定	95
4. 周辺の遺跡	4	沢田Ⅰ遺跡放射性炭素年代測定	95
III. 調査方法と整理方法	12	沢田Ⅰ遺跡	95
1. 野外調査	11	VII. まとめ	99
2. 室内整理	13	1. 住居跡	99
IV. 検出された遺構	18	2. 土坑	101
1. 住居跡	18	3. 集石	101
2. 土坑	54	VIII. 総括	101
V. 出土遺物	62	1. 沢田Ⅰ遺跡の変遷について	102
1. 土器	62	2. 縄文時代中期中葉～後葉についての 若干の考察	104
2. 土製品	66		
3. 石器	66		

[図版]

第1図 岩手県図に見る遺跡の位置	6	第10図 p95住3号	24
第2図 山田町地形・地質図	7	第11図 p96住1号、p97住2号	26
第3図 グリッド図・基本土層	8	第12図 p97住3・4号、p98住1号、 p99住1号	30
第4図 周辺の遺跡分布図	9	第13図 q98住1・2号	32
第5図 凡例	14	第14図 m98住1・2号、n95住4号	35
第6図 遺構配置図	15	第15図 o95住2号、o98住1号	38
第7図 時期毎住居跡Ⅰ	16	第16図 p95住1号、r99住1号	41
第8図 時期毎住居跡Ⅱ	17	第17図 s98住1号	42
第9図 n95住1・3号、o96住2号、 o97住1・2号	22	第18図 n95住2号、n97住1号	46

第19図	n97住1号、o95住1号	47	第47図	遺構内出土石器3	88
第20図	o96住1号、p95住2号	49	第48図	遺構内出土石器4	89
第21図	p97住1号	51	第49図	遺構内出土石器5	90
第22図	p97住1号、q97住1号	52	第50図	遺構内出土石器6	91
第23図	r97住1号	55	第51図	遺構内出土石器7	92
第24図	r97住1号	56	第52図	遺構内出土石器8	93
第25図	土坑	60	第53図	遺構外出土石器・鉄製品	94
第26図	s99集石1号	61	第54図	沢田I遺跡における 放射性炭素年代測定	97
第27図	遺構内出土土器1	68	第55図	沢田I遺跡における 火山ガラス比分析	98
第28図	遺構内出土土器2	69	第56図	第1～5次調査遺構配置図1	109
第29図	遺構内出土土器3	70	第57図	第1～5次調査遺構配置図2 (縄文時代前期住居跡)	110
第30図	遺構内出土土器4	71	第58図	第1～5次調査遺構配置図3 (縄文時代中期住居跡)	111
第31図	遺構内出土土器5	72	第59図	第1～5次調査遺構配置図4 (奈良時代住居跡)	112
第32図	遺構内出土土器6	73	第60図	第1～5次調査遺構配置図5 (平安時代住居跡)	113
第33図	遺構内出土土器7	74	第61図	「沢田I遺跡」第5次調査 出土大木8b式集成図	115
第34図	遺構内出土土器8	75	第62図	「沢田I遺跡」第5次調査 出土大木9式集成図	116
第35図	遺構内出土土器9	76	第63図	「沢田I遺跡」第1～4次調査 中期住居跡出土土器	117
第36図	遺構内出土土器10	77	第64図	「沢田I遺跡」第1～4次調査 中期住居跡出土土器	118
第37図	遺構内出土土器11	78			
第38図	遺構内出土土器12	79			
第39図	遺構内出土土器13	80			
第40図	遺構内出土土器14	81			
第41図	遺構内出土土器15	82			
第42図	遺構内出土土器16	83			
第43図	遺構外出土土器1	84			
第44図	遺構外出土土器2	85			
第45図	遺構内出土石器1	86			
第46図	遺構内出土石器2	87			

[写真図版]

写真図版1	遺跡遠景	131	写真図版6	o96住2号、p96住1号	136
写真図版2	遺跡全景	132	写真図版7	o97住1号	137
写真図版3	調査前風景	133	写真図版8	p97住2～4号、p98住1号、 p99住1号、q98住1号	138
写真図版4	第1・3遺構面の状況	134	写真図版9	p95住3号	139
写真図版5	n95住1・3・4号	135			

写真図版10	p 95住 3号	140	写真図版34	p 97住 2号、q 98住 1号、 p 99住 1号、m 98住 1号出土土器	164
写真図版11	p 97住 2号	141	写真図版35	n 95住 4号、o 95住 2号、 o 98住 1号出土土器	165
写真図版12	p 97住 2号、q 98住 2号	142	写真図版36	o 98住 1号、p 95住 1号、 r 99住 1号出土土器	166
写真図版13	m 98住 1・2号	143	写真図版37	r 99住 1号出土土器	167
写真図版14	m 98住 1・2号、o 95住 2号	144	写真図版38	r 99住 1号出土土器	168
写真図版15	o 95住 2号、o 98住 1号	145	写真図版39	r 99住 1号、s 98住 1号、 r 97住 1号出土土器	169
写真図版16	o 98住 1号、p 95住 1号	146	写真図版40	r 97住 1号出土土器	170
写真図版17	r 99住 1号	147	写真図版41	r 97住 1号出土土器	171
写真図版18	s 98住 1号	148	写真図版42	r 97住 1号、n 97住 1号、 q 97住 1号、土坑・s 99集石 出土土器	172
写真図版19	n 95住 2号	149	写真図版43	遺構外出土土器 1	173
写真図版20	n 97住 1号	150	写真図版44	遺構外出土土器 2	174
写真図版21	o 95住 1号	151	写真図版45	p 95住 3号、p 98住 1号出土土器	175
写真図版22	o 95住 1号	152	写真図版46	p 99住 1号、q 97住 1号、 p 97住 2号、m 98住 1号、 o 95住 2号出土土器	176
写真図版23	o 96住 1号、p 95住 2号	153	写真図版47	p 95住 1号、r 99住 1号、 o 95住 1号、p 97住 1号、 r 97住 1号出土土器	177
写真図版24	p 97住 1号	154	写真図版48	r 97住 1号、遺構外出土土器	178
写真図版25	p 97住 1号	155	写真図版49	鉄製品、鉄洋	179
写真図版26	r 97住 1号	156			
写真図版27	r 97住 1号	157			
写真図版28	q 97住 1号	158			
写真図版29	q 98土坑 1・2号、s 98土坑 1号	159			
写真図版30	n 98土坑 1号、o 96土坑 1号、 p 99土坑 1号、q 99土坑 1号	160			
写真図版31	s 99土坑 1号、s 99集石 1号	161			
写真図版32	n 95住 1・3号、o 96住 2号、 o 97住 1号出土土器	162			
写真図版33	p 95住 3号、p 98住 1号出土土器	163			

[表目次]

第1表	周辺の遺跡	10	第7表	遺物観察表	123
第2表	沢田1遺跡遺構・遺物総数	114	第8表	遺物観察表	124
第3表	遺物観察表	119	第9表	遺物観察表	125
第4表	遺物観察表	120	第10表	遺物観察表	126
第5表	遺物観察表	121	第11表	遺物観察表	127
第6表	遺物観察表	122	第12表	遺物観察表	128

報告書抄録

ふりがな	さわだいちいせきしょうさほうこくしょ				
書名	沢田1遺跡調査報告書				
副書名	三陸自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査				
巻次					
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書				
シリーズ番号	第342集				
編集者名	星 雅之 前田 稔				
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター				
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL 019-638-9001 FAX 019-638-8563				
発刊年月日	2000年10月31日				
ふりがな	さわだいちいせき				
所収遺跡名	沢田1遺跡				
ふりがな	いわてけんしもへいぐんやまだちょうやまだ				
所在地	岩手県下閉伊郡山田町山田第3地割8-3				
コード	市町村 03482 遺跡番号 LG94-0032・SDI-99				
北緯	39° 28' 39"				
東経	141° 57' 9"				
調査期間	平成11年6月29日～9月30日				
調査面積	480㎡				
調査原因	道路建設にかかる事前調査				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
沢田1遺跡	集落	縄文	縄文住居 22	縄文土器 12箱	縄文時代前期～平安時代の遺構が重複
		奈良	古代住居 8	石器 99点	
		平安	土坑 8	土師器 2箱	
			集石 1	須恵器 1箱	
				鉄製品 6点	
				鉄滓 2kg	
				羽口 3点	

I. 調査に至る経過

三陸縦貫自動車道は、宮城県仙台市と岩手県宮古市を結ぶ延長約220kmの一般国道の自動車専用道路であり、八戸・久慈自動車道とともに、昭和62年に指定された全国約14,000kmの高規格幹線道路網の一部をなすものである。

山田道路は山田町関谷と船越の間約7.8kmの区間である。一般国道45号山田市街地の増大する交通需要に対応するため、山田バイパスとして昭和62年度に事業化したものであるが、同年6月に三陸縦貫自動車道の一部に指定されたことにより、昭和63年度に新たに南側延長部も合わせて事業に着手したもので、高規格幹線道路として事業の促進を図っている。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が分布調査と一部の試掘調査を昭和62年度から実施し、これまでに14遺跡、103,225㎡が確認されている。その後、岩手県教育委員会は建設省東北地方建設局三陸工事事務所と協議を行い、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これより、平成2年度より織笠地区の細浦Ⅱ遺跡を手始めに順次調査が行われた。

調査対象遺跡は工事施工の急がれる地区や用地買収の進捗状況に合わせて行われたため、沢田Ⅰ遺跡の調査は平成6年から平成9年の4年次にまたがって実施された。

5次調査は、平成9年に行われた第四次調査の隣接地に相当する部分で、過去の調査成果から遺構・遺物の密集が予想された。よって、岩手県教育委員会は建設省東北地方建設局三陸工事事務所と協議を行い、発掘調査を岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。それにより、岩手県教育委員会は平成11年度事業について、平成11年3月2日付け「教文第1251号」により岩手県文化振興事業団に通知した。

これを受けて岩手県文化振興事業団は沢田Ⅰ遺跡について同年6月11日付けで委託契約を締結し、同年6月29日から発掘調査を開始した。

II. 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

沢田Ⅰ遺跡の所在する山田町は、陸中海岸のほぼ中央に位置し、東部、東南部はリアス式海岸で、山田湾、船越湾を有する町である。国土地理院発行の5万分の1地形図（「大碓」NJ-54-13-4）によると、本遺跡の中心付近は北緯39°28'40"、東経141°57'17"となり、JR山田線陸中山田駅の北約2kmに位置し、山田北小学校の北東側に広がる。本遺跡は、北西～南東方向に傾斜する沢により解析された沢地形を呈する緩斜面地に立地し、標高は11～30mである。調査区の現況は、宅地、水田、畑地、果樹園、放牧地として利用されていた場所で、一部水田造成や宅地に伴い改変を受けている。

2. 地形・地質

(1) 地形

山田町は、陸中海岸のほぼ中央に位置し、北部は宮古市、西部は川井村と大槌町、南部は大槌町、東部は太平洋に面している。山田町は、全体的に横長の形をしており、面積は263.40㎢に及ぶが、平地部はきわめて

少なく、面積の大半は山林原野が占めている。

山田町の東部（海側）は、リアス式海岸特有の出入りの多い海岸線を呈しており、重茂半島、船越半島が急峻な山地形で突出し、これが天然の防波堤となり、山田湾は波静かな内湾となっている。船越半島の東端、小根崎から大釜崎にかけては、激しい波食作用を受けて海食崖が発達する。原地山層からなる地域では、崖は一層険しく高くなる。瀧磯東方の赤平付近は、その代表的なもので、高さ300mにも達する。また、船越半島東岸、及び南岸には海食洞が多くみられる。山田湾は、平坦ではなく、織笠川、関川から続く谷が大島の北で合流し、一つの大きな谷となり東へ進む。これに浦の浜、大浦からの谷が合流して深い谷となって黒崎、明神崎の間を通り、小根崎沖に達している。上記のとおり陸からの谷が、海底に続いているのと同様に、陸の尾根も海底に続いているように見える。熊ヶ崎からスギカカリ礁に至る背、門間鼻、大浦崎から海中に続く背等がそれであるが、最も明瞭なのは、浪板崎から小島、大島に至る背である。山田湾は、かつて谷や尾根が沈水したおぼれ谷であることが想定され、このことは山田湾に限らず陸中海岸の主な湾に認められる。

山田町の西部（陸側）は、北上山地の中部東端に位置し、山地の占める割合が大きいが、大槌町と接する高滝森（1160m）から水呑場山（947m）、鳥古山（850m）、山母森（806m）を経て鯨山（610m）に至る尾根は高く険しい。山田町の主な河川は、分水嶺となっているこの尾根の東側を源流として、深いV字谷を刻みながら東へ流れ下る。上流域で侵食。運搬された土砂は、中・下流域で堆積し、小規模とは言え同町では希少な平地を形成している。主要な川である織笠川、関川の場合は、河床勾配が小さくなる田子ノ木、関口神社付近から堆積をはじめている。どちらの川も、川の両側を尾根に挟まれているため、扇状地等の地形は出来難く、幅百数メートルの細長い谷底平地となっている。この両側の尾根は、そのまま山田湾岸まで張り出しているため、河口では三角州の発達は見られない。

(2) 地質

山田町の地質は、地形の相違に関連した分布が見られ、地質の違いが地形に反映されている。本町中央の南北に細長い地域は風化の進んだ花崗岩からなり、本町西部や東部の急峻な地域は粘板岩、チャート、原地山層からなっている。地質分類区分としては、釜石層、花崗岩類、原地山層、これを覆い平地を構成する第四紀新期堆積層とからなる。

釜石層は、釜石圏幅地域に広く発達するものの延長で、北上山地北部型古生層の岩相の典型である。釜石層は大部分粘板岩とチャートからなり、砂岩及び輝綠凝灰岩の薄層があり、レンズ状で比較的小岩体の石灰岩が処々に挟まれている。

花崗岩類は、宮古花崗岩と大浦花崗岩が分布する。宮古花崗岩は、ゴマ塩模様の優白色の岩石で、黒色部は黒雲母、角閃石、白色部は石英、長石類からなる。分布は、豊間根からブナ峠、北浜、織笠、船越に至り、南北に細長い。風化に弱い岩石で、海岸線の露頭を除き風化が進んでいる。風化が進むと、一見硬そうに見えてもスコップなどで簡単に掘ることができる（これをマサと言う）。大浦花崗岩は、大浦の東方に分布し、霞露所の西で原地山層と境する。小谷島東方の海岸に露頭が連続しており、優白色の花崗岩の中に、暗緑色のゼノリス（捕獲岩）を多量に取り込んでいる。宮古花崗岩も大浦花崗岩も釜石層、原地山層に熱変成を与えており、貫入時期は中生代白亜紀前期（一億一〜二千万年前）と考えられている。

原地山層は、山田湾をめぐって3カ所に分かれて分布し、比較的急峻な山体を形成し、崖となって露出している。海岸にはきわめて良好な露頭が連続している（現在、陸路からはほとんど観察することができない）。

岩質は、石英安山岩質の火山砕屑岩類を主とし、少量の頁岩などが挟まれる。走向・傾斜には乱れが多い。しかし、大体の傾向からみると、多くは走向が約N30° E、傾斜が30~60°である。この地域の原地山層は、岩相の相違から2大別することができる。その第1は、この地域の大半を占める凝灰岩頁岩・砂岩・角礫岩などの累層である。第2の岩相は、山田湾北部の分布岩のうち、断層の北東側の岩体の大半がそうである。頁岩や砂岩を含まず、凝灰角礫岩も見られないのが特徴で、層理も不明瞭な所が多く、全体がmassive (塊状) な感じを与える。

第四紀新期堆積層は、主に各河川の上流部に見られる段丘堆積物(河岸段丘上の礫層)と、主に各河川の下流部の山間の谷を埋めている沖積堆積物及び海浜の堆積物(主に砂)とがある。段丘堆積物は、荒川左岸、下野から東部にかけて分布する。コブシ大の礫の多く混じった砂礫からなる。沖積堆積物は、主な河川沿いの平地、湾岸の平地、低地を構成する堆積物である。シルト、砂、礫から成り、場所によって厚さは異なる。

3. 基本層序

今回の調査の基本層序は、5層に大別される。平成9年度調査区(第四次調査)北部と近接することから、基本的に様相は類似する。第四次調査との違いとしては、縄文時代早期の遺物包含層の存在である。所謂無遺物層と捉えていたV層(黄褐色粘土質土層)に類似する層序(IV a層と呼称)から出土している。また、中礫火山灰が縄文時代前期前葉の住居跡の埋土中に見られた。遺構の精査結果からは、Ⅲ層より下位で、IV層より上位に乗るが、遺構の埋土以外からの検出がないため、文化層のキー層にはなりがたい。

- I層 黒褐色シルト(表土) 耕作土あるいは再堆積土で、縄文中期の土器片の他にビニール・ガラス片・杭片など現代遺物の混入が見られた。層厚は10~15cm程である。ほぼ調査区全域を覆う。
- I a層 暗褐色シルト(耕作土) 乾き具合の良い土質で、径2mmのマサ土粒が10~15%混入する。本層の上に乗るI層との区分は比較的明確である。畑地として利用されていた時代の耕作土と思われる。ほぼ調査区全域を覆う。
- I b層 黒褐色シルト(表土・耕作土) ビニール等の現代遺物を含む。調査区東側付近に分布。
- I c層 暗褐色シルト 縄文時代中期及び古代の土器(土師器)片の混入は確認されたが、現代の遺物の混入が見られない。よって、畑に伴う耕作土か若しくは自然堆積層(純層)か判断できなかった。
- Ⅱ層 黒色シルト 20~50cmの層厚で、土器片等の遺物が混入する。ほぼ調査区全域に見られ、古代の遺構は同層中から掘り込まれている。縄文中期の遺構についても、本層から構築されていたと推定されるが、古代の遺構構築に伴い削平を受けている状況である。
- Ⅱ a層 黒褐色シルト 径2mmのマサ土粒が10~15%混入する。遺物の混入はない。調査区南側を中心に分布する。4次調査においてⅡ a層と命名された土層に比定されるものと思われる。
- Ⅲ層 暗褐色シルト ローム起源と推定される土壌で、若干粘性がある。局所的に分布が確認される類いの土壌で、4次調査においてⅡ b層と命名された土層に比定されるものと思われる。今回の調査区においては、p96・q96・q99・r99・s99グリッドにおいて比較的明瞭であった。中期の遺構は本層上位~中位で検出された。層厚は約20cmで、中礫・安家火山灰(約5300年~5500年前に降下)は、本層より下位に見られる。縄文時代前期の遺構は同火山灰の堆積層下位から検出される。
- IV層 暗褐色土シルト質粘土 調査区全域に見られ、中礫火山灰は本層より上位にのる。今回検出された遺構は、本層及びV層を壁や底面とする場合が多い。

IV a 層 黄褐色粘土質土 調査終盤まで無遺物層と捉えていたが、縄文早期中葉の土器がIV層とV層から出土している。野外調査時は明確に把握できなかったが、おそらくはIV層とV層の漸移層的な層序である本層が、早期の遺物包含層であった可能性が高い。

V 層 黄褐色粘土質土(地山) IV a 層で上述したとおりおそらくは本層は無遺物層で、本層の上位に早期の遺物包含層的な層序が存在したと思われる。

<註>

<参考引用文献>

山田町史編纂委員会(1986年) 『山田町史上』山田町教育委員会

地質調査所(1964年) 『大槌・霞露岳』

4. 周辺の遺跡

山田町に所在する遺跡は、岩手県教育委員会が作成した「岩手県埋蔵文化財包蔵地一覧」(1999)によると、165カ所が登録されている。第4図と表1は沢田Ⅰ遺跡を中心とした周辺の遺跡130箇所の分布状況を示したものである。遺跡の分布は主に山田湾を囲む小規模な平地を見下ろす尾根の斜面部(特に大沢、飯岡、織笠などの山田湾北岸及び西岸)、関口川、織笠川、新田川が形成した河岸段丘上、船越湾を望む尾根の斜面部や同湾に注ぐ小河川の谷筋などに多くみられる。

本遺跡の周辺の遺跡としては、西側の山の尾根上に立地する末期古墳や縄文時代中期の堅穴住居跡が検出された房ノ沢IV遺跡が、東側には中世城館で併せて古代の製鉄関連の遺構や縄文時代中期の堅穴住居跡が検出された沢田Ⅱ遺跡がある。また、調査は行われていないため全容は不明であるが、本遺跡の南東側には中世城館である八幡館が、北東側には縄文時代の遺跡である間木戸遺跡がある。当埋蔵文化財センターでは平成2年から9年にかけて、三陸縦貫自動車道路の建設にともなう遺跡の発掘調査を行ってきた。また山田町教育委員会においても、発掘調査を行っている。以下の表にその概要を示す。なお、住居跡等の遺構が検出されたものはその時代を、遺構が検出されない、または時期不明の土坑のみの検出の場合には散布地として、出土遺物の時期を記した。

<岩手県埋蔵文化財センター調査遺跡>

遺跡番号	遺跡名	調査年度	遺構・遺物	報告書No
MG04-0032	細浦Ⅰ遺跡	平成2年	散布地(弥生土器・土師器・石器)	第169集
MG04-0030	細浦Ⅱ遺跡	平成2年	散布地(縄文土器・弥生土器・石器・羽口)	第169集
MG14-0205	湾台Ⅲ遺跡	平成2年	平安時代	第186集
MG14-0204	湾台Ⅱ遺跡	平成3年	縄文時代中期末葉	第186集
MG14-0086	上村遺跡	平成4年	奈良時代、(鍛冶場2、製鉄炉8、木炭窯11)	第202集
LG98-2345	大畑Ⅱ遺跡	平成4,5年	縄文時代中期末葉、平安時代	第218集
LG98-2354	大畑Ⅰ遺跡	平成5年	散布地(縄文土器、羽口)	第218集
MG14-0280	山ノ内Ⅲ遺跡	平成5,6年	縄文時代前期前葉・中期中～末葉、平安時代	第250集
LG94-0032	沢田Ⅰ遺跡	平成6～9,11年	縄文時代前期前葉、中期中葉～後葉、奈良時代、平安時代	第318集

遺跡番号	遺跡名	調査年度	遺構・遺物	報告書No.
MG14-0230	山ノ内Ⅱ遺跡	平成7年	縄文時代中期前葉～末葉、	第249集
LG94-0033	沢田Ⅱ遺跡	平成8年	縄文時代中期後葉～末葉、奈良時代、中世城館、(製鉄炉1、鍛冶炉6、排滓場2)	第268集
LG94-0050	房の沢Ⅳ遺跡	平成8,9年	縄文時代中期後葉～末葉、古墳	第287集

<山田町教育委員会調査遺跡>

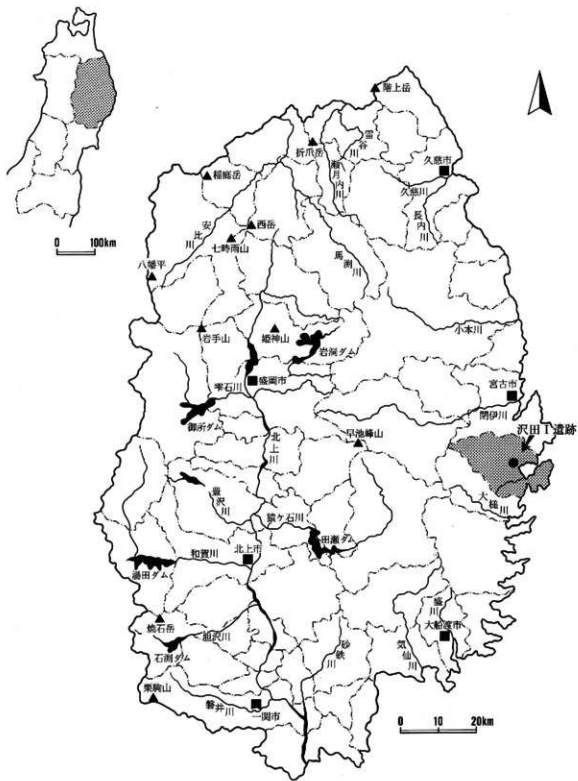
遺跡番号	遺跡名	調査年度	遺構・遺物
MG03-1276	猿神遺跡	平成5年	散布地(縄文時代中期)
MG04-2320	新道貝塚	平成10年	縄文時代中期後葉
LG84-2373	紅山B遺跡	平成10年	
MG04-0063	後山Ⅰ	平成11年	散布地(弥生時代後期)古代の製鉄炉、鍛冶炉、炭窯

また近年本県沿岸部及び北上山系においては、鉄生産に関わる遺跡の発見が相次いでいる。三陸海岸は日本有数の砂鉄の産地であることから、山田町においてもそれは顕著である。同町における製鉄関連として著名な遺跡としては、上村遺跡では8世紀代の製鉄炉と鍛冶炉が、山ノ内Ⅱ・Ⅲ遺跡からは10世紀代の製鉄炉や鍛冶遺構が、沢田Ⅱ遺跡から8世紀の鍛冶工房跡が、また本年度山田町教育委員会が調査した後山Ⅰ遺跡第1次発掘調査現地説明会資料(平成12年3月18日)によると、古代の製鉄・鉄加工作業場3面(工房跡?)、製鉄炉1基、鍛冶炉跡7基、炭窯11基が検出され、鉄滓も300kg出土している。他の遺跡においても鉄滓が出土する例が多い。これらは古代の鉄生産に関連すると思われ、広い地域にわたって製鉄関連遺構が存在する可能性を示唆している。

<註>

<参考引用文献>

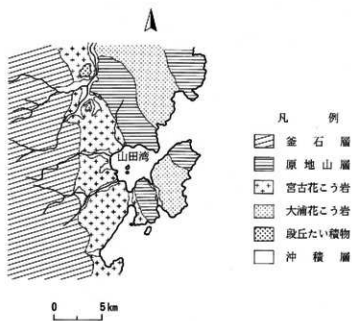
後山Ⅰ遺跡第1次発掘調査現地説明会資料(2000年) 山田町教育委員会



第1図 岩手県図に見る遺跡の位置

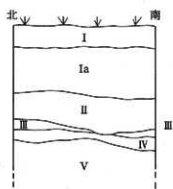
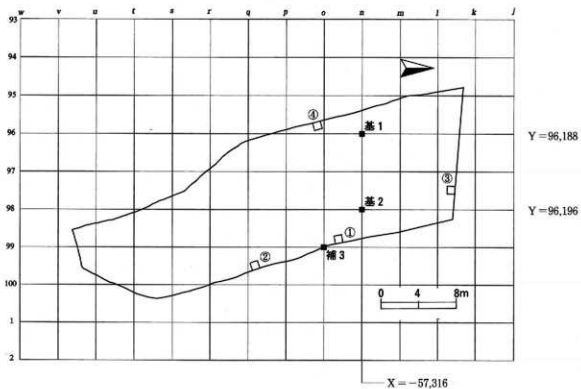


山田町地形概図

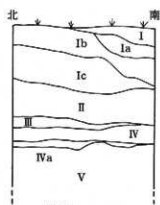


山田町地質概図

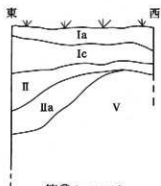
第2図 山田町地形・地質図



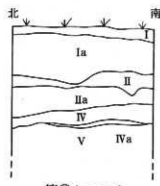
第①トレンチ



第②トレンチ

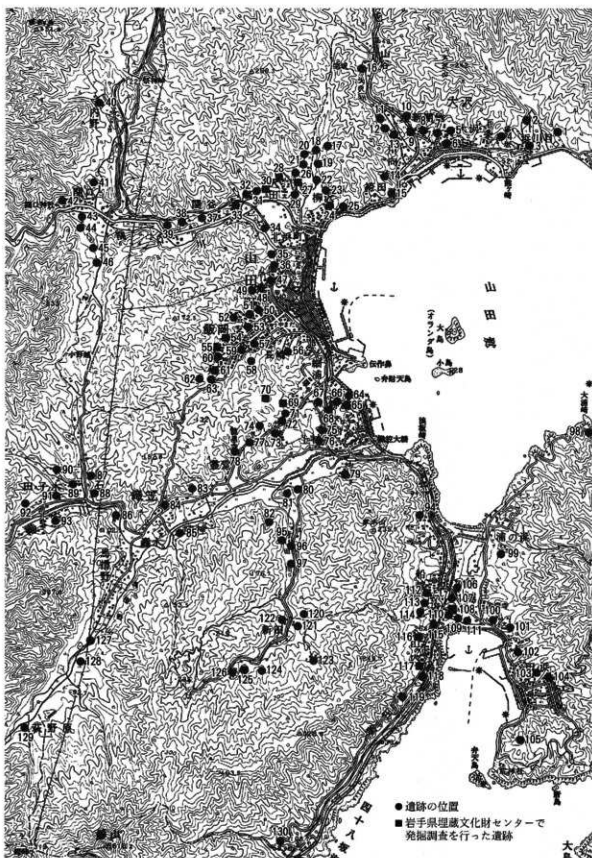


第③トレンチ



第④トレンチ

第3図 グリット図・基本土層



第4図 周辺の遺跡分布図

No	遺 跡 名	種 別	時 代	遺 構 ・ 遺 物
1	多門	製鉄跡	縄文	スラッグ
2	浜川目沢田Ⅲ	集落跡	縄文	縄文土器
3	浜川目沢田Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後・晩期)
4	浜川目沢田Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器
5	紅山B	集落跡	縄文	縄文土器
6	紅山A	散布地	縄文	縄文土器(前・中・後・晩期) 石楯、石鏃、石斧
7	大沢館	城館跡	中世	主郭、腰郭、三重・三重空堀
8	新開地	散布地	縄文	縄文土器、石楯
9	新開地Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
10	新開地Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
11	川向Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
12	川向Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
13	川向Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
14	樽田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
15	樽田Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
16	山谷	散布地	縄文	縄文土器
17	間木戸V	散布地	縄文	縄文土器
18	間木戸IV	集落跡・一層塚	縄文・近世	縄文土器、一層塚
19	間木戸Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
20	間木戸Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
21	間木戸Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
22	柳沢Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器
23	柳沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
24	柳沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
25	柳沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
26	沢田Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
27	沢田Ⅱ(沢田館)	集落跡・城館跡	縄文・古代・中世	縄文土器(中期) 古代製鉄炉
28	沢田Ⅰ	集落跡	縄文・弥生・古代	縄文土器(前期・中期) 弥生土器(初頭)、土師器
29	沢田Ⅳ(八幡館)	散布地・城館跡	縄文・中世	縄文土器、主郭腰郭、空堀
30	房の沢Ⅳ	集落跡・古墳	縄文・古代	縄文土器(中期) 古代(末期古墳)
31	房の沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
32	房の沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
33	房の沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
34	関谷Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
35	関谷Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器
36	関谷Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器
37	関谷Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
38	関谷Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
39	山田館	城館跡	中近世	主郭、二の郭、腰郭空堀、砦
40	内野	集落跡・製鉄跡	縄文	縄文土器、土師器ふいて口、鉄滓
41	関口Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器、土師器
42	関口Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
43	上野Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)
44	上野台Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、土師器、須恵器、磨製石斧
45	上野台Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
46	上野台Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器
47	八幡館	城館跡	中世	主郭、腰郭、空堀
48	長崎Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
49	長崎Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
50	長崎Ⅲ	城館跡	中世	
51	長崎Ⅳ	城館跡	中世	
52	小沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
53	小沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器
54	大畑Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器(中期)
55	大畑Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器(中期)
56	飯沼Ⅲ	散布地	縄文	
57	飯沼Ⅰ(飯沼館)	城館跡	中世	主郭、腰郭、空堀
58	飯沼Ⅱ	城館跡	中世	
59	飯沼Ⅳ	散布地	縄文	
60	長野Ⅰ	散布地	縄文	
61	長野Ⅱ	散布地	縄文	
62	赤松Ⅰ	散布地	縄文	
63	赤松Ⅱ	散布地	縄文	
64	跡浜Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器
65	跡浜Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器

第1表 周辺の遺跡

No.	遺 跡 名	種 別	時 代	遺 構 ・ 遺 物
66	細浦VI	散布地	縄文	縄文土器
67	細浦IV	散布地	縄文	縄文土器
68	細浦V	散布地	縄文	縄文土器
69	細浦I	散布地	縄文	縄文土器、弥生土器、鉄滓
70	細浦II	散布地	縄文	縄文土器
71	細浦III	散布地	縄文	縄文土器
72	後山I	散布地	縄文	縄文土器、土師器石斧、フレーク
73	後山II	散布地	縄文	縄文土器
74	後山III	集落跡	縄文	縄文土器、弥生土器、土師器、鉄滓
75	上	集落跡	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器
76	上村	工房跡	古代	古代製鉄炉、弥生土器
77	熊泉寺一里塚	一里塚	近世	
78	礼堂	散布地	縄文	縄文土器
79	草木	散布地	縄文	縄文土器
80	越田	城館跡・貝塚	縄文	縄文土器、土師器貝塚
81	坊主山II(坊主山跡)	城館跡	中世	主郭・腰郭・堀
82	坊主山I	集落跡	縄文	縄文土器
83	織笠館	城館跡	中世	主郭、二の郭、腰郭、空堀等
84	猿神	集落跡	縄文	縄文土器(前・中期)、土師器
85	轟木	集落跡	縄文	縄文土器(中期)、土師器
86	創立	集落跡	縄文	縄文土器、鉄滓
87	白石II	散布地	縄文	縄文土器
88	白石I	集落跡	縄文	縄文土器
89	白石III	散布地	縄文	縄文土器
90	田茂沢	集落跡	縄文	縄文土器、土師器、灰輪
91	日当II	散布地	縄文	縄文土器
92	日当I	集落跡	縄文	縄文土器、弥生土器、鉄滓
93	日輪	散布地	縄文	縄文土器
94	長林	散布地	縄文	縄文土器
95	板井沢III	散布地	縄文	縄文土器、土師器
96	板井沢II	散布地	縄文	縄文土器
97	板井沢I	散布地	縄文	縄文土器
98	大崎崎	貝塚生産跡	縄文	縄文土器、焼石、灰
99	新道貝塚	貝塚	縄文	縄文土器、鉄滓
100	船越御所(船越東館)	城館跡	中世	主郭、腰郭、空堀、砦
101	岩ヶ沢	集落跡	縄文	縄文土器
102	早川	集落跡	縄文	縄文土器
103	田の浜館(早川館)	城館跡	中世	主郭、腰郭、空堀、砦
104	大源貝塚	貝塚集落跡	縄文	縄文土器
105	小川の御所	城館跡	中世	主郭、二の郭、三の郭、腰郭空堀
106	船越館	城館跡	縄文	縄文土器、土師器、帯郭
107	湾台I	集落跡	縄文	縄文土器
108	湾台II	集落跡	縄文	縄文土器(中期)
109	湾台IV	散布地	縄文	縄文土器
110	湾台III	集落跡	縄文・古代	土師器(早安)
111	湾台V	散布地	縄文	縄文土器
112	船越I	散布地	縄文	縄文土器
113	船越II	散布地	縄文	縄文土器
114	船越西館	城館跡	中世	主郭、腰郭、空堀、砦
115	山ノ内I	城館跡	中世	
116	山ノ内II	集落跡	縄文・古代	縄文土器(前期・中期)、土師器(奈良・平安)、古代製鉄炉
117	山ノ内III	集落跡	縄文	縄文土器(中期)
118	滝の沢	散布地	縄文	縄文土器
119	家の沢			
120	新田I	集落跡	近世・縄文	縄文土器、土師器、中世陶器鉄器
121	新田II	散布地	縄文	縄文土器、土師器
122	山成	散布地	縄文	縄文土器(早・末期)
123	轟面沢	散布地	縄文	縄文土器
124	大石平	散布地	縄文	縄文土器(後期)、石斧
125	天王平	集落跡	縄文	縄文土器、弥生土器、鉄滓
126	猿崎沢	散布地	縄文	縄文土器
127	萩野沢	集落跡	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器
128	萩野平I	集落跡	縄文	縄文土器
129	萩野平II	集落跡	縄文	縄文土器(後期)
130	大沢川	散布地	縄文	縄文土器(中・後・晩期)石斧

Ⅲ. 調査方法と整理方法

1. 野外調査

(1) 調査の経過について

沢田1遺跡は、山麓斜面地から山裾際の緩斜面地にかけて広範囲に分布し、遺跡の総面積は40,000～45,000㎡と推定される。過去4年間の調査地は、集落の中心に相当する部分を調査している。今年度の調査地は、本遺跡における北西端に相当する部分となる。

(2) 調査区の設定と遺構の呼称

本遺跡の調査区域は、東西約16m、南北約40m、北西～南東方向に最大長をもつ。調査区の設定は、基準点測量を委託し、平面直角座標系第X系を利用して調査区域を網羅できるように設定した。設定した基準点1・2及び補点1～4の成果値は以下のとおりである。

基準点1 X=-57,316.000 Y=96,188.000 H=25.077m

基準点2 X=-57,316.000 Y=96,196.000 H=24.358m

補点1 X=-57,292.000 Y=96,188.000 H=23.445m

補点2 X=-57,300.000 Y=96,196.000 H=22.493m

補点3 X=-57,320.000 Y=96,200.000 H=24.526m

補点4 X=-57,352.000 Y=96,200.000 H=24.717m

調査区は過去の調査の延長でグリッド設定を行った。4m毎に小区画し、北側～南側に向かってa～zの名称を付け、西側～東側に向かって1～100の名称となる。遺物の取り上げや遺構名の命名は、北西を起点としており、遺構名は調査区名と遺構の種類を組み合わせる形でm98住居跡1号、q98土坑1号などと呼称した。遺構が二つ以上のグリッドにかかる場合は、検出時のプランで北端が含まれるグリッドで遺構名を命名した。基準点やグリッドについては、第3図を参照載きたい。

(3) 掘掘り・遺構精査

当初約2×2m程のトレンチを13カ所に入れ、遺跡の状況把握に努めた。第3図はトレンチを入れた地点を示す。その結果、調査区を流れる沢の南側調査地は、全面に遺構が広がる可能性が予期できた。北側は遺構・遺物共に皆無な状況であった。

遺構の精査は、住居跡を4分法、土坑等その他の遺構は原則として2分法を採用した。竪穴住居跡を例に取り上げその手順を説明する。

まず、4分と土層観察用のベルトを設定し、各分割区は北東を起点にQ1～Q4と時計回りに呼び、遺物の取り上げの際の単位とした。各区ごとに埋土を掘り下げて床面を検出した。次に土層の写真撮影を行い、断面図を作成した後に除去した。

床まで掘り下げた後の作業は、柱穴・ピット等の精査を行い、写真撮影・平面実測を終えた後に炉の精査を行った。床面の定かでないもの（貼床もしくは下部住居跡埋土）は、柱穴の検出のため写真撮影・平面実測終了後に、だめ押し的に掘り下げ確認に努めた。

2. 室内整理

室内整理については、平成11年9月1日から平成12年3月31日までの7カ月間の室内整理を実施した。よって、調査員は平成11年9月1日～9月30日まで野外調査と並行して行った。

(1) 遺構図面

遺構図面は、野外調査時は平面図、断面図ともに縮尺1/20を原則とし、必要に応じて1/5、1/10で作成を行った。必要に応じて、それらを修正・合成した第二原図を作成し、トレースを行った。

(2) 遺物

遺物は、洗浄（遺物水洗）と出土地点ごとの仕分けを現場で野外調査と並行して進めた。注記・接合・復元を行った後に、登録・選別の作業を行った。

(3) 写真

野外調査中に撮影した写真は、フィルムの規格ごとにモノクロはネガアルバムに、リバーサルフィルムはスライドアルバムに、ポラロイドはインスタントフォトアルバムに整理した。

(4) 報告書について

報告書の執筆については、星 雅之、前田 稔が行った。執筆の分担については、Ⅰ～Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ章を星が、Ⅱの一部とⅣ章及び各種表の作成を前田が主に担当している。

<遺構の記載> 遺構の事実記載は、住居跡については縄文時代前期・中期、古代の順に行い、土坑、集石と続く。

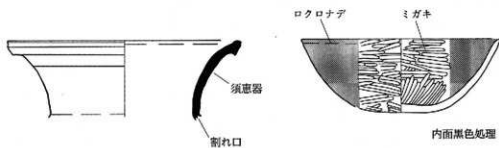
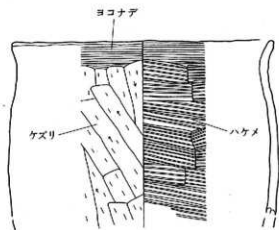
<遺物の掲載> 掲載遺物は、掲載順に1から連番を付けている。遺物掲載番号は、図版・写真とも同一の番号である。時間の関係で写真のみを掲載する遺物もある。

<遺構図版> 遺構図版は、1/60を基本とするが、遺構の性格に応じて縮尺を変えている。但し、三角スケールで計測できる定型縮尺とし、挿図の右下にスケールを付けている。掲載順は遺構の事実記載に準じている。

<遺物図版> 遺物図版は、土器類を1/3を基本として大きさにより1/4・1/5、石器類を2/3～1/2で掲載した。

<遺構写真図版> 遺構写真図版は、全て任意である。掲載順は、事実記載や遺構図版と同様である。

<遺物写真図版> 遺物写真図版は、土器類1/3・石器類2/3or1/2を基本とする。



焼土



中継火山灰



炉石



土器



石



柱穴



敲打痕



磨面



陰帯剥落

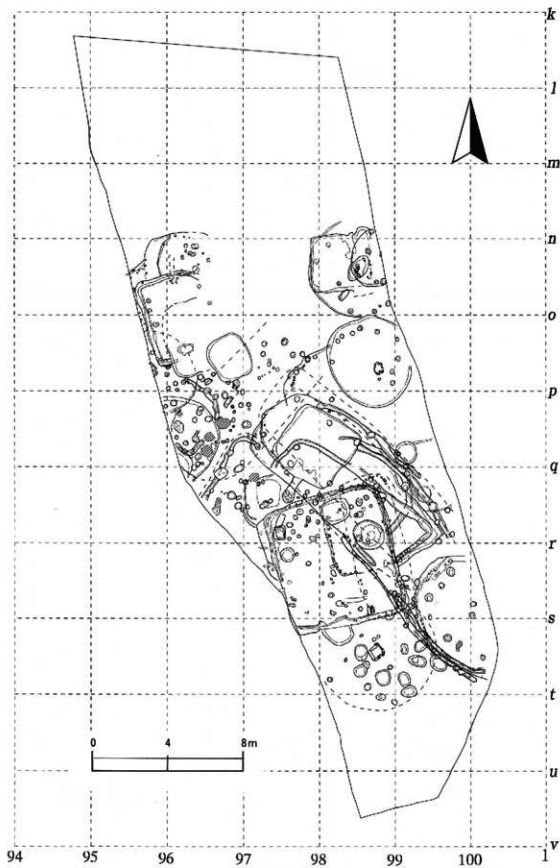


黒色処理

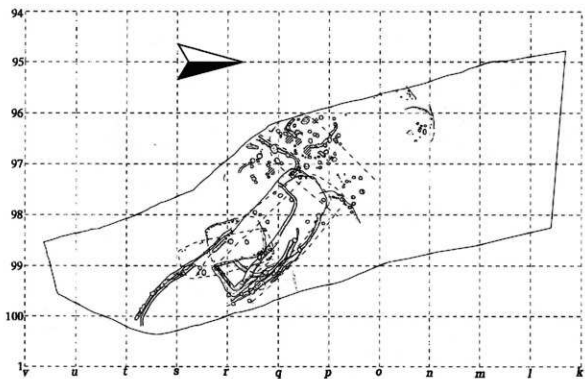


剥落・欠損

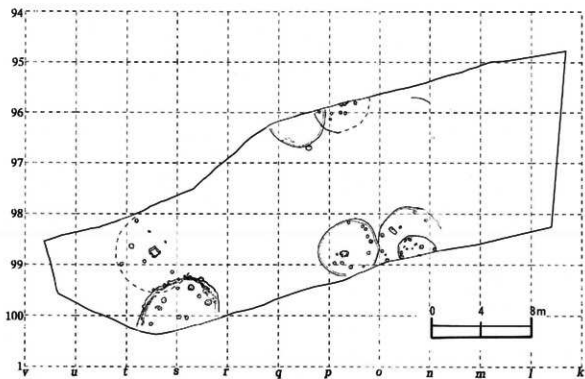
第5図 凡例



第6圖 遺構配置圖

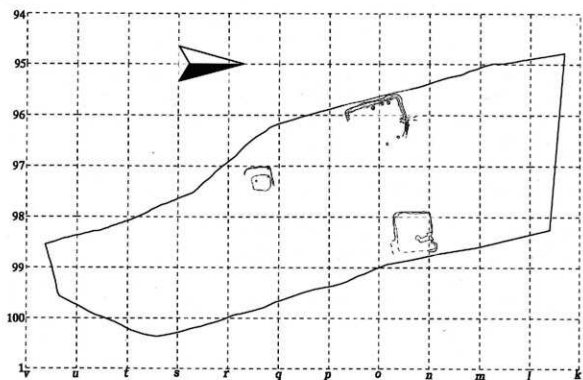


繩文時代前期住居跡

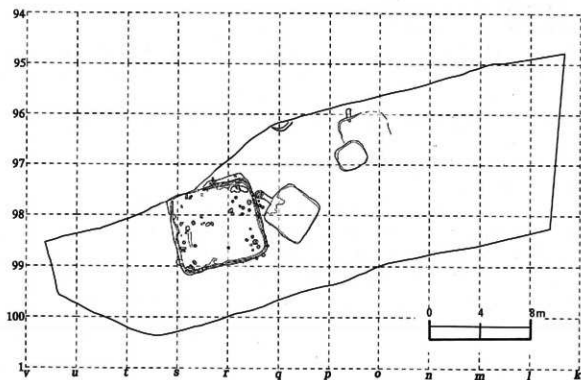


繩文時代中期住居跡

第7圖 時期毎住居跡 I



奈良時代住居跡



平安時代住居跡

第8図 時期毎住居跡Ⅱ

IV. 検出された遺構

検出された遺構は、住居跡30棟、土坑8基、集石1基である。時代は、縄文時代前期～古代に亘り、遺構の時期は縄文時代前期前葉・中期中葉～後葉、古代（奈良・平安）と大きくは4時期に大別される。

第6図に全体の遺構配置図（縮尺1/200）を、第7・8図には各時期毎の住居跡分布図（縮尺1/200）を掲載している。

個々の遺構の記載は、住居跡については縄文時代前期、中期、古代の順で行う。土坑はグリッド順とする。遺構埋土の記載について、自然堆積層か人為堆積層かは、本遺跡で主体的に見られる黒褐色土を使用して埋め戻されている場合が多く、その判断は容易ではない場合も多い。

縄文時代の遺構の時期については、出土した土器の時期を概ね以下のように捉え記述する。大木1～2 a式=前期前葉、大木8 b式=中期中葉、大木9式=中期後葉

古代の遺構については、ロクロ使用を一つの基準とした。ただし、全般に出土遺物が皆無な遺構が多い。よって、住居跡の場合は、カマドの方向と遺構の検出面、遺構同士の重複関係などから奈良時代と平安時代の区分を試みた。

1. 住居跡

第5次調査で検出された住居跡は、推定されるものを含め、大きくは縄文時代前期・中期および古代に分かれる。時期毎に記載する。

(1) 縄文時代前期の住居跡

n95住居跡1号（第9図、写真図版5）

<検出状況> 調査区北西部のn95グリッドにおいて、II層下位で検出した。遺構北壁は本遺跡の地山を掘り込んでいる。遺構西側は調査区外に延び、東側はn95住居跡4号に、南側はn95住居跡2号により削平を受けている。

<重複関係> 本遺構東側のn95住4号と南側のn95住居2号と重複関係にあり、双方に切られていることから本遺構が最も古い。

<形状、規模> 北壁の一部のみの検出であるため形状・規模は不明である。

<床面積> 不明である。

<埋土> 黒褐色シルトの単層（第15図第15層）で構成されており、強く締まっている。

<壁、床> 削平を受けているが、壁は外傾し壁高は10cm程である。床面は平坦で強く締まっている。壁溝は一部検出され、中に小穴が設けられている。褐色粘土質土を埋土とする。

<柱穴> 小穴が5基検出された。PP2～PP5は壁柱穴である。PP1は規模からみて主柱穴ではない。

柱穴No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5
開口部径(cm)	10×7	7×7	7×7	5×5	7×7
深さ(cm)	10	10	8	10	6

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 縄文時代早期及び前期の土器片が数片出土している。

<時期> 出土している土器からは縄文時代早期中葉～前期前葉と捉えられる。ただし、検出面等を加味す

ると前期前葉と推定される。

n95住居跡3号（第9図、写真図版5）

<検出状況> 調査区北西部のn96グリッド付近において、n95住居跡2号煙道部精査中に、本住居の立ち上りの一部を確認した。プランはⅡ層下位での検出である。

<重複関係> 南側でn95住居跡2号と西側でn95住居跡4号と重複関係にある。n95住居跡2号に切られ、また本住居はn95住居跡4号の床面下位から検出されているため、本遺構が最も古い。

<形状、規模> 西壁の一部のみの検出であるため、不明である。

<床面積> 不明である。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする2層で構成されている。

<壁、床> 壁は最下部だけの残存であり詳細は不明である。検出された壁は外傾し、緩やかな立ち上がりを見せる。床面は凹凸があり堅く締まっている。壁溝は検出されなかった。

<柱穴> 10基検出された。PP1～PP2は壁柱穴と思われる。PP3～PP5も壁柱穴の可能性はあるが、壁が検出できなかったため不明である。

柱穴№	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	10×8	11×9	9×9	10×8	9×7	22×20	22×19	12×11	22×19	9×9
深さ(cm)	9	10	10	4	5	24	27	5	13	14

<灰> 床面に40×35cm程の不整形の焼土が検出され、様相から地床灰と推定される。

<出土遺物> 縄文時代早期中葉～前期前葉の土器が出土している。主体を占める前期前葉の土器は、埋土中位より比較的多く出土している。

<時期> 出土している土器からは縄文時代早期中葉～前期前葉と捉えられる。ただし、検出面等を加味すると前期前葉と推定される。

o96住居跡2号（第9図、写真図版6）

<検出状況> 調査区中央部から西側のo96グリッドで、p95住居跡3号の床面下部の精査中にⅣ層で本住居の壁溝を検出した。

<重複関係> p95住居跡3号と重複関係にある。壁溝がp95住居跡3号地床灰の下部に延びているので、本遺構の方が古い。

<形状、規模> 壁溝の一部のみの検出のため、不明である。

<床面積> 不明である。

<埋土> n95住居跡3号の床面下部にあるため、埋土は検出されなかった

<壁、床> 壁は検出されなかった。壁溝が検出された床面と想定される面は凹凸がみられ、堅く締まっている。

<柱穴> 15基検出した。プランが明確でないため不詳である。PP2～PP5・PP14・PP15はp95住居跡3号で使用された可能性がある。PP6～PP13は壁柱穴と推定される。

柱穴№	PP 1	PP 2	PP 3	PP 4	PP 5	PP 6	PP 7	PP 8	PP 9	PP10
開口部径(cm)	24×20	40×34	37×31	27×23	24×20	19×18	25×21	19×16	14×11	11×9
深さ(cm)	8	15	6	20	5	21	19	16	19	18
柱穴№	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15					
開口部径(cm)	12×11	27×23	44×21	39×27	21×19					
深さ(cm)	27	20	23	17	16					

<炉> 検出できなかった。

<出土遺物> 縄文時代早期中葉の土器片1点が壁溝より出土している。

<時期> 出土している土器からは縄文時代早期中葉の可能性が示唆されるが、壁溝の形態や検出面等を加味すると前期前葉の可能性が高い。

○97住居跡1号（第9図、写真図版7）

<検出状況> 調査区中央部北側○97グリッドのⅢ層下位で、中燧火山灰を埋土とする本遺構を検出した。

<重複関係> ○97住居跡2号、○98住居跡1号、p97住居跡2号、p97住居跡3号と重複関係にある。付近は重複が激しく全容は不明であるが、本遺構は○97住居跡2号・p97住居跡2号・p97住居跡3号を切り、○98住居跡1号に切られていることから、○97住居跡2号・p97住居跡2号・p97住居跡3号よりは新しく、○97住居跡1号よりは古い。

<形状、規模> 遺構の大部分は削平されていることから、平面形・規模の詳細が不明である。

<床面積> 不明である。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする5層で構成されている。1層は中燧火山灰混入層であり、中燧火山灰を取りまくにぶい黄褐色ロームは砂を少量含有する。自然堆積と思われる。

<壁、床> 壁は緩やかに立ち上がる。壁高は15～19cmを測る。床は平坦で堅く締まっている。壁溝は検出できなかった。

<柱穴> 柱穴・柱穴状土抗26基を検出した。PP1～PP2、PP5～PP8、PP10～PP12の小穴は壁柱穴と思われるが、深さにちらばりがある。PP4、PP7、PP15は本遺構の主穴と思われる。他の柱穴状土抗も本遺構あるいは別の遺構に伴う柱穴と推定される。

柱穴№	PP 1	PP 2	PP 3	PP 4	PP 5	PP 6	PP 7	PP 8	PP 9	PP10
開口部径(cm)	13×13	16×13	16×13	36×32	13×12	13×11	13×12	14×12	32×28	15×13
深さ(cm)	7	15	15	20	3	7	4	9	8	10
柱穴№	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20
開口部径(cm)	12×12	12×12	30×28	18×16	20×18	12×12	13×12	32×21	32×32	22×22
深さ(cm)	9	9	16	5	17	10	12	6	14	17
柱穴№	PP21	PP22	PP23	PP24	PP25	PP26				
開口部径(cm)	18×11	26×26	36×34	30×28	36×30	16×14				
深さ(cm)	16	15	20	18	19	14				

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 縄文時代前期前葉の土器片が数点出土している。16・19～23が床面からの出土で、何れも前

期前葉の土器である。21・22は、縄文原体の筋が他と比べて大きい特徴がある。

<時期> 出土している土器や中坩火山灰を埋土中を含む状況から、縄文時代前期前葉と推定される。

○97住居跡2号(第9図)

<検出状況> 調査区中央部、○97グリッドにおいて、○97住居跡1号精査終了後、壁を削平したところ、壁溝の一部を検出した。○97住居跡1号の壁の外側にめぐることから別住居と判断し、○97住居跡2号とした。p97～r99グリッド付近で、比較的同規模で配列が整っている柱穴が10基検出されており、これらを柱穴とするロングハウスと呼ばれる大形住居になると思われる。

<重複関係> ○97住居跡1号、p97住居跡1号、p97住居跡2号、p97住居跡3号、p97住居跡4号、r97住居跡1号と重複関係にあるが、そのすべてに切られていることから、本遺構が最も古い。

<形状、規模> 詳細は不明であるが、壁溝の一部および柱穴の配列から、長軸が11m以上、単軸が柱穴列間3～3.7m程である長方形形状を呈していたと思われる。

<床面積> 不明である。

<埋上> 他住居に削平され、残っていない。

<壁、床> 壁は検出できなかった。床は黄褐色粘土質土で堅く締まっている。壁溝は北部に一部検出でき、埋土は褐～暗褐色シルトでやや締まりがある。

<柱穴> 柱穴を10基検出した。いずれも主柱穴と思われる。長軸方向の柱穴間は2.5～3.25m、短軸方向の柱穴間は3～3.5m程を測る。

柱穴No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	31×25	30×25	43×36	31×30	28×26	38×27	41×32	35×30	40×30	25×21
深さ(cm)	10	15	15	—	25	45	50	36	14	25

<炉> 検出できなかった。

<出土遺物> 本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

<時期> 柱穴配列等から推定される住居の形状から、縄文時代前期前葉と推定した。

p95住居跡3号(第10図、写真図版9・10)

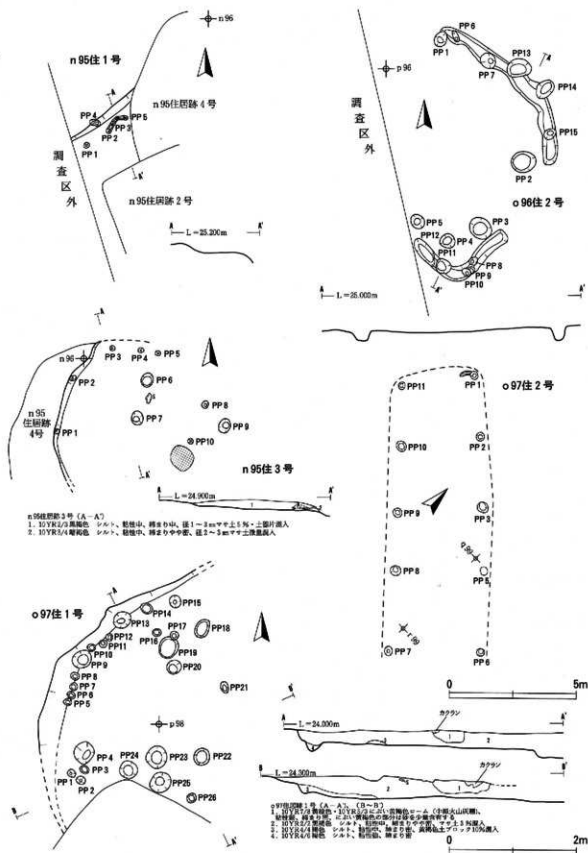
<検出状況> p96グリッドIV層において試掘トレンチを入れたところ、北東～南西方向に並ぶ3基の地床炉を検出した。プランは検出できず、土層断面で壁の立ち上がりを確認して住居と判断した。周辺から柱穴が多数検出され、これらを柱穴とするロングハウスと呼ばれる大形住居になると思われる。

<重複関係> ○96住居跡1号・○96住居跡2号・○97住居跡2号・p95住居跡1号・p95住居跡2号・p96住居跡1号・p97住居跡2号・p97住居跡3号と重複関係にある。○96住居跡2号、p96住居跡1号は本遺構の床面から検出されたこと、他の遺構は本遺構を切っていることから、本遺構は○96住居跡2号・p96住居跡1号より新しく、○96住居跡1号・○97住居跡2号・p95住居跡1号・p95住居跡2号・p97住居跡2号・p97住居跡3号よりは古い。

<形状、規模> 詳細は不明であるが、掘土・柱穴の配列から、長軸が10m以上、短軸が柱穴列間3.5～4m程である隅丸長方形形状を呈していたと思われる。

<床面積> 不明である。

<埋土> 黒褐色土を主体とする20層で構成される。2層系・3層系は中坩火山灰に伴う土層である。



第9図 n95住1・3号、n96住2号、n97住1・2号

<壁、床> プランは把握できなかったが、土層断面によると壁は外傾し壁高は23~28cm程を測る。床面はやや凹凸がみられ、締まりがある。壁溝は検出できなかった。

<柱穴> 20基検出した。PP6とPP12は主柱穴と推定される。PP8・PP9・PP14・PP17・PP18・PP19の配列から、建て替えあるいは他住居の存在が考えられる。

柱穴№	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	32×32	32×31	33×30	30×25	51×35	72×56	32×31	26×23	38×33	38×30
深さ(cm)	14	21	13	29	27	41	10	10	19	6
柱穴№	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20
開口部径(cm)	22×21	69×49	33×25	33×32	41×32	36×25	33×30	35×30	42×34	29×28
深さ(cm)	5	43	11	14	21	17	15	21	27	9
柱穴№	PP21									
開口部径(cm)	32×28									
深さ(cm)	12									

<炉> 本遺構に伴うと思われる地床炉は3基である。2m50cm程の周囲に、南西-北東方向で並ぶ楕円が窺える。個々の焼土は焼土列的なものではなく、20~30cmの距離をもって点在する。焼土の発達は全般に悪い。

	焼土A	焼土B	焼土C
形状	不整形	不整形	不整形
規模(cm)	80×59	75×46	79×54
層厚(cm)	8	7	8

<出土遺物> 縄文時代早期中葉及び前期前葉の土器が主に埋土中〜下位で出土している。出土の主体は前期前葉に相当する土器片であるが、何れも小破片である。また、本遺跡に限らずこの地域で希少な早期中葉の吹切刃式相当の上器片が相当数得られていることから、掲載にあたっては早期中葉土器を主体とした。

25・33に見られる半箆竹管文は、先端が二段状に加工されたものを用いて施文されていると推定される。29の外面は剥落が激しい。37は物見台式の可能性がある。44・45は大木2a式に比定されるが、円筒式土器の影響が窺える土器と言える。51・52は波状に粘土紐が貼り付けられ、胎土中に植物繊維の混入が見られない等の特徴から、大木4式相当と推定される。

石器は、磨石2点・石鏃2点・打製石斧(欠損品)2点・石核1点・石匙(未製品)1点・フレック1点・Rフレ1点が出土した。磨石は埋土中および埋土下位から1点ずつ、石鏃は埋土中位および床面下部から1点ずつ、打製石斧・石核・石匙・フレック・Rフレは埋土中からの出土である。

<時期> 出土している土器からは縄文時代早期中葉〜前期中葉と捉えられる。ただし、検出面および住居の形態等からは前期前葉と推定される。

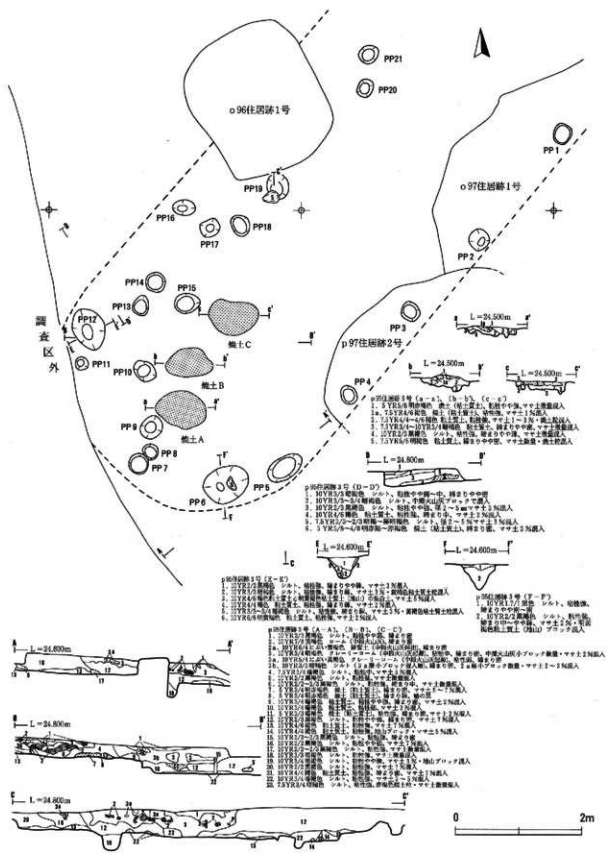
p96住居跡1号(第11図、写真図版6)

<検出状況> 調査区中央部西側のp96グリッドにおいて、p95住居跡3号の床面下部精査中、壁溝の一部を検出した。IV層での検出になる。

<重複関係> p95住居跡3号と重複関係にある。p95住居跡3号の床面下部から検出したことから、本遺構が古い。

<形状、規模> 壁溝の一部のみの検出のため不明である。

<床面積> 不明である。



第10図 p95住3号

<埋土> 検出できなかった。

<壁、床> 壁は検出できなかった。床面は凹凸があり、堅く締まっている。

<柱穴> 柱穴8基を検出したが、本住居に伴う柱穴は不明である。PP3は、柱穴底部にさらに落ち込みがあり、径8cmの円形で柱穴底からの深さは15cm程である。

柱穴No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8
開口部径(cm)	54×44	44×26	32×30	21×19	27×20	30×26	26×25	19×13
深さ(cm)	34	21	12	18	18	13	20	6

<炉> 本遺構に伴うと思われる地味炉1基を検出した。不整形を呈し、規模は49×47cm程、層厚は5cmを測る。

<出土遺物> 本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

<時期> 時期を判断する出土遺物はない。検出面等を加味し縄文時代前期前葉と推定した。

p97住居跡2号(第11図、写真図版8)

<検出状況> 調査区中央部p97グリッドにおいて、p97住居跡1号の壁面の精査中、本住居壁の立ち上がりを確認した。上位は擾乱を受けている。またp97～r99グリッドにおいて、本住居のものと思われる柱穴・壁溝を検出した。これらから、本住居はロングハウスと呼ばれる大形住居になると思われる。

<重複関係> o97住居跡2号、p96住居跡1号、p97住居跡1号、p97住居跡3号、p97住居跡4号と重複関係にある。p97住居跡1号に切られ、他の遺構を切っていることから、本遺構はp97住居跡1号より古く、他の遺構よりは新しい。

<形状、規模> 詳細は不明であるが、壁溝の一部および柱穴の配列から、長軸が12m以上、短軸が柱穴列間3.2～3.7m程である長方形形状を呈していたと思われる。

<床面積> 不明である。

<埋土> 埋土は40層に細分される。上位には中礫火山灰を含む。

<壁、床> 壁の残存状況が悪く、検出されたのは北西壁・南西壁の一部であるので詳細は不明であるが、北西壁で47cm、南西壁で38cm程を測り、床面からやや急傾斜で立ち上がる。床面は黄褐色粘土質土で堅く締まっている。壁溝は住居北東壁、南西壁際でその一部が検出された。壁溝内は凹凸が激しく、深さは南東壁際で6～38cm、南西壁際で7～47cmを測る。また壁溝の周る向きから、本遺構は建て替えが行われたものと予測される。

<柱穴> 主柱穴および壁柱穴と思われる柱穴20基検出された。PP1～PP10が主柱穴、PP11～PP20が壁柱穴と思われる。PP20は柱穴底部中央部がさらに6cm程掘られており、最底部には石が存在した。長軸方向における主柱穴間の距離は3.3～3.7mを測る。

柱穴No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	36×32	36×32	40×36	54×46	32×26	52×30	38×36	35×32	28×23	34×28
深さ(cm)	21	25	-	22	-	21	7	13	-	14
柱穴No	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20
開口部径(cm)	20×12	16×12	16×14	17×13	16×14	16×17	16×12	12×12	14×12	14×13
深さ(cm)	17	12	14	-	19	8	7	3	5	5

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 縄文時代早期～前期前葉の土器が埋土上～下位で出土している。主体は前期前葉である。木遺跡出土では稀な大木1式に先行する上川名Ⅱ式相当の土器小片も数点見られた。

石器は埋土最上位から石匙1点と石鏃1点が、埋土中から磨製石斧1点が出土している。

<時期> 中環火山灰下降時期より古いことは確実である。出土土器の主体が縄文時代前期前葉であることから、該期の住居跡と推定される。

p97住居跡3号（第12図、写真図版8）

<検出状況> 調査区中央部p97グリッドにおいて、p97住居跡2号精査終了後、暗褐色土を埋土とするプランの一部を検出した。p97住居跡2号壁面から立ち上がりを確認できる。またp97～r99グリッドにおいて本遺構に伴うと思われる壁溝を検出したことから、本住居はロングハウスと呼ばれる大形住居になると思われる。

<重複関係> o97住居跡2号、p97住居跡1号、p97住居跡2号、p97住居跡4号と重複関係にあるが、o97住居跡2号を切り、他の遺構には切られていることから、o97住居跡2号よりは新しく、他の遺構よりは古い。

<形状、規模> 詳細は不明であるが、西壁および壁溝の一部や柱穴の配列から、長軸が18m以上、単軸が柱穴列間2.6～3.8m程である長方形形状を呈していたと思われる。壁溝が二重に巡っていることから建て替えがあった可能性がある。

<床面積> 不明である。

<埋土> 検出できなかった。

<壁、床> 検出された壁は西壁の一部のみである。直立気味で壁高は10.3～14.7cmを測る。床面は削平が激しく詳細は不明であるが、南西方向に緩やかに傾斜する。北東壁溝は深さ6～17cm、南西壁溝は深さ5～31cmを測り、いずれも南西側に向かって深くなる。南西壁溝内には不規則な間隔で小穴がうがたれている。

<柱穴> 14基を検出した。PP1～PP10が主柱穴と思われる。PP1～PP5の北側にまわる柱穴PP11～PP14は本住居の副穴あるいは建て替え時の主穴であった可能性がある。

柱穴№	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	35×32	38×30	43×34	64×64	32×28	36×30	40×38	28×20	42×30	30×26
深さ(cm)	21	25	—	22	—	—	19	20	—	23
柱穴№	PP11	PP12	PP13	PP14						
開口部径(cm)	38×32	48×34	46×40	50×48						
深さ(cm)	27	15	—	29						

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

<時期> 遺物は出土していないことから明確な時期は判断できない。壁溝や柱穴配列のあり方から縄文時代前期前葉の大形の住居跡と推定される。

p97住居跡4号（第12図、写真図版8）

<検出状況> 調査区中央からやや南寄りのp97～q99グリッドに位置し、Ⅲ層下位で検出した。住居北東部の壁溝のみが残存し、他は不明である。

<重複関係> o97住居跡2号、p97住居跡1号、p97住居跡2号、p97住居跡3号・p98住居跡1号と重複関係にあるが、p97住居跡1号・2号の床面下位から検出され、p97住居3号を切っていることから、本住居はp97住居跡3号よりは新しくp97住居跡1号・2号よりは古い。また状況から本遺構はp98住居跡1号の立て替えと考えられ、本遺構が新しい。

<形状、規模> 壁溝の一部のみの検出であることから詳細は不明であるが、長軸が9m程の長方形の平面形を呈するものと考えられる。

<床面積> 不明である。

<埋土> 不明である。

<壁、床> 壁溝は、開口部径27～53cm、底部径11～36cmを測る。壁溝内に深さ41～45cmの小穴がうがたれている。

<柱穴>14基検出した。PP2・PP4・PP5・PP6については本遺構に伴うものかは不明である。他は壁柱穴と思われる。

柱穴№	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	14×10	30×22	24×18	34×28	24×24	48×32	22×18	20×18	24×33	18×14
深さ(cm)	8	9	—	20	25	34	21	13	17	24
柱穴№	PP11	PP12	PP13	PP14						
開口部径(cm)	38×16	26×14	6×8	22×18						
深さ(cm)	18	42	—	45						

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

<時期> 遺物が出土していないことから明確な時期は判断できない。壁溝や柱穴配列のあり方から縄文時代前期前葉の大形の住居跡と推定される。

p98住居跡1号（第12図、写真図版8）

<検出状況> 調査区中央から南東よりのp98グリッドに位置し、Ⅲ層下位で本遺構の北・東壁の一部を検出した。

<重複関係> p97住居跡2号・p97住居跡4号と重複関係にある。本遺構はp97住居跡2号の床面下位から検出されていることから、本遺構が古い。また状況から本遺構を建て替えたものがp97住居跡4号である可能性が考えられ、本遺構が古い。

<形状、規模> 壁の一部のみの検出であるので、詳細は不明である。

<床面積> 不明である。

<埋土> 不明である。

<壁、床> 検出された壁は1～14cm程を測る。

<柱穴> 検出できなかった。

<炉> 検出できなかった。

<出土遺物> 縄文時代前期前葉の土器が床面及び床面直上で出土している。羽状縄文が56～58に見られる。56・57はLR・RLの結束による羽状縄文、58はLRL・RLの非結束による羽状縄文である。

石器は、埋土中で石匙2点、床面直上層でスクレーパー2点が出土している。

<時期> p97住居跡4号より古いことは把握できる。ただし本住居跡が建て替えられたものがp97住居跡4号である可能性が高いことから、大差ない時期の住居跡と判断される。

p99住居跡1号 (第12図、写真図版8)

<検出状況> 調査区中央から東寄りのp99グリッドにおいて、II層で検出した。

<重複関係> p99土坑1号、q99土坑1号と重複関係にある。p99土坑1号に切られていることから本遺構が古い。q99土坑1号は、本遺構床面で検出したが、埋土の様相が不明瞭なため新旧関係は不明である。

<形状、規模> 住居東側は調査区外にあることから詳細は不明であるが、長軸は3.8m程の長方形形状を呈するものと思われる。

<床面積> 不明である。

<埋土> 黒褐色シルトの2層で構成される。

<壁、床> 壁は、床面からやや外形気味に直立する。壁高は、北壁18cm、西壁21cm、南壁7cmを測る。床面は平坦で、やや柔らかい。

<柱穴> 検出されなかった。

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 縄文時代前期初頭～前葉の土器が数点出土している。

石器は、埋土中からスクレーパー1点が出土している。

<時期> 出土している土器から縄文時代前期初頭～前期前葉と推定される。

q98住居跡1号 (第13図、写真図版8)

<検出状況> 調査区中央部からやや南寄りのq98・r98グリッドのIII層下位～IV層上位で検出された柱穴群より本住居の存在を推定した。

<重複関係> o97住居跡2号、q97住居跡2号、r97住居跡1号、p97住居跡4号、p98住居跡1号と重複関係にあるが、本遺構の柱穴はそれらの住居の床面下位より検出されていることから、本遺構が最も古い。

<形状、規模> 詳細は不明であるが、柱穴群から想定すると長軸が7.4m、短軸が2.7m程の長方形形状を呈するものと思われる。

<床面積> 詳細は不明であるが、19㎡を測るものと思われる。

<埋土> 不明である。

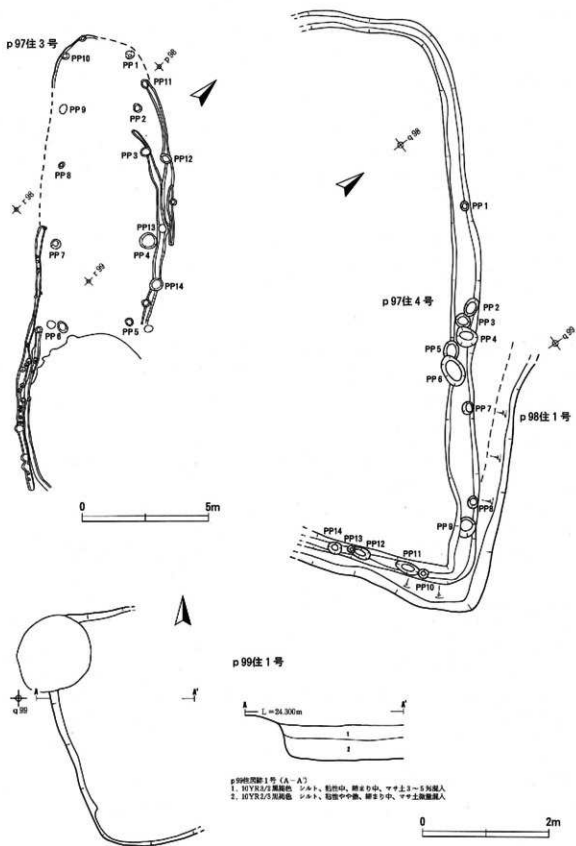
<壁、床> 検出できなかった。

<柱穴> 壁柱穴14基を検出した。

柱穴No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	8×7	6×6	7×7	7×4	6×5	6×6	6×5	10×7	7×7	9×4
深さ(cm)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
柱穴No	PP11	PP12	PP13	PP14						
開口部径(cm)	9×9	13×10	13×13	14×14						
深さ(cm)	-	-	7	13						

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 本遺構に伴う遺物は出土しなかった。



第12図 p97住3・4号、p98住1号、p99住1号

<時期> 重複が激しく、また本遺構に明確に伴う遺物は確認できなかった。本住居上位のr97住居跡1号（平安）床面下部からは縄文時代早期～前期前葉の土器が出土しており、該期の住居跡と推定される。

q98住居跡2号（第13図）

<検出状況> r97住居跡1号床面下位より検出された。調査区中央部からやや南寄りのq98・r98グリッドのⅢ層下位～Ⅳ層上位での検出となる。

<検出状況> r97住居跡1号、o97住居跡2号、p97住居跡2号、p97住居跡3号、q98住居跡1号と重複関係にある。r97住居跡1号は本遺構の上位につくられており、他遺構は本遺構の床面下位で検出されていることから、本遺構はo97住居跡2号・p97住居跡2号・p97住居跡3号・q98住居跡1号より新しく、r97住居跡1号よりは古い。

<形状、規模> 北壁および南壁の一部が削平されていることから詳細は不明であるが、長軸4.6m、短軸3.2mの長方形形状を呈するものと思われる。

<床面積> 詳細は不明であるが、約12㎡を測るものと推定される。

<埋土> 検出できなかった。

<壁、床> 壁はほぼ直立する。壁高は、北壁18cm、東壁17cm、南壁4cm、西壁9cmを測る。床面は削平により詳細は不明である。

<柱穴> 壁柱穴27基を検出した。

柱穴No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	6×6	11×9	12×10	14×12	14×10	12×8	12×10	12×10	12×10	12×8
深さ(cm)	-	-	10	10	9	12	16	9	10	8
柱穴No	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20
開口部径(cm)	16×14	18×16	14×10	14×12	10×9	8×8	10×9	12×8	10×8	10×8
深さ(cm)	9	12	-	5	-	-	-	5	-	-
柱穴No	PP21	PP22	PP23	PP24	PP25	PP26	PP27			
開口部径(cm)	12×10	10×8	8×8	10×10	14×12	12×10	13×12			
深さ(cm)	-	-	-	-	18	-	29			

<炉> 検出できなかった。

<出土遺物> 本遺構に伴う時期は出土しなかった。

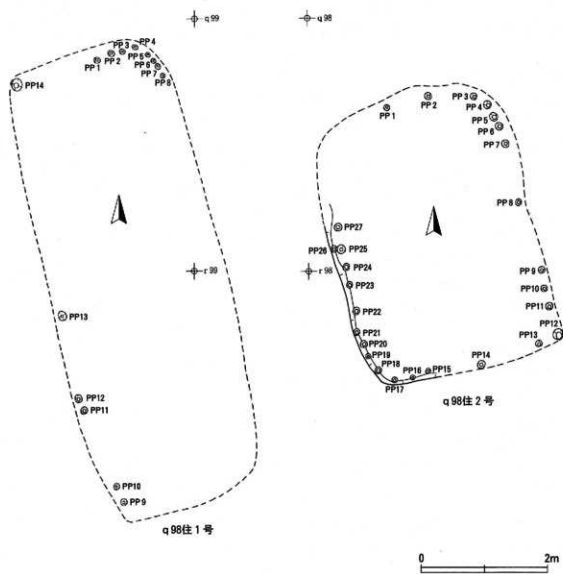
<時期> 本住居跡の時期を同定する遺物は出土していない。検出面についてもr97住居跡1号構築時に破壊を受けていることから、判断が難しい。状況から縄文時代前期前葉と推定した。ただし壁柱穴の配列等からは縄文時代早期の住居跡の可能性も考えられる。

(2) 縄文時代中期の住居跡

m98住居跡1号（第14図、写真図版13・14）

<検出状況> 調査区北側のm98グリッドにおいて、n97住居跡1号（古代）床面下部精査中、黒～黒褐色シルトを埋土とする本遺構を検出した。

<重複関係> n97住居跡1号、m98住居跡2号、n98土抗1号と重複関係にある。本遺構はn97住居跡1号の床面下部から検出されたこと、m98住居跡2号を切り、n98土抗1号は本遺構の床面より検出されたこ



第13図 q98住1・2号

とから、本遺構はn97住居跡1号よりは古く、m98住居跡2号、n98土抗1号よりは新しい。

<形状、規模> 遺構の東部は調査区外にあるため詳細は不明であるが、長軸3.5m、短軸3m程の楕円形を呈するものと推定される。

<床面積> 不明である。

<埋土> 調査区東壁の土層断面の観察から、本遺構の埋土は黒褐色シルトによる2層（m98共通土層の第2・第3層）により構成されると推定される。遺物は第2層から出土している。遺構南部の埋土下位からは亜角礫が多数出土した。埋土上位は現代攪乱を受けている。

<壁、床> 検出されたプランは、n97住居跡1号の床面下部にある部分のみであることと、遺構東部は調査区外に延びるため、壁の様相は不詳である。残存している壁は西～南壁で、外形気味である。壁高は西壁7.5cm、南西壁11.3～18.6cm、南壁9.5cmを測る。床面は凹凸がみられ、強く締まっている。

<柱穴> 3基検出された。開口部は円形を基調とする楕円形である。PP1、PP3の埋土は黒褐色シルト、PP2の埋土は暗褐色シルトである。PP1、PP3は埋土の様相および位置から本遺構に伴う柱穴であると推定される。

柱穴No	PP1	PP2	PP3
開口部径(cm)	30×28	30×25	22×20
深さ(cm)	38	22	35

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 縄文時代中期中葉の土器片が、大コンテナ半分ほど出土している。出土している土器は大木8b式の新しい段階に比定されるもので、他時期の混在が少なく、時間的なまとまりが窺える。掲載土器は、床面出土を優先とし、埋土中出土のものは口縁部片を優先した。全般的な傾向としては、隆帯による横・縦・斜に連結する渦巻文を主要文様とし、原体はRLR複節の縦回転が多い。

76は、口縁部が無文帯で、縄文施文後に沈線で文様描かれる。76と特徴に類似性が窺えるのが80の小形深鉢で、内面が黒色研磨?された丹念な作りの土器である。85は、胴部全体にRLR縦回転を施文後に、隆帯貼り付けによる縦・横方向に連結する渦巻文が施文される。

石器は、磨石2点、石刃1点が出土している。そのうち磨石は床面直上及び埋土中1点ずつ、石刃1点は埋土中からの出土である。

<時期> 出土遺物から縄文時代中期中葉と推定される。

m98住居跡2号(第14図、写真図版13・14)

<検出状況> 調査区北側のm98住居跡1号精査中、調査区東壁土層観察により、m98住居跡1号の外側に広がる本遺構を検出した。

<重複関係> n97住居跡1号、m98住居跡1号、n98土抗1号と重複関係にある。n97住居跡1号、m98住居跡1号により破壊を受けていること、n98土抗1号は本遺構床面下部からの検出であることから、本遺構はn98土抗1号より新しく、n97住居跡1号・m98住居跡1号よりは古い。

<形状、規模> 遺構の東側は調査区外に延びるため、詳細は不明であるが、径5m程の円形を呈するものと推定される。

<床面積> 不明である。

<埋土> 調査区東壁土層断面の観察から、暗褐色シルトおよび暗褐〜黒褐色シルトの2層に大別されると推定される。埋土北部は木根による攪乱を受けている。

<壁、床> 検出されたプランは、n97住居跡1号・m98住居跡1号により削平されており、また遺構の東部は調査区外に延びることから壁の全容は不明である。残存している壁は、北〜西壁で床面から急傾斜で立ち上がり、南壁はほぼ直立気味である。壁高は北壁で18cm、西壁で37cm、南壁で15.6cmを測る。床面には凹凸がみられ、堅く締まっている。

<柱穴> 8基検出した。位置からみてこの遺構に伴うものと思われる。

柱穴No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8
開口部径(cm)	30×28	29×23	16×14	24×22	26×24	25×20	28×24	24×22
深さ(cm)	38	17	15	18	14	10	12	14

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 縄文時代早期末葉及び中期中葉の土器が出土している。89は、隆帯による渦巻文を施文する。90は、口縁部に短沈線気味の刻み目が施文されるもので早稲田5類に並行すると思われる。

<時期> 出土遺物からは縄文時代早期末葉～中期中葉の幅で捉えられる。住居形態等からは中期中葉と推定される。

n95住居跡4号(第14図、写真図版5)

<検出状況> 調査区北西部のn96グリッド付近において、Ⅱ層で検出された。

<重複関係> n95住居跡1号・n95住居跡2号、n95住居跡3号と重複関係にある。本遺構南側はn95住居跡2号にきられ、また本遺構東壁がn95住居跡1号を切っており、n95住居跡3号は本住居床面下位から検出されていることから、本遺構はn95住居跡1号、n95住居跡3号より新しく、n95住居跡2号より古い。

<形状、規模> 西壁・北壁の一部のみの検出であるため、詳細は不明である。

<床面積> 不明である。

<埋土> 残存している埋土は、黒褐色シルトを主体とする単層で構成されている。

<壁、床> 壁上位は削平を受けているため詳細は不明であるが、残存している壁は外傾し、緩やかな立ち上がりを見せる。壁高は12cm程を測る。床面は平坦で堅く締まっている。壁溝は検出されなかった。

<柱穴> 西壁に小穴を3基検出した。位置から壁柱穴と考えられる。

柱穴No.	PP1	PP2	PP3
開口部径(cm)	10×9	10×9	9×8
深さ(cm)	9	9	10

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 縄文時代中期の土器が出土している。91は、床面から一括出土した破片がある程度接合したものである。

<時期> 出土遺物から縄文時代中期後葉と推定される。

o95住居跡2号(第15図、写真図版15)

<検出状況> 調査区中央部から北西寄りo95グリッド調査区西壁際にトレンチを入れたところ、石囲炉が検出された。同トレンチ土層断面から、不鮮明であるが北壁の立ち上がりを検出した。プランの検出はⅡ層下位面である。東部はo95住居跡1号に、北部はn95住居跡2号に、南部はp95住居跡1号により破壊を受けている。また中央部で1層から石囲炉にかけて攪乱を受けている。検出された壁は南東部の一部分のみである。

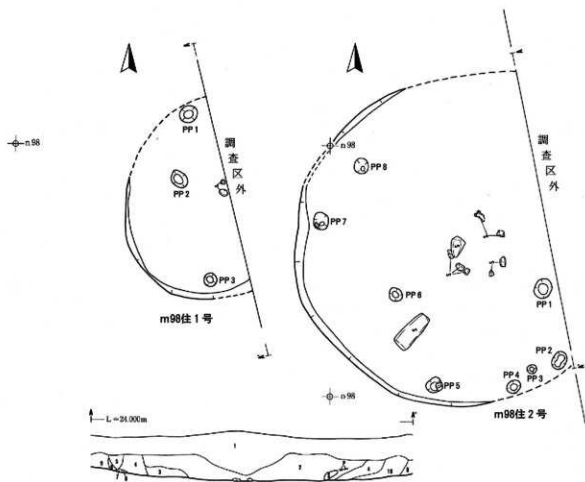
<重複関係> n95住居跡2号、o95住居跡1号、o96住居跡2号、p95住居跡1号と重複関係にある。本遺構は、n95住居跡2号・o95住居跡1号・p95住居跡1号に切られていること、またo96住居跡2号は本遺構の床面下部から検出されていることから、n95住居跡2号・o95住居跡1号・p95住居跡1号よりは古く、o96住居跡2号よりは新しい。

<形状、規模> 壁の一部分のみの検出であるため全容は不明であるが、石囲炉と検出された壁から、径4.3m程の円形を呈すると推定される。

<床面積> 不明である。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする5層(第1・2・3・4・13層)で構成される。

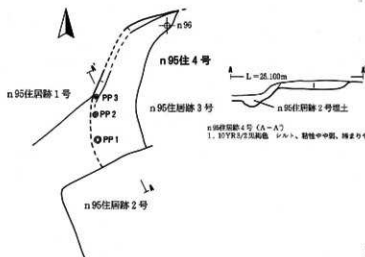
<壁、床> 壁は床面から急傾斜で立ち上がる。壁高22～30cm程を測る。床面は、平坦で堅く締まっている。



m98住1号、m98住2号土質(A-A)

1. 12YR3/2暗褐色 シルト、粘粒中、粘まり中弱、マサ土質、局地的に(ボクスター)層 混入
2. 12YR2/2黒褐色 シルト、粘粒中、粘まり中
3. 12YR2/2黒褐色 シルト、粘粒中、粘まり中弱
4. 12YR2/2黒褐色 シルト、粘粒中、粘まり中弱
5. 12YR2/2黒褐色シルトと12YR3/2暗褐色シルトの混合土、粘粒中、粘まり中弱。(木炭混入)

6. 12YR3/4暗褐色 シルト、粘粒中弱、粘まり中弱、黄褐色土混入。(木炭混入)
7. 12YR3/4暗褐色 シルト、粘粒中弱、粘まり中。(木炭混入)
8. 12YR3/4暗褐色 シルト、粘粒中、粘まり中弱。(木炭混入)
9. 12YR3/2暗褐色 シルト、粘粒中、粘まり中。(木炭混入)
10. 12YR3/2-2/2暗褐色〜黒褐色 シルト、粘粒中弱、粘まり中弱



n95住4号(A-A)

1. 12YR3/2黄褐色 シルト、粘粒中弱、粘まり中弱、マサ土層混入

第14図 m98住1・2号、n95住4号

<柱穴> 6基検出した。

柱穴№	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6
開口部径(cm)	24×21	22×19	25×21	24×23	19×15	20×18
深さ(cm)	—	—	—	—	—	—

<炉> 石囲炉は調査区外に延びているため、全容は不明である。検出された部分は、やや小ぶりの細長い花崗岩で炉を組んでいる。炉は、土坑状に掘り込んでから炉石を設置し、褐色シルト（第17層）・黒褐色シルト（第18層）で構築していたものと推定される。焼土は検出されなかった。

<出土遺物> 縄文時代早期・前期前葉・中期後葉の土器が出土している。主体を占める中期後葉の土器は、床面直上からの出土が多い。92～94・96～98は、沈線による楕円形区画が描かれ、その周辺に磨消縄文手法が施される土器群で、大木9式の古い段階に相当すると思われる。95は、不整摺糸文が施文される深鉢で大木2a式に相当すると思われる。99は、先端が二股状の工具による刺突文を施文する土器で、床面のため押し中に出土した。

石器は、削器1点・石鏃1点・磨石2点およびUフレ1点・フレーク1点が出土している。削器・石鏃は柱穴埋土から、磨石およびUフレ・フレークは埋土中からの出土である。

<時期> 出土遺物から縄文時代中期後葉と推定と推定される。

○99住居跡1号（第15図、写真図版15・16）

<検出状況> 調査区中央部から北東寄り○98グリッドII層下位で検出した。北東壁の一部は調査区外へ延びている。

<重複関係> ○97住居跡1号と重複関係にある。本遺構が○97住居跡1号を切っていることから本遺構が新しい。

<形状、規模> 北東壁の一部が調査区外へ延びているため全容は不明であるが、平面形は楕円形を呈し、規模は4.7×4.3m程を測るものと推定される。

<床面積> 約15㎡を測ると推定される。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする2層で構成される。主体となる層は暗褐色シルトがブロック上に混入しており、人為堆積と推定される。

<壁、床> 東壁は調査区外のため不明であるが、その他は床面から緩やかに立ち上がる。壁高は10cm程を測る。床面は平坦で堅く締まっている。壁溝は検出されなかった。

<柱穴> 11基検出した。埋土はPP1～PP3・PP5・PP8は黒色シルト、PP4・PP6は黒褐色シルト、PP7・PP9は褐色シルトである。位置からみて、本遺構に伴う柱穴と推定される。PP6底部は、本遺構の地山が変色した色調ををなしており、柱の重量による変化の可能性がある。

柱穴№	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	22×16	27×22	26×20	23×22	18×16	26×23	26×21	22×20	26×26	26×20
深さ(cm)	28	18	21	25	12	9	6	13	10	14
柱穴№	PP11									
開口部径(cm)	26×20									
深さ(cm)	25									

<炉> 中央からやや南東寄りに石囲炉を検出した。60×50cm程の規模で、楕円形基調に小継を組み合わせて構築している。炉は、土坑状に掘り込んでから炉石を設置し、黒褐色・黒色シルトで構築している。焼土は50×30cm程の不整形を呈し、層厚は23cmを測る。

<出土遺物> 縄文時代中期後葉の土器が出土している。101・103・105・106・107は、沈線による楕円形文及び逆U字状文などが描かれ、その縁辺に磨消縄文手法が用いられる。

石器は、削接器1点、磨石2点、石棒（砥石？）1点およびフレーク5点が出土している。削接器は床面直上から、磨石は埋土下位から、石棒（砥石？）埋土中から、またフレークは埋土下位・床面・床面下部よりの出土である。

<時期> 出土遺物から縄文時代中期後葉と推定される。

p95住居跡1号（第16図、写真図版16）

<検出状況> 調査区中央部から西側の、調査区境でⅡ層上位で検出した。遺構西側は調査区外に延びる。

<重複関係> o95住居跡2号、p95住居跡2号と重複関係にある。本遺構は、o95住居跡2号を切り、p95住居跡2号に切られていることから、o95住居跡2号より新しく、p95住居跡2号より新しい。

<形状、規模> 遺構西半分が調査区外であるため詳細は不明であるが、径4.5m程の円形を呈するものと思われる。

<床面積> 不明である。

<埋土> 黒褐色シルトの単層（p95住居跡2号土層断面第6層）で構成され、やや締まりがある。

<壁、床> 壁は床面からやや直立気味に外傾する。壁高は北壁16.9cm、西壁3.7cm、南壁6.8cmを測る。南東壁に黄褐色粘土質シルト塊を検出したが用途は不明である。壁溝は検出されなかった。床面はやや凹凸があり、所々中礫火山灰が確認され、堅く締まっている。

<柱穴> 検出されなかった

<炉> 検出されなかった。

<出土遺物> 縄文時代中期中葉の土器が出土している。109は、口縁部に隆帯による渦巻文が施文される。110は沈線による渦巻文（蕨手状）の両側に楕円形文が割り付けられる。109は大木8b式、110は大木9式の古い段階に相当すると思われる。

石器は、石鏃1点、尖頭器（未製品）1点、フレーク5点が出土している。いずれも埋土中からの出土である。

<時期> 出土遺物から縄文時代中期中葉～後葉と推定される。

r99住居跡1号（第16図、写真図版17）

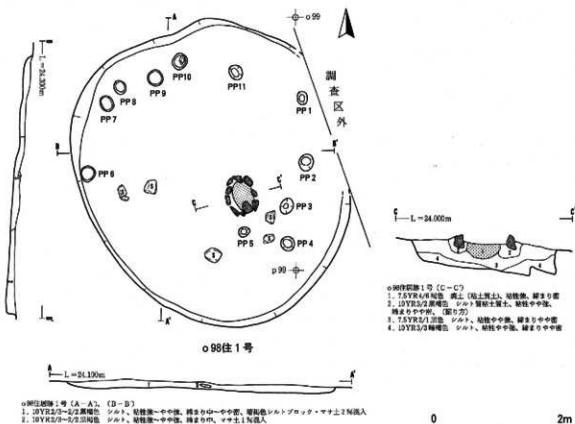
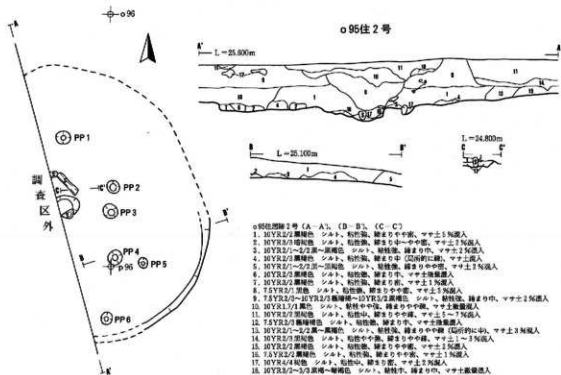
<検出状況> 調査区南東寄りr99グリッドにおいて、Ⅱ層下位で検出した。遺構東側は調査区外に延びる。

<重複関係> p97住居跡3号と重複関係にある。本遺構がp97住居跡3号を切っていることから、本遺構が新しい

<形状、規模> 遺構東側が調査区外にあるため詳細は不明であるが、長軸7m程の楕円形を呈するものと思われる。

<床面積> 不明である。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする8層で構成される。第3層からは土器片・花崗岩が多量に出土してお



第15図 095住2号、098住1号

り、住居廃棄後に投げ込まれたものと思われる。壁際にもみられる第4・6・7・8層は様相から自然堆積層と捉えられ、遺物の出土はなかった。第1・2・5層からは遺物が出土し互いに接合する例が多いことから、人為堆積層と推定される。

<壁、床> 壁は床面からやや急傾斜で立ち上がる。壁高は北壁で33.6cm、西壁で18.1～24.7cm、南壁で23.3～28.4cmを測る。床面は平坦で堅く締まっている。南壁付近床面で焼土を検出したが、様相から現地性のものと推定される。

<柱穴> 49基検出した。PP1・PP4・PP6・PP8は位置や深さから、主柱穴と思われる。その他の小穴は壁柱穴で本遺構は壁柱穴が全周するものと推定される。

柱穴No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8
開口部径(cm)	(26)	33×28	(30)	48×40	26×15	42×40	33×32	46×40
深さ(cm)	22	15	36	41	18	40	21	47

<が> 検出されなかった。

<出土遺物> 縄文時代早期・前期初頭～前葉・中期中葉～末葉の土器がコンテナ6箱分出土している。主体となるのは中葉後葉で、次いで中期中葉の土器となる。早期～前期の土器は合わせても数点の出土である。

検出時から多量の土器が包含されていることが予期されたことから、遺物取り上げに際してはできるだけ分層を試みた。結果としては、3層からの出土が最も多く、次に多いのが1・2層である。床面直上は全体量の割合から見ると少ない。床面出土は希少で、壁際土からの出土はない。また、平面的には壁穴中央付近からの出土がほとんどで、壁際付近からの出土はない。上述のことからも1・2・3層は遺物(中期中葉～後葉)を包含する人為堆積層、2a・4・6・7・8層は自然堆積層と捉えられる。5層は当初地山と判断したが貼床の可能性もある。なお、床面のため押しを行って出土したのが148・149の前期前葉の土器である。

土器の掲載は出土層位毎(下層から順に)とした。床面直上出土の上器片と人為堆積層と捉えた1・2・3層出土土器片が接合関係を示す(上下関係で接合)ものについては、床面直上出土で捉えることとするが、観察表の層位には複数の層名を記載している。以下に代表的なものについて文章記載する。

「床面直上出土土器」 床面直上出土としたものは、厳密には3層最下位出土に相当する。111～119で、119のミニチュア土器を除き、全て上位の埋土(1～3層)出土との接合関係を示した。111は、やや垂な感じを受ける器形で、文様は波状口縁の頂下に円文+細い逆U字形文が施され、両脇に幅広の逆U字形文が描かれる。文様の割り付けはそれらの繰り返しによる。113は、口縁部の楕円形文同士の間から、逆U字形文が割り付けられる。115は、鉢的な器形の土器で、文様の施文はないものの、調整の貝合(丹念なミガキが施される)などからは精製土器と捉えられる。116は、磨消縄文による縦方向に展開するモチーフが描かれるが、大木9式として捉えた場合、異質な感じを受ける。117は、隆帯が見られることと、沈線による懸垂文がくずれたような非規則的なモチーフであることから、大木9式の中でも大木10式に近い段階と推定される。119のミニチュア土器は底部に穿孔がみられる。

「3層出土土器」 3層として取り上げた土器は、3層の中で上層～下層に包含されていた土器で、上位の1・2層と接合関係を示したのも本層出土として記載する。121は、上段(口縁部付近)に楕円形文が横方向に繰り返し展開され、その下段は上段の楕円形文間を起点に楕円形文(逆U字形文の可能性もある?)が横方向に繰り返し展開する。124は、長楕円形文(逆U字形文の可能性もある?)と楕円形文+長楕円形が横方向で交互に繰り返される。内面は黒色を呈する。128は、貼付帯上に指頭圧痕を施文するもので、

それに沿うように沈線による曲線的なモチーフが描かれる。小破片のため明確ではないが、中期中葉～後葉と推定される。あるいは異系統土器である可能性も考えられる。130は、胎土中に多量の植物繊維を混入するもので、大木1式若しくは大木2a式と推定される。132は、外面の光沢が強い土器で、大木9～10式と推定されるが明確ではない。134は、全体的に赤色を帯びる。137は、大木9式相当の底部片で、11片の破片が接合したものであるが、p97住居跡（平安時代）埋土中位出土破片も含まれるなど、本住居跡の上層堆積の要因を解明する手がかりとなる接合状況を示す。

「2層出土土器」 138は、小波状口縁を呈し、横方向に沈線が引かれる土器で、胎土の様相からは本遺跡出土の大木9式とは様相が異なる。若干新しい時期の可能性で捉えているが詳細は不明である。139は、器種の特定ができない。ミガキが施されている面が上で、欠損部が底面と接続する部分と推定すれば、高台的な器種の可能性がある。142は、長楕円形文（逆U字形文の可能性もある？）と楕円形文+長楕円形文（逆U字形文の可能性もある？）が横方向に繰り返し施文されるタイプと推定される。

石器は石鏃2点（そのうち1点は欠損品）、磨石6点、台石1点、石棒1点、削搔器1点、フレーク1点が出土している。石鏃は2a層・貼床内から、磨石は3層から3点・埋土中から1点・埋土上位から1点・最上位から1点、台石・石棒は埋土中から、削搔器は1層から、フレークは埋土上位からの出土である。

<時期> 出土遺物から縄文時代中期中葉～後葉に廃棄場として使用されていることが分かる。住居として機能していた時期は明確には不明であるが、出土遺物と大差ない時期と推定される。

s98住居跡1号（第17図、写真図版18）

<検出状況> 調査区南側s98グリッドにおいて、表土を削いだ面で石囲炉を検出した。付近は本遺跡における地山がほぼ露出し、本遺構もほぼ床面まで削平を受けている。

<重複関係> r97住居跡1号、r99住居跡1号、s98土坑1号と重複関係にある。すべてに切られていることから、本遺構が最も古い。

<形状、規模> 壁は検出できなかったため、形状・規模ともに不明である。石囲炉の規模と柱穴配列、及び出土している土器から、径6m程の円形を基調とする平面形を呈していたものと思われる。

<床面積> 不明である。

<埋上> 黒褐色シルト、暗褐色シルト、褐色ローム、黄褐色ロームによる7層で構成され、全般的に締まりがある。様相から人為堆積と推定される。

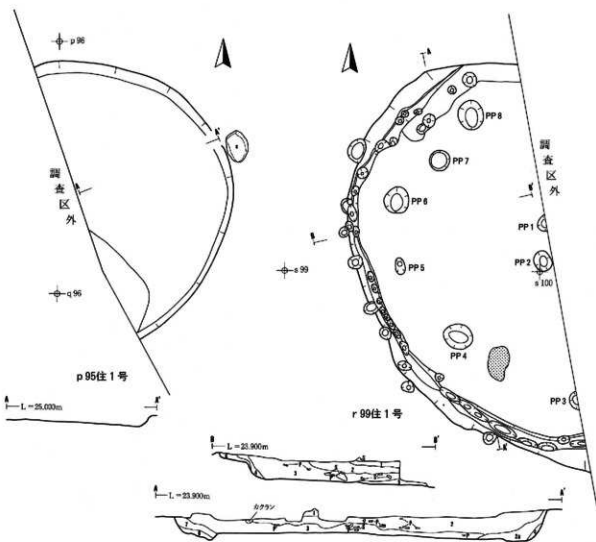
<壁、床> 壁は検出できなかった。床面は堅く締まっており、整地した貼り床である可能性がある。壁溝は検出されなかった。

<柱穴> 9基検出された。深さ、位置からPP1～PP5・PP7～PP9は本遺構に伴う柱穴と推定される。

柱穴No.	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9
開口部径(cm)	58×47	28×24	24×23	30×24	36×32	14×12	26×25	24×15	20×15
深さ(cm)	(77)	29	36	21	21	3	11	15	33

※PP1はr97住居跡1号の壁下面から検出されたため、本遺構床面からの深さで示す。

<炉> 炉は方形の石囲炉で、規模は72cm×70cm程である。炉の構築には掘り方がみられ、炉石設置部分を掘り込み暗褐色シルトで炉石を固定している。炉石には直方体状に加工された花崗岩を用いている。焼土の層厚は10cm程を測り、焼成は良好ではない。



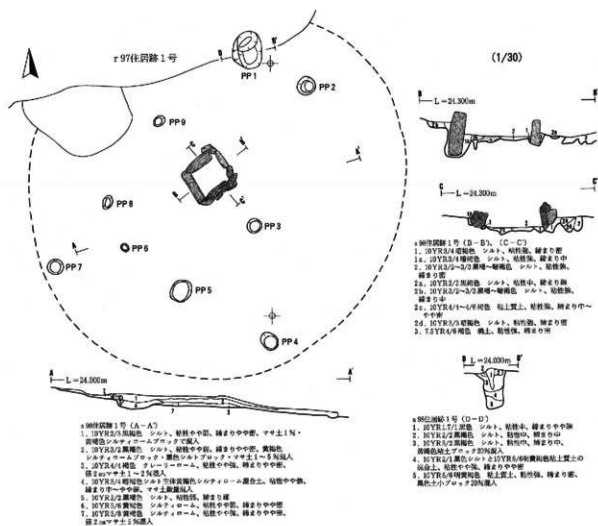
r99住跡1号 (A-A), (B-B)

1. 10YR2/2黄褐色 シルト、砂粒中、締まりやや弱
2. 10YR2/2黒褐色 シルト、砂粒中、締まり中
- 2a. 10YR2/2黒褐色 シルト、砂粒中、締まり中
3. 10YR2/2黄褐色 シルト、砂粒中強、締まり中、径3~5mmマサ土5%・炭化物粒1%・土器片多量・花崗岩(径10~50mm)多量混入
4. 10YR2/2-2/1黒褐色 シルト、砂粒中やや弱、径3mmマサ土30%混入
5. 10YR2/2-2/4黒褐色〜暗褐色 シルト、砂粒中強、締まり中やや弱、炭化物粒2%・径1~5mmマサ土7%混入
6. 10YR2/4灰色黄褐色 シルト、砂粒中強、締まり中やや弱、均質褐色粘土質土混入
7. 10YR2/2暗褐色 シルト質粘土、砂粒中強、締まり中やや弱、褐色土質シロコシ径3~5mmマサ土5%混入
8. 10YR2/1暗褐色 シルト質粘土、砂粒中強、締まり中、均質褐色粘土質土プロットで混入

第16図 p95住1号、r99住1号

＜出土遺物＞ 縄文時代中期後葉の土器が床面で出土している。152は、沈線と磨消縄文が縦方向に展開されるもので、大木9式に相当すると思われる。153は、縦方向に沈線が延び、沈線間は磨消縄文を伴う。大木9式であろう。154は、口縁部が無文の口縁部片で、内傾の後直立する器形である。

＜時期＞ 出土遺物から縄文時代中期後葉と推定される。



第17図 s98住1号

(3) 古代の住居跡

n95住居跡2号(第18図、写真図版19)

<検出状況> 調査区北西部n95グリッドにおいて、o95住居跡1号精査中に検出された。また本遺構東側および上部は攪乱を受けている。

<重複関係> n95住居跡1号、n95住居跡3号、n95住居跡4号、o95住居跡1号、o95住居跡2号と重複関係にある。本遺構がn95住居跡1・2・4号、o95住居跡2号を切っていること、o95住居跡1号が本遺構の床面を掘り込んであることから、本遺構はn95住居跡1・2・4号、o95住居跡2号より新しく、o95住居跡1号よりは古い。

<形状、規模> 北壁の一部と西壁のみの検出であるため詳細は不明であるが、柱穴の配列から考えると約4.4m×3.2mの規模をもつ隅丸方形を呈すると思われる。

<床面積> 不明である。

<埋上> 遺構のほぼ全面にわたってo95住居跡1号による攪乱を受けているため全体の様相は不明であるが、残存部の埋土は、黒褐色シルトの単層である。

<壁、床> 北壁、西壁北部は緩やかな立ち上がりであるが、西壁南部は直立気味である。壁高は、北壁残部で19cm、西壁は20cmを測る。床面は平坦で強く締まっている。壁溝は西～北側の壁際で確認された。また検出された壁溝は床面からおよそ6cmほど掘り込んでいる。

<柱穴> 残存する床面部分で5基検出した。位置、深さから、どれも主柱穴とはならない。また遺構西～北西壁の外側に小穴5基が検出された。PP9～PP10は褐色粘土質土を、PP11・PP12は黒褐色シルトを埋土としており、締まりは疎である。本遺構に伴う屋外柱穴の可能性がある。

柱穴№	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	31×26	22×20	24×22	30×15	14×13	17×14	31×14	15×14	11×9	18×10
深さ(cm)	11	15	11	4	5	5	7	9	6	8
柱穴№	PP11	PP12	PP13							
開口部径(cm)	10×11	19×12	14×11							
深さ(cm)	8	10	12							

<カマド> カマドは北壁中央部のやや東側に設置している。上部は削平を受け、崩壊していることから天井部の構造は不明である。袖部付近に、西側で芯材に使用したと思われる21cm×14cm大及び12cm×8cm大の垂角礫が検出された。付近に30cm×22cm大の角礫の他小形の角礫が数個散在しているが、芯材に使用したかどうかは不明である。燃焼部は、径41cm×40cmの円形気味の範囲に明赤褐～赤褐色焼土が形成されており、最大厚層が14cm前後を測る。煙道部は長さ1.35mを測り、下がり勾配で煙出し部へ続いている。煙道が割りぬき式か掘り込み式かは上部が削平されているため不明である。煙出し部の上位は削平されているため規模は不詳であるが、径40cm×25cm程の楕円形基調であったと推定される。また煙り出し部には3個の角礫が埋め込まれていた。

<出土遺物> 埋土上位から不整燃糸文を施している縄文時代前期前葉の深鉢胴部片と鉄滓20kgが出土した。

<時期> 古代の遺物を伴わないことから明確には不明である。北壁にカマドをもつことから奈良時代と推定される。

n97住居跡1号(第18・19図、写真図版20)

<検出状況> 調査区中央部から北西部のn97グリッドII層で検出された。遺構北壁および西壁は本遺跡の地山を掘り込んでおりプランは明確であったが、南壁部は黒褐～暗褐色シルトで不明瞭である。また遺構東部は調査開始時の試掘トレンチにより破壊している。

<重複関係> m98住居跡1号、m98住居跡2号と重複関係にある。双方とも本遺構床面下部から検出されているので、本遺構が最も新しい。

<形状、規模> 東部が攪乱を受けたため詳細は不明であるが、平面形は隅丸方形を呈し、規模は3.0×3.2m程であったと推定される。

<床面積> 約8.1㎡

<埋土> 黒褐色土を主体とする4層で構成されるが、4層黒～黒褐色土は堅く締まっており、本遺構下部にある縄文時代中期のm98住居跡1号の埋土を踏みしめたものか、埋土の上に貼った土の可能性もある。埋土と貼土の土層の違いは認知できなかった。埋土中には炭化材、焼土が検出された。埋土の大部分を1層が占めているが、褐色シルト、黄褐色粘土質土をブロック状に混入していることから、人為堆積と思われる。

<壁、床> 北壁は床面からやや急傾斜で立ち上がるが、西壁・南壁は緩やかに立ち上がる。東壁は破壊したため不明である。壁高は残存部で24～28cmを測る。床面は4層の上面と想定され、平坦で締まっている。柱穴・壁溝は検出されなかった。4層を掘り込んでいくと、縄文時代中期の土器が出土することから、本遺構床面下部にはm98号住居跡1号埋土が残っていたと考えられる。

<柱穴> 検出できなかった。

<カマド> カマドは北壁やや東寄りに設置されているが、本体の大部分は削平されていることから全容は不明である。袖部は褐色シルトと本遺構の地山である黄褐色粘土質土の混土で構成されるが、袖石等の芯材は検出されなかった。燃焼部は径40cm×32cmの不整形の明赤褐色焼土が形成され、焼成の層厚は約10cmである。煙道部および煙り出し部は検出できなかった。また本遺構南西部のコーナー付近に暗褐色シルトの張り出しがあり、カマドの作り替えがあった可能性がある。床面には焼土が認められなかったことから、使用されたのは短期間であったと推定される。

<出土遺物> 埋土中から土師器の環・甕および鉄滓約80gが出土した。環はロクロ成形による内面黒色処理が施される。底部は回転糸切りによる。

<時期> 出土遺物からは時期判断が難しい。北壁にカマドをもつことから奈良時代と推定される。

o95住居跡1号(第19図、写真図版21・22)

<検出状況> 調査区中央部からやや北西側o96～o95グリッドII層で検出した。北側と東側は攪乱を受けているため、全容は不明である。またo96住居跡1号の北西壁から本遺構の埋土が検出された。

<重複関係> n95住居跡2号、o95住居跡2号、o96住居跡1号及びo96土抗1号と重複関係にある。n95住居跡2号、o95住居跡2号を切り、o96住居跡1号に切られ、また本住居跡床面下位からo96土抗1号が検出されたことから、本遺構はo96土抗1号・n95住居跡1号、o95住居跡2号より新しく、o96住居跡1号よりは古い。

<形状、規模> 西側壁のみの検出であるため不詳であるが、長軸が3.8m程の隅丸方形を呈すると思われる。

<床面積> 不明である。

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする11層で構成されている。埋土最下位の6層および主体を占める2層が混土であることから、人為堆積と推定される。また埋土下位に焼土塊・炭化物が多量に検出されたことから、焼失を受けたことが認められる。

<壁、床> 本住居跡は大部分が攪乱を受けており、検出されたのは西壁および北・南壁の一部のみである。検出された壁は、床面から始めは緩やかに立ち上がり、その後は直立する。壁高は、北壁で20cm程、西壁で50cm程、南壁で40cm程を測る。北壁際の一部で壁溝が検出された。壁溝は床面から3cm程掘り込んでいる。床面は平坦で堅く踏み締めがしてある。床面下位から○95土抗1号が検出された。

<柱穴> 柱穴は西壁際に小穴が15基検出された。いずれも主柱穴にはなりえない。

柱穴No	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	15×10	22×8	18×13	10×7	11×8	19×10	20×20	22×14	16×14	14×14
深さ(cm)	8	12	10	1	1	7	12	8	5	5
柱穴No	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15					
開口部径(cm)	26×14	14×10	18×12	12×6	18×12					
深さ(cm)	6	1	1	2	8					

<カマド> 西壁やや南寄りに、西向きの煙道部が検出された。割りぬき式の煙道部は80cmの長さを測り、下がり勾配をみせた後緩やかな上り勾配で煙出し部につづく。煙道部埋土に炭化物が見られなかったこと、カマド部及びその残存部も検出できなかったこと、カマド袖想定部分から焼土が検出されなかったことから、この煙道部・カマドの使用期間は短いもので、作り換えが行われた可能性がある。

<出土遺物> 埋土直上から土師器の甕が、埋土中位からは不整掘糸文を施している縄文時代前期前葉の深鉢胴部土器片1点が出土した。

石器は埋土中から磨石1点が出土した。

<時期> 明確には不明である。西壁にカマドをもつことから平安時代と推定される。

○96住居跡1号 (第20図、写真図版23)

<検出状況> 調査区中央部やや北西側○96グリッドⅡ層面において、黄褐色土中に黒色土及び黒色土と黄褐色土の混合土を埋土とするプランを検出した。東側は上位に攪乱を受けている。

<重複関係> 北西部で○95住居跡1号と重複関係にある。本遺構が他方を切っていることから、本遺構が新しい。

<形状、規模> 平面形は隅丸方形を呈しており、規模は2.4m×2.0m程である。

<床面積> 約3.7㎡

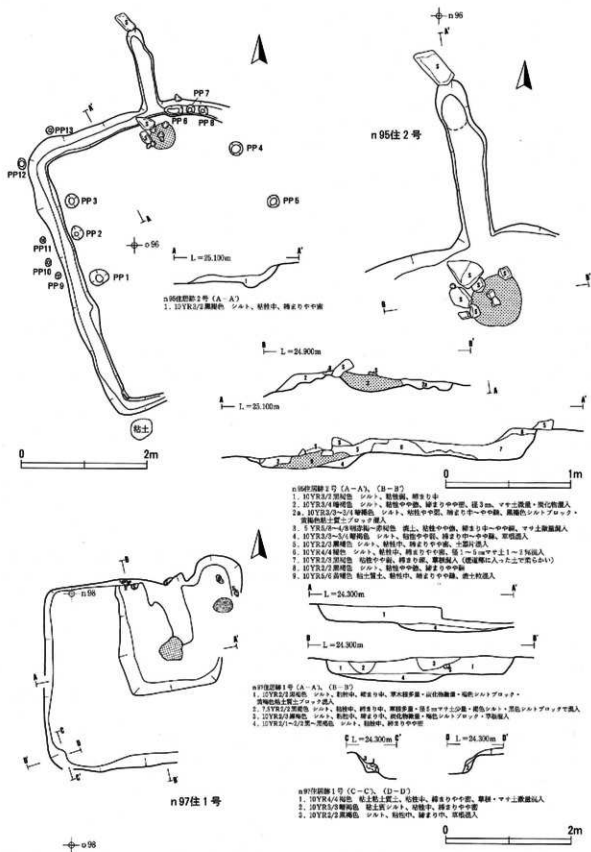
<埋土> 黒色土・黒褐色土・暗褐色土・褐色土・黄褐色土の混合土で、9層に分類される。埋土の様相から人為堆積と思われる。上位には焼土が、中位には炭化材が検出された。

<壁、床> 東側壁上位は攪乱を受けている。壁は床面から直立し、壁高は西側で63～82cmを測る。北西部壁は○95住居跡1号の埋土を掘り込んでいる。床面は堅く、凹凸がみられる。床面直下には角礫が多数検出された。壁溝は検出されなかった。

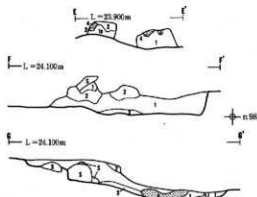
<柱穴> 検出されなかった。

<カマド> 検出されなかった。

<出土遺物> 埋土上位から土師器の甕、懸垂文が施された縄文時代中期後葉の深鉢の胴部片、および縄

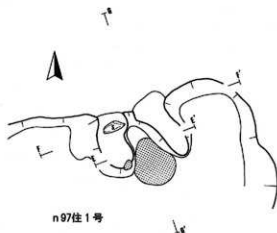


第18図 n95住2号、n97住1号



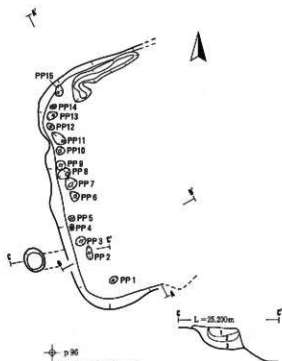
n97住跡1号 (E-E), (F-F), (G-G)

1. 弥生2前期地層 シルト、粘板中、埴まり中、弥生4中期色シルト質粘土ブロック・赤板・炭化物混入
- 1a. 弥生3/4期地層 シルト、粘板中、埴まり中、遺土ブロック混入
2. 弥生4中期色シルト層に2層以上の炭板付粘土質シルトの混合上、粘板中、埴まり中、遺土ブロック、炭化物混入、マサ土質遺品混入
3. 弥生4/4期地層 シルト質粘土、粘板中、埴まり中中、遺2層マサ土混入
4. 弥生6中期色地層 粘土(シルト)、粘板中、埴まり中中



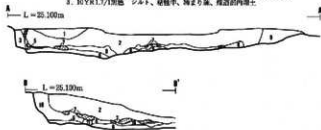
n97住1号

0 1m



o95住跡1号 (C-C)

1. 弥生2前期地層 シルト、粘板中、埴まり中中、耳環類等で埋山
2. 弥生2/2期地層 シルト、粘板中中、埴まり中中、赤土or天押土
3. 弥生1/1期色 シルト、粘板中、埴まり中、埴造り内層土



o95住跡1号 (A-A), (B-B)

1. 弥生2/2期地層 シルト、粘板中、埴まり中
2. 弥生2/2期地層 シルト、粘板中、埴まり中、弥生4/4中期色粘土質粘土ブロック・遺1層マサ土1層混入
3. 弥生2/2期地層 シルト、粘板中、埴まり中中、遺1層マサ土1層混入
4. 弥生2/2期地層 シルト、粘板中、埴まり中
5. 弥生1/1期色 シルト、粘板中中、埴まり中中
6. 弥生2/2期地層 シルト、粘板中中、埴まり中中
7. 弥生2/2期地層 遺土(シルト)、粘板中中、埴まり中
8. 弥生2/2期地層 シルト、粘板中中、埴まり中、遺土ブロック・遺2層マサ土混入
9. 弥生2/2期地層 シルト、粘板中、埴まり中、弥生4/4中期色粘土質粘土・炭化物混入
10. 弥生2/2期地層 シルト、粘板中、埴まり中、上段に土層付混入
11. 弥生2/2期地層 シルト質粘土に弥生2/2期地層シルトの混合上、粘板中中、埴まり中中

0 2m

第19図 n97住1号、o95住1号

文晩期～弥生時代のものとして推定される深鉢の胴部土器片が出土している。

<時期> o95住居跡1号より新しいことは把握できる。本住居跡はカマドをもたないことから断言はできないが、状況から平安時代と判断した。

p95住居跡2号(第20図、写真図版23)

<検出状況> 調査区中央部から西側にあるp96グリッドII層で、周囲に比べ黒色の強い土色のシミにより検出した。遺構のほとんどが調査区外にあり、検出されたのは遺構東端の一部である。

<重複関係> p95住居跡1号と重複関係にある。本遺構がp95住居跡1号の床面を掘り込んでいることから、本遺構が新しい。

<形状、規模> 遺構の大部分が調査区外にのびていることから、形状・規模の詳細は不明である。

<床面積> 不明である。

<埋土> 調査区西壁土層断面は8層に分類しているが、本遺構の埋土は第3層・第4層・第5層の黒褐色土を主体とする3層で構成される。第3層に焼土ブロックが混入していることから、人為堆積と思われる。

<壁、床> 壁はやや外傾気味で立ち上がる。壁高は約32cmを測る。床面は平坦でやや堅い。

<柱穴> 検出されなかった。

<カマド> 検出されなかった。

<出土遺物> 埋土中に縄文時代前期初頭のものとして推定される深鉢の胴部片が出土した。

<時期> 不明である。検出面から奈良～平安時代と推定される。

p97住居跡1号(第21・22図、写真図版24・25)

<検出状況> 調査区ほぼ中央部のp97グリッドIII層において、周囲に比べ黒色の強い土色のシミにより検出した。住居西側上部は覆乱を受けている。

<重複関係> o97住居跡2号、p97住居跡2号、p97住居跡3号、p97住居跡4号と重複関係にあり、そのすべてを切っていることから本遺構がもっとも新しい。

<形状、規模> 3.7m×3.6mの規模をもつ隅丸方形の平面形を呈する。

<床面積> 約11.4㎡

<埋土> 黒褐色土・極暗褐色土を主体とする7層で構成される。埋土上位～下位にかけ、黒色シルトまたは黄褐色粘土質土がブロック状に混入していることから、人為堆積層と思われる。4層極暗褐色土中ほぼ全面で現地性の焼土が多量に検出された。焼土中に炭化材とともに燃え残りの木片も検出されたことから焼失を受けた状況が認められる。また埋土上位および床面から白色粘土塊が検出されており、付近からは検出されない土であることから、持ち込まれたものと思われる。

<壁、床> 西側の壁は覆乱によって一部破壊されているが、残存状態はおおむね良好である。壁は床面から急傾斜で立ち上がっている。壁高は、北東壁36cm、南東壁30cm、北西壁45cm、南西壁27cm前後を測る。壁溝は検出されなかった。北側壁の上～下位に中殿火山灰が認められる。

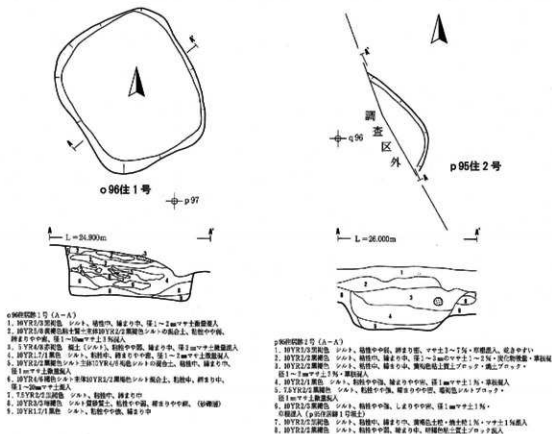
床面は堅く締まり凹凸はあまり見られない。東から西に向かってやや下がり勾配であり、比高は10～16cmを測る。床面から2個の白色粘土塊を検出したが、これは床面を5cm程掘り込んで置かれていたものである。粘土塊の大きさは15×12cm程の卵形で厚さは13cmほどである。用途は不明である。床面をグメ押ししたところ、本住居の東側下部に黒褐色土を主体とするシミが検出された。様相から縄文時代前期の住居の埋土と推

定される。

<柱穴> 柱穴は検出されなかった。

<カマド> 南西壁の中央部付近に位置しており、袖部間は約110cmを測る。北西側袖部は奥石が長さ26cm×12cmの角礫、内石が長さ48cm×17cm大の角礫を芯材として使用し、南東側袖部は奥石が20cm×14cm大の角礫、内石が28cm×11cm大の角礫を使用する。また南東側袖口付近で羽口を検出し、芯材として使用された可能性がある。

燃焼部は径68cm×64cmの不整形状で、層厚5cm前後の赤褐色焼土が形成されている。割りぬき式の煙道部は、壁穴から165cmの長さを測り、本体部からほぼ平坦に煙出し部に続いている。煙出し部内から数個の角礫が検出された。煙り出し部の規模は径39×30cm、深さ47.7cmである。



第20図 ○96住1号・p95住2号

<出土遺物> カマド袖石付近から土師器の甕が、埋土下位からは不整然糸文が施文された縄文時代前期前葉の深鉢土器片・隆帯および口縁裏側に溝状沈線が施された縄文時代晩期後葉の浅鉢土器片が、埋土中位からは沈線が施された縄文時代晩期後葉の鉢土器片が、埋土上位からは不整然糸文が施文された縄文時代前期前葉の深鉢土器片が、それぞれ出土した。

石器は、台石2点・磨石1点・磨石から転用した凹石1点が出土した。台石は床面から1点、床面直上から1点、磨石・凹石は床面からの出土である。

鉄製品は、刀子1点が床面から出土している。

<時期> 出土遺物から平安時代と推定される。ただし、カマドの方向が過去の本遺跡の検出住居と異なることから、時期は検討を要する。

q97住居跡1号（第22図、写真図版28）

<検出状況> 調査区西部のq97グリッドにおいて、Ⅲ層で検出した。埋土上位、住居東側、南側は攪乱を受けている。

<重複関係> r97住居跡1号、p97住居跡1号と重複関係にある。双方に切られていることから、本遺構が最も古い。

<形状、規模> 遺構東側が削平されていることから詳細は不明であるが、平面形は長方形を呈するものと思われる。

<床面積> 不明である。

<埋土> 黒～黒褐色シルトを主体とする5層で構成される。住居北側埋土4層に中礫火山灰が検出されている。全般的に締まりが密である。自然堆積層と推定される。

<壁、床> 壁は直立気味である。壁溝は、北壁27cm、西壁35cm、南壁19cmを測る。北～北西壁は中礫火山灰混入層を掘り込んでつくられている。床面は黒～黒褐色シルトと黄褐色粘上質土との混合土で、凹凸がある。床面の一部に貼床が施されており、厚さは14～20cmである。貼床は黒褐色シルト主体で本遺跡の地山である明黄褐色粘上質土をブロック状に混入しており、締まっている。貼床がめぐっている周りの床面は柔らかい。

<柱穴> 3基検出した。PP2とPP3は貼床の上面から掘られている。この柱穴の埋土は黒色土であり、縄文時代中期の土器が出土している。

柱穴No.	PP1	PP2	PP3
開口部径(cm)	12×8	15×11	15×14
深さ(cm)	23	52	23

<カマド> 検出されなかった。

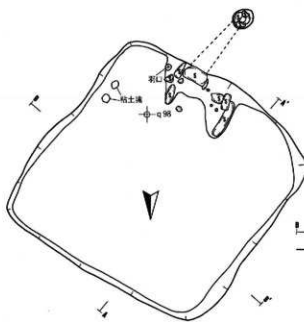
<出土遺物> 194の土師器小片が出土した。石器は、埋土下位から石槍1点が、埋土上位から石鏃1点が出土している。

<時期> p97住居跡1号より古いことは把握できる。土師器小片が出土している状況から奈良時代と推定される。

r97住居跡1号（第23・24図、写真図版26・27）

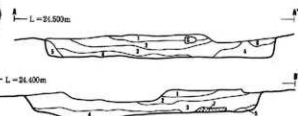
<検出状況> 調査区南部のr97・s97・r98・s98グリッドⅡ層で検出した。p97住居跡1号のほぼ真南に隣接する。

<重複関係> q97住居跡1号、o97住居跡2号、p97住居跡2号、p97住居跡3号、p97住居跡4号、

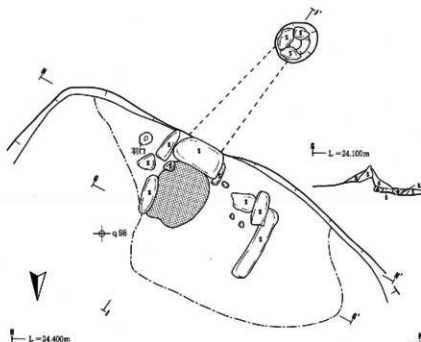


p97住1号 (A-A, B-B)

1. 10YR2/3高麗色 シルト、粘液中、締まり中、径1mmマセ土塊散入。
2. 10YR2/3赤褐色 シルト、粘液中、締まり中、径1mmマセ土塊、炭化物散入。
3. 10YR2/3高麗色 シルト、粘液中、締まり中、炭色シルト・ブロック、炭化物・径1mmマセ土塊散入。
4. 7.5YR2/3暗褐色 シルト、粘液中、締まり中、炭褐色土質土ブロック・径1mmマセ土塊散入。
5. 10YR2/3赤褐色 シルト、粘液中、締まり中、径1mmマセ土塊、土質の混入。
6. 10YR2/3高麗色 シルト、粘液中、締まり中、炭褐色土質土ブロック散入。
7. 7.5YR2/3暗褐色 壤土(シルト)、粘液中、締まり中。

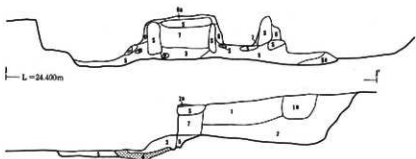


0 2m



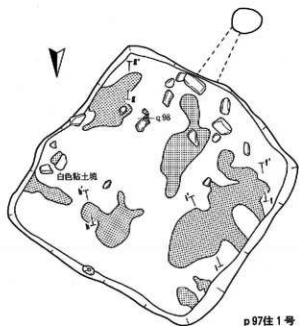
p97住1号 (G-G, H-H, J-J)

1. 10YR2/3高麗色 シルト、粘液中、締まり中、炭褐色シルト・ブロック散入。
- 1a. 10YR2/3赤褐色 シルト・ブロック散入。
2. 10YR2/3高麗色 シルト、粘液中、締まり中、炭褐色土質土ブロック散入。
2. 10YR2/3高麗色 シルト、粘液中、締まり中、炭褐色土質土ブロック散入。
4. 5YR2/6赤褐色 壤土、粘液中、締まり中。
- 4a. 7.5YR2/3赤褐色 シルト、粘液中、締まり中。
5. 10YR2/3高麗色 シルト、粘液中、締まり中、炭褐色土質土ブロック散入。
- 5a. 10YR2/3赤褐色 壤土質シルト、粘液中、炭褐色土質土ブロック散入。
6. 10YR2/3赤褐色 シルト(火山灰混入)、粘液中、締まり中。
- 5a. 10YR2/3赤褐色 壤土質シルト、粘液中、締まり中。
7. 10YR2/3高麗色 シルト、粘液中、締まり中、炭褐色土質土ブロック散入。
- 7a. 10YR2/3暗褐色 壤土質シルト、粘液中、締まり中。



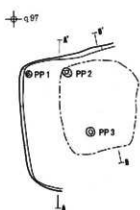
0 1m

第21図 p97住1号

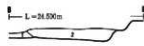


- pp97住1号 (I-I', (a-a'), (b-b'), (1-1'))
1. 7.5YR2.5/4暗褐色 礎石 (シロト壁粘土、壁柱・中柱、障まり中、マサ土敷き入り)
 2. 10YR2.5/4黄褐色 シルト、粘粒中、障まり中
 3. 10YR2.5/4黄褐色 シルト、粘粒中、障まり中、小溝 (厚10-20mmマサ土) 底入
 4. 10YR2.5/4黄褐色 シルト、粘粒中、障まり中、厚1mmマサ土敷き入り
 - 4a. 7.5YR2.5/4暗褐色 シルト、粘粒中、障まり中、マサ土敷き・焼土灰土
 5. 10YR2.5/4暗褐色 シルト、粘粒中、障まり中、厚1mmマサ土敷き入り
 - 5a. 7.5YR2.5/4暗褐色 シルト、粘粒中・中柱、障まり中

p97住1号



- q97住1号 (A-A')
1. 7.5YR2.5/4黄褐色 シルト、粘粒中、障まり中・中柱、マサ土1-2層底入
 2. 10YR2.5/4黄褐色 シルト、粘粒中、障まり中・中柱、マサ土2層底入 (溝縁縁)
 3. 10YR2.5/4黄褐色 シルト、粘粒中、障まり中、厚1mmマサ土2層底入
 4. 10YR2.5/4黄褐色 コーム、粘粒中、障まり中、10YR2.5/4暗褐色 コーム (床板土土) プラックで底入 (溝縁縁)
 5. 10YR2.5/4黄褐色 シルト、粘粒中、障まり中



- q97住1号 (B-B')
1. 7.5YR2.5/4暗褐色 シルト、粘粒中、障まり中、10YR2.5/4黄褐色粘土土敷き (中柱・障まり中・敷き入り) プラック・マサ土敷き入り
 2. 10YR2.5/4暗褐色 シルト、粘粒中、障まり中・中柱、10YR2.5/4暗褐色-黄褐色粘土土敷きマサ土2層底入 (粘粒中)

q97住1号

第22図 p97住1号、q97住1号

q98土抗1号、q98土抗2号、s98土抗1号と重複関係にある。q97住居跡1号、s98土抗1号を切り、他の遺構は本住居の床面下位より検出されたことから、本遺構が最も新しい。

<形状、規模> 長径7.1m、短径6.2mの隅丸長方形を呈する。

<床面積> 約38㎡

<埋土> 黒褐色シルトを主体とする5層に大別される。埋土下位の2層、3層は炭化物とともに本遺跡の地山である黄褐色粘土質土をブロック状に含んでいるので、人為堆積と思われるが、上位1～2層は自然堆積層と推定される。埋土下位、床面直上からクサシゲの炭化物が検出されており、床面に敷いていたものが焼けたものと思われる。クサシゲの形がほぼ崩れずに残っていることから異地性のものとは考えにくく、他の炭化材も床面直上で検出されていることから、本遺構は消失を受けた可能性が高い。

<壁、床> 壁はやや外傾気味に直立する。北～東壁は中礫火山灰混入層を、西壁は本遺跡の地山を掘り込んでいる。壁高は、北壁11～35cm、東壁14～23cm、南壁13.2～49.5cm、西壁は47.9～59.5cmを測る。床面には黄褐色粘土質土と黒褐色シルトの混合土の貼床が施され、平坦で堅く締まっている。また西～東方向に下がり勾配で緩やかに傾斜している。壁溝はほぼ全周するが、西壁際で一部とぎれている。深さは北壁際3.5～4.3cm、東壁際4.2～12.8cm、南壁際4.0～15.0cm、西壁際8.5～11.8cmを測り、北西・南東壁際が深い。

<柱穴> 柱穴は69基検出されており、PP1～PP4の4基が主柱穴であると推定される。PP1には埋土上位に明黄褐色粘土質土が、PP2には埋土上位に明黄褐色粘土質土混じりの黒褐色シルトがあり、ともに堅く締まった状態で検出されているため、柱を抜いたあとに埋め戻されている可能性が高い。本柱穴を廃棄した後に新しい柱穴を立てたものと推測されるが、付近には同規模の柱穴は検出されなかった。各主柱穴間の距離は、PP1とPP2が5.0m、PP2とPP3が4.1m、PP3とPP4が4.0m、PP4とPP1が4.1mである。PP1とPP2間の距離が突出しているが、本遺構下部土抗1号P1とPP1の距離は3.8m、ビットとPP3の距離が4.1mであることから、ビット1は主柱穴から転用された可能性もある。

柱穴№	PP1	PP2	PP3	PP4	PP5	PP6	PP7	PP8	PP9	PP10
開口部径(cm)	64×54	80×71	85×68	84×60	27×21	23×18	36×22	19×19	31×28	27×23
深さ(cm)	52	36	60	30	31	29	44	21	22	22
柱穴№	PP11	PP12	PP13	PP14	PP15	PP16	PP17	PP18	PP19	PP20
開口部径(cm)	26×23	25×22	17×16	25×24	39×32	31×25	20×17	22×19	32×22	39×25
深さ(cm)	13	30	51	21	38	34	5	34	48	24
柱穴№	PP21	PP22	PP23	PP24	PP25	ビット				
開口部径(cm)	29×22	26×24	32×29	42	39×32	79×74				
深さ(cm)	19	14	17	41	17	64				

<カマド> 西壁の南西部コーナー寄りに設置している。本体の大部分は崩落し削平を受けていることから、構造等の詳細は不明である。右袖部分にはカマド構築材と思われる黄褐色粘土質土混じりの褐色のシルトが残存し、その頂部に亜角礫が乗る。また左袖～中央部分には3個の亜角礫が散在しており、袖石に使われたと推定される。燃焼部は径40cm程の不整形を呈し、厚さ14cmの焼土が形成されている。またカマド付近貼床下部からも焼土が検出されていることから、この貼床はある期間生活してから貼った可能性が高い。煙道部は割りぬき式で調査区外西側に延び、やや下がり勾配で煙り出し部へ続く。

<付属施設> 南西壁コーナーにおいて、炭化材・炭化物を多量に包含する暗褐色シルトと黄褐色粘土質土の混土を検出した。当初は小鍛冶炉施設と考え精査を進めたが、小鍛冶炉施設と同定できなかった。入り口

施設の可能性がある。また西壁中央からやや北側付近にピットが検出された。埋土下位からは多量の炭化物が出土している。埋土中には黄褐色粘土質土ブロックが混入していることから、木材等を燃料として使用した後、炭化物を意図的に投げ込んだものと推定される。このピットは、柱穴からの転用の可能性がある。

<出土遺物> 縄文時代土器と古代の遺物が出土している。古代の遺物としては、土師器・須恵器が大コンテナ2箱分(須恵器片が主体)と磨石5点、礬石の可能性がある石製品18点、刀子3点、クギ2点が出土している。165の須恵器大形甕の出土状況や接合状況を見ると、住居跡絶後に投げ込まれた様相を示す。よって、床面上上の遺物についても、木住居跡の帰属時期を示す資料かどうか疑問がある。また縄文時代早期～前期の土器片が相当数出土しているが、柱穴の検出作業時に出土したものが多く、状況から、下位の縄文時代住居跡の埋土がわずかに残存していた可能性もある。ただし、本住居の貼床と思われる土との区分ができなかった。

上述のような出土状態にあることから、本住居跡の出土遺物は種別毎に掲載することとする。

「土師器環」 環は残存率50%以上である7点を図化し掲載する。全てロクロ成形で内面黒色処理が施される。その中で、162は内外面ともに黒色処理が施されるもので、また内外面とも全面にミガキが施される。土器の厚さなどからロクロ成形と判断したが、明瞭にはロクロを使用した痕跡は確認できない。

「土師器甕」 土師器の甕は、163と164の2点が出土した。163は、ロクロ成形で内面はヨコミガキが施される。164は、非ロクロ成形によるもので、内面胴部はハケメ調整が施される。

「須恵器」 ある程度まで復元できたのが、165の大甕と174の長頸壺である。165は、口径38.5cm、胴部における最大長58.6cmを測るが、全て破片の状態で出土し、またその一部と思われる破片は相当数の出土を得たが、接合しなかった破片は不掲載としたものが多く、出土地点は、Q1の埋土上位とQ2の埋土中～下位でまとまって見られ、その他にQ4の床面・床面直上・埋土下位などから出土している。また、本住居跡床面下位から検出されたq98土坑2号の埋土上位から1片と本住居の北隣に位置するp97住居跡1号の埋土上位(1層)から1片の出土があった。

石器は、斧状石製品1点・石匙1点・磨石5点・台石(欠損品)1点・削搔器1点・礬石17点・フレーク4点が出土した。斧状石製品は床面直上から、石匙・台石は埋土中から、磨石は床面直上から2点・埋土中から1点・貼床内から1点、削搔器は床面から、フレークは床面直上から3点・埋土中から1点出土している。礬石はQ2床面直上を主体として出土し、その他埋土中から5点・貼床内から1点が出土している。

鉄製品は、刀子3点、クギ2点、鉄滓約1kgが出土している。出土地点はQ3埋土下位を主体とする。

<時期> 出土遺物から平安時代と推定される。

2. 土坑

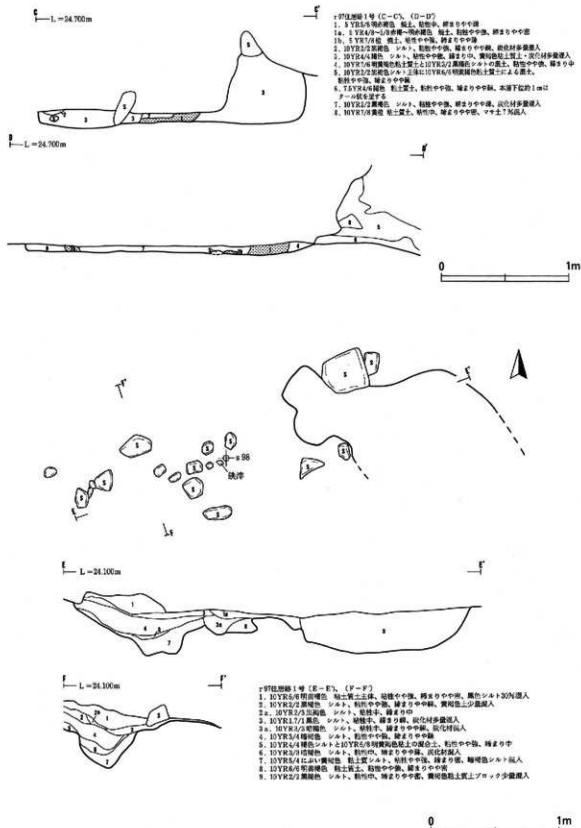
第5次調査で検出された土坑は時期推定が困難で、検出面や遺構の重複関係等から時期を推定したものが多く、おおむねの時期は、住居跡同様縄文時代および古代と推定される。

n98土坑1号(第25図、写真図版30)

<検出状況> m98住居跡1号床面精査中、床面に黒褐色土による楕円形気味のプランを検出した。上位から37cm×21cm×27cm程の規模の花崗岩が検出された。

<重複関係>

n97住居跡1号、m98住居跡1号、m98住居跡2号と重複関係にある。本遺構はそのすべての床面下部か



第24図 r97住1号

らの検出であるため、最も古い。

<形状・規模> 平面形は楕円形を呈する。規模は開口部径153cm×87cm、深さ33cmである。

<埋土> 黒褐色シルト主体に黄褐色土ブロックが混入する。黒褐色シルトはやや締まりがあり、堆積様相としては人為堆積層と捉えられる。

<壁・底面> 壁は底面から緩やかに立ち上がり、すり鉢状を呈する。底面はつとがり気味である。

<出土遺物> 縄文時代早期の土器片が2点出土した。

<時期> 詳細な時期は不明である。時期の下限はm98住居跡2号（縄文時代中期）より古い。時期の上限は出土遺物から縄文時代早期と推定される。

o96土坑1号（第25図、写真図版30）

<検出状況> o95住居跡1号床面精査中、床面に黒褐色土による楕円形のプランを検出した。

<重複関係> o95住居跡1号、n95住居跡1号と重複関係にある。本遺構はそれら住居跡の床面下部からの検出であるため、最も古い。

<形状・規模> 平面形は楕円形を呈する。規模は開口部径140×55cm、深さ23cmである。

<埋土> 黒褐色シルト主体に暗褐色土ブロックおよび黄褐色土小ブロックが混入する。黒褐色シルトはやや締まりがあり、堆積様相としては人為堆積層と捉えられる。

<壁・底面> 壁は底面から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

<出土遺物> 本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

<時期> 詳細な時期は不明である。時期の下限はn95住居跡1号（縄文時代中期）より古い。時期の上限は不明である。

p99土坑1号（第25・30図、写真図版30）

<検出状況> p99グリッド付近層中において、p99住居跡1号のプランとともに住居北西部に広がるしみを検出した。住居のプラン自体もやや不明瞭であったため住居の精査を始めたが、本土坑のプランが明瞭になったため、土坑の精査を行った。

<重複関係> p99住居跡1号と重複関係にある。本遺構がp99住居跡1号を切っている、本遺構が新しい。

<形状・規模> 平面形は楕円形を呈する。規模は開口部径123×110cm、深さ30cmである。

<埋土> 黒～黒褐色シルトの3層で構成される。第1層には黄褐色土ブロックが、第2層には黄褐色粘土ブロック・炭化物が混入しており、堆積様相としては人為堆積層と捉えられる。

<壁・底面> 壁は底面から外傾気味に立ち上がる。底面は平坦である。

<付属施設> 土坑上位で検出された花崗岩は、設置されたものと推定され、本土坑は土壇墓の可能性がある。

<出土遺物> 本遺構に伴う遺物は出土しなかった。

<時期> 時期の下限は不明であるが、上限はp99住居跡1号（縄文時代前期）より新しい。

q90土坑1号（第25図、写真図版30）

<検出状況> p99住居跡1号精査中、床面に黒褐色土によるプランを検出した。

<重複関係> p99住居跡1号床面から検出したが、埋土の様相が不明瞭なため新旧関係は不明である。

- <形状・規模> 平面形は楕円形を呈する。規模は開口部径84×78cm、深さ20cmである。
- <埋土> 黒褐色シルトを埋土とする。3層で構成されるが、色調の差は明瞭ではなく、締まり・混入物に差がみられた。堆積様相から人為堆積と捉えられる。
- <壁・底面> 壁は底面からやや急傾斜で立ち上がる。底面は平坦である。
- <出土遺物> 本遺構に伴う遺物は出土しなかった。
- <時期> 時期は不明であるが、埋土の様相から縄文時代と推定される。

q98土坑1号（第25図、写真図版29）

- <検出状況> 調査区南部のq98グリッド付近において、r97住居跡1号Q1の貼床？除去後に黒褐色土による円形のプランを検出した。
- <重複関係> r97住居跡1号の床面下位で検出していることから、本土坑が古い。
- <形状・規模> 平面形は円形を呈する。規模は、開口部径150cm×150cm、底部径60×50cm、深さ100cmである。
- <埋土> 黒褐色シルト主体に、黄褐色土小ブロックが混入する。埋土中位付近で人頭大の礫が出土した。締まりは疎で、堆積様相としては人為堆積と捉えられる。
- <壁・底面> 底面からやや外傾気味に立ち上がり、上部付近で段を持つ。底面は丸底気味である。
- <出土遺物> 土師器の杯の口縁部片2点と鉄滓約500gが出土した。
- <時期> 平安時代と捉えられるr97住居跡1号より古い時期の土坑であるが、ロクロ成形による土師器が出土していることから、r97住居跡1号と大差ない時期と推定される。

q98土坑2号（第25図、写真図版29）

- <検出状況> 調査区南部のq98グリッド付近において、r97住居跡1号Q1の貼床？除去後に黒褐色土による円形のプランを検出した。
- <重複関係> r97住居跡1号の床面下位で検出していることから、本土坑が古い。
- <形状・規模> 平面形は、検出プランは円形気味に確認されたが、精査結果としては隅丸方形であった。規模は、開口部径150cm×120cm、底部径120×85cm、深さ60cmである。
- <埋土> 埋土上位～下位まで黒褐色シルトによる単層である。埋土下位～底面の最下層は、泥質シルトで、炭化材を多量に混入する。q98土坑1号と同様に埋土中位付近で人頭大の礫が出土した。堆積様相としては、人為堆積と捉えられる。
- <壁・底面> 底面からやや外傾気味に立ち上がり、上部付近で段を持つ。底面は平坦である。
- <付属施設> 底面で小柱穴を検出した。開口部径10cm、深さ10cm程である。
- <出土遺物> 縄文時代早～前期の土器片と須恵器の壺の胴部が出土した。
- <時期> 平安時代と捉えられるr97住居跡1号より古い時期の土坑であるが、須恵器が出土していることから、r97住居跡1号と大差ない時期と推定される。

s98土坑1号（第25図、写真図版29）

- <検出状況> 調査区南部のs98グリッド付近において、r97住居跡1号検出作業時に黒褐色土による半円形のプランを検出した。

<重複関係> r97住居跡1号が新しく、本遺構が古い。

<形状・規模> 平面形は、北側半分程をr97住居跡1号に破壊を受けているが、残存部から円～楕円形と推定される。規模は、開口部径130cm、底部径110cm、深さ55cmである。

<埋土> 埋土上位に黒色～黒褐色土（1～2 a層）が、埋土中位～下位に暗褐色土と明黄褐色土の混土（3～5層）が堆積する。上位層はr97住居跡1号の埋土と同様のものであり、自然堆積層と判断される。中位～下位は人為堆積層である。

<壁・底面> 底面から中位まで外傾気味に立ち上がった後、中位から上位は内湾気味となる。底面は平坦ではなく、凹凸が激しい。

<出土遺物> 縄文時代早～中期の土器片と土師器小片、須恵器片、鉄滓約300gが出土した。須恵器は埋土上位～中位で出土し、土師器は最下部の人為堆積層から出土している。

<時期> 平安時代と捉えられるr97住居跡1号より古い時期の土坑であるが、須恵器が出土していることから、r97住居跡1号と大差ない時期と推定される。

s99土坑1号（第25図、写真図版31）

<検出状況> 調査区南部のs99グリッド付近において、黒褐色土による楕円形のプランを検出した。

<重複関係> s98住居跡1号・p97住居跡3号と重複関係にある。本遺構がもっとも新しい。

<形状・規模> 平面形は楕円形で、規模は開口部径86cm×72cm、深さ8cm～25cmである。

<埋土> 埋土上位に黒色土、中位に黒褐～暗褐色土、下位に褐色土および黄褐色土が堆積する。中位～下位は人為堆積層、上位は自然堆積層と判断される。

<壁・底面> 底面は凹凸が激しく、壁は外傾気味に立ち上がる。底面東側に柱穴状の掘り込みを伴う。

<出土遺物> 出土遺物はない。

<時期> 時期の上限はs98住居跡1号（縄文時代中期後葉）より新しいことは把握できるが、時期の下限は不明である。

3. 集石

第5次調査で検出された集石は1基で、用途・性格等は不明であるが、意図的に石を設置する遺構である。

s99集石1号（第26図、写真図版31）

<検出状況> 調査区南部のs99グリッド付近において、s98住居跡1号の床面除去中に約35cmの平坦気味の花崗岩を検出した。

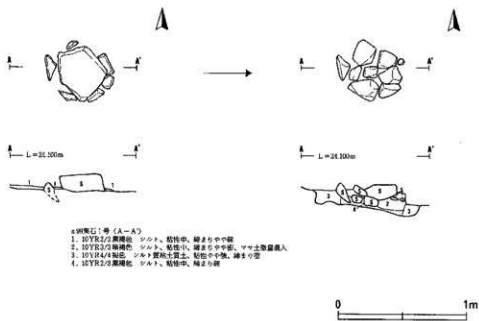
<重複関係> s98住居跡1号より本遺構が古い。

<形状・規模・礎の設置状況> 80cm程の楕円形気味の浅い土坑の上に41cm×32cmのかなり大きな花崗岩（平坦気味の石）が設置されている。大きな花崗岩の下位には、10cm～20cmの花崗岩9個が環状に敷き詰められている。様相としては、上位の大きな花崗岩の下に小さな花崗岩を敷いた行為が窺える。

<埋土> 堆積上層は、1層は基本層序のII層、もしくはs98住居跡1号の貼床（土）の可能性がある。2層は花崗岩の掘え方土、3層は土坑の整地土と捉えられる。4層は10cm～20cmの花崗岩の下位に堆積する跡まりのない（非常に軟らかい）黒褐色土で、性格が拙めなかった。

<出土遺物> 縄文時代前期前葉の土器片が数点出土した。

<時期> 縄文時代中期中葉期と推定されるs98住居跡1号より古いことはわかるが、時期を特定できない。縄文時代前期あるいは中期の基的な性格の遺構である可能性が考えられるが、確測の域を越えるものではなく、検討を要する。



第26図 s99集石1号

V. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺構内外合わせ土器類約15箱分、土製品5点、石器類99点、鉄製品6点、鉄滓2kg、羽口3点である。遺物は遺構内出土が大半を占める。遺構外としたものについては、遺構の検出時やダメ押し作業中で出土したものがほとんどであることから、それらについても本来は遺構に伴うものである可能性がある。よって、本章では遺構内外合わせて扱い、記述する。

1. 土器

本節では縄文・弥生時代と古代の土器を分けて記述する。

(1) 縄文・弥生時代の土器

出土している土器は、縄文時代早期～弥生時代後期までのものである。主体となるのは、縄文時代中期～後葉の土器群である。

土器の観察については、器種、残存部位、口縁部形態、地文、内面調整、底部形態、胎土などの観察項目を設定し行った。それらの諸要素と従来の編年観を基に、时期的な位置付けを推定し、分類した。

<器種> 土器の器種を記載するものであるが、本遺跡で出土している土器は、そのほとんどが深鉢で、若干量鉢が見られる。今回の調査からは、特出して大きな深鉢や鉢は見られなかったが、若干量小形と言えるような大きさのものが散見される。なお、浅鉢は確認されていない。また、特異な器種として、中期に高台式なものが見られる。

<残存部位> 残存率の違いで、完形（完形品や極一部分を欠損する土器や接合により完形個体になった土器）、ほぼ完形（接合作業などにより全体の器形がわかるまで復元された土器、概ね残存率が80パーセント前後の土器に呼称する）、1/2完形（残存率50パーセント以上のもので口縁～底部までの器形推定が可能と判断される土器）に区分し、それ以下の残存率のものは部位の名称（例としては口縁部～胴部上半付近までの破片であれば「口～胴部上 $\frac{1}{2}$ 」といった具合）で記載した。全般的な傾向としては、完形若しくは器形全体を窺える資料は非常希少である。

<口唇部形態> 口縁部の形態、口唇部の形状、突起・刻み目・刺突文・縄文施文の有無を表記した。口縁部の形態は平縁、波状、小波状のものが見られる。口唇部の形状は、断面形が丸いものを「丸み」、平坦に面取りが行われたと思われる角（かど）がつくようなものを「角状」、内側に内傾するものを「内削ぎ」と言う表現方法で記載した。

<地文> 施文原体の種類を表記する。施文原体の方向については、把握可能な場合には記載を行っている。

<内面調整> 内面の調整が把握できる場合について記載する。部位により調整が每なる土器も見られるが、完形土器が少ない状況もあり、部位毎の記載は割愛する。

<底部形態> 底部形態は、大きくは平底、やや上げ底に区分される。底面に縄文や網代痕などの瓦痕が確認されたものもある。また、穿孔されている可能性が窺える資料が1点見られた。

<胎土> 本遺跡から出土している土器の胎土中に含まれる混入物は、各時期の一つの特徴として捉えられる場合が多い。観察表には、基本的に含有率が高いと感じた混入物のみを記載している。

鉱物について、砂の粒を砂粒、砂粒よりも径の大きい小石を粗礫、透明なガラス質のものを石英、長石、雲母などと記載する。普通量以下は割愛し、記載していない。縄文時代早期中葉の土器は、胎土中に白っぽ

い粗礫が多量に含まれる特徴を有することが多く、長石若しくは花崗岩と推定されるがその種の種類については不明である。

植物繊維について、縄文時代早期末葉～前期前葉の土器は胎土中に植物繊維の混入が見られ、該期土器を認識する一つの目安として捉えられる。傾向としては、大木1式に先行する段階に相当すると推定される時期の土器が、胎土中に最も多量の植物繊維を混入すると思われる。後続する大木1式～大木2 a式にかけては、植物繊維の混入量は次第に減少するものと捉えられる。そして、大木2 b式の段階では、植物繊維の混入が確認できない場合が多い。本遺跡資料に大木3式と断言できる資料が皆無なため、断言はできないが、胎土中に植物繊維を混入する製作手法は、大木2 b式以降は消滅する可能性が高い。

観察表の胎土の項には、大木2 a式相当と思われる土器群（前期では主体を成す）の平均的な植物繊維混入量を基準（中量）として、植物繊維混入量を下記の5段階に定義し、記載した。

- a 繊維多量混入
- b 繊維やや多量混入
- c 繊維中量混入
- d 繊維小量混入
- e 繊維微量混入

<備考> 内面及び外面に付着物がある場合に、観察表の備考の項に記載する。煤、炭化物、朱（ベンガラ？）、黒色顔料（漆と思われる）などが主なものとなる。

<第1群土器>

縄文時代早期中葉～後葉と推定される土器群で、約60点出土した。完形品や全体の器形が窺えるものはなく、全て小破片資料である。出土地点は、ほぼ調査区全域に亘り、出土層位はIV層（褐色土）とV層（地山粘土層）の漸移層から出土している。当初は無遺物層と捉えていた土層で、各時期の堅穴住居跡床面（前期前葉の住居の床面下部が主体）のダメ押し作業時に出土している。よって、調査時には把握できなかったが、IV層とV層の漸移的な層であるIV a層は早期の遺物包含層であった可能性と認知できなかった該期住居跡の埋土であった可能性が考えられる。後者の場合、精査時の状況から判断して、前期前葉とした住居跡の中に介在してしまった可能性も全く否定はできない。

出土した早期の土器は、その特徴から吹切沢式相当を1類、物見台式相当を2類、椶ノ木1式相当を3類、その他文様の施文がなく土器型式との比定が困難なものを4類とし、分類を試みた。

- 第1群-1類 外面に貝殻腹縁文を施文する土器である。胎土の色調は、全般に暗褐色～黒褐色を呈し、胎土中には砂粒や粗礫（白っぽい）を多量に混入する。稀に石英や雲母と思われる鉱物を含むものもある。吹切沢式に比定される土器群と思われ、遺構内外合わせて約50点出土した。
- 第1群-2類 沈線文と貝殻文？（細かな刺突）を施文する土器で、3点出土した。1類と比較して作りが丁寧な感じを受ける。物見台式に比定される土器群と思われる。
- 第1群-3類 外面に細隆起線文を施文する土器群を本類とする。3点出土し、内2点の内面には貝殻条痕文が施される。椶ノ木1式に相当すると思われる。
- 第1群-4類 胎土の様相から早期と推定されるものの、無文で詳細が不明なものを一括する。胎土に混入される鉱物からは吹切沢式の胴部下半から底部に近い部位の破片と推定されるものが多

い。また、明神裏Ⅲ式(432)や大寺式(415)に比定されると思われる破片が各2点出土している。

<第Ⅱ群土器>

縄文時代早期末葉～前期初頭に属すると推定される土器群で、約30点出土した。完形品や全体の器形が窺えるものではなく、全て小破片資料である。該期の土器群は、胎土中に多量の植物繊維の混入が見られ、時期区分の一つの目安として捉えられることが窺われる。早稲田5・6類と上川名Ⅱ式相当が出土している。

<第Ⅲ群土器>

縄文時代前期に属する土器群である。大コンテナで3箱分程の出土があり、中期の七器に次ぐ出土量である。完形品や全体の器形が窺えるものではなく、全て破片資料である。主体は、前期前葉の大木1～2a式期であるが、両者の区分(分離)は非常に難しい課題である。本項では、大木1式と推定したものを第Ⅲ群-1類、大木2a式と推定したものを第Ⅲ群-2類とし、とりあえずの区分を行っておくが、分類に際しての問題点や課題などは今後の検討課題としたい。

第Ⅲ群-1類 大木1式に相当すると推定されるものを一括する。口縁部文様帯を構成する行為が窺えない土器は、基本的に本類とした。大木2a式相当として分類したものに比べて、胎土中における植物繊維の混入が多い。基本的に同一の原体のみを使い施文する土器を本類とした。羽状縄文を施文する土器について、非結束のものは基本的に本類とした。

第Ⅲ群-2類 前期前～中葉に属する土器群で大木2a式に相当する。不整擦糸文などを口縁部に施文することで、口縁部と胴部を区分する行為が窺える土器は、基本的に本類とした。羽状縄文を施文する土器について、結束によるものは基本的に本類とした。また、植物繊維の混入が少ないものについても、本類の一つの基準として採用した。

第Ⅲ群-3類 前期前～中葉に属数土器群で、大木2b式に相当すると推定されるものを一括する。S字状連鎖沈文や網目状擦糸文を施文するものは基本的に本類とした。大木2a式としたもの比べて、全般に胎土中の植物繊維の混入が少ないかあるいは確認されないものが多い。

第Ⅲ群-4類 縄文時代前期中葉～後葉に属する土器群で、大木3～4式に相当すると推定されるものを一括する。3点の出土で、p95住居跡1号出土の51・52とp97住居跡2号出土の68が大木3～4式に相当するものと推定するが小破片のため、明確ではない。51・52は、貼付隆帯による波状文が施文される。68は、沈線による鋸歯状文が見られる。何れも胎土中に植物繊維の混入は見られない。

第Ⅲ群-5類 縄文時代前期前葉と推定されるものの、土器型式との比定が困難なものを一括する。

<第Ⅳ群土器>

縄文時代中期に属する土器群である。大コンテナ10箱分が出土している。主体を占めるのは中葉～後葉の土器群で、大木8b式の新しい段階の土器と大木9式の古い段階の土器、そして両者の中間型式と思われるものもある。それらについては、まとめと考察で再度取り上げることとする。

第Ⅳ群-1類 中期中葉の大木8a式に相当するとと思われる土器群である。小片のため明確ではないが、m98住居跡2号出土の89は、大木8a式に比定する可能性がある。

第Ⅳ群-2類 隆・沈線による渦巻文の施文を基調とする。器種構成は、破片資料であるため明確ではな

いが、全て深鉢と思われる。中期中葉の大木8b式に相当すると思われる土器である。85は、文様の施文順番を把握できる資料で、縄文施文後に隆帯が貼り付けられていることを剥落痕から確認できる。また、本遺跡で大木8b式と思われる土器は、隆帯による懸垂文に近い区画が見られ、渦巻文の大きさも小さいものが多い様相で捉えられる。

岩手県内における大木8b式の細分については、柿の木平遺跡報告書中において、大館町遺跡RA102・301堅穴住居跡及び大地渡遺跡と柿の木平遺跡出土資料を持って、大木8b-1式、大木8b-2式、大木8b-3式の3細分の編年案が提示されている(1982高橋憲太郎他)。その編年案を参照すると、本遺跡の資料は、全般に大木8b-3式とするものに比定される可能性が高く、後続する大木9式との過渡期的な可能性がある土器群が含まれている様相である。

第IV群-3類 沈線による楕円形文・長楕円形文、逆U字状文が描かれ、その周辺に磨消縄文が施されることを基調とする。中期末葉の大木9式に相当する土器群で、本遺跡で最も多い出土量である。263や264は、口縁部に楕円形文同士の間には沈線による蕨手状文(渦巻文?)が描かれる。磨消縄文手法は伴うことから大木9式での位置付けで問題はないと思われるが、大木8b式に見られる渦巻文が変化(変遷)したとも取れる文様である。大木9式の中でも古い段階の土器である可能性が考えられる。

また、楕円形文や逆U字状文などの文様の割り付けについては、比較的多様な種類が見られる。代表的なものを以下に文章記載する。

101などは、楕円形文+長楕円文と逆U字状文が横方向に繰り返して5単位で施文される。ただし、逆U字状文が連続して施文される部分が二か所あり、全周する内に文様単位が合わなくなり、崩れを生じたものと思われる。113などは、口縁部に描かれる楕円形文同士の間を起点に、胴部に逆U字状文が描かれ、横方向にそれが繰り返される。120などは、やや細目の逆U字状文が、口縁部から胴部下半まで描かれ、横方向にそれが繰り返される。

第IV群-4類 中期末葉の大木10式に相当すると思われる土器は、小片が数点出土した。

第IV群-5類 地文のみの施文のため、土器型式との比定が困難なものを一括する。精製土器の出土量の割合から推定して、大木8b~9式に併行するものと思われる。

<第V群土器>

縄文時代後期と推定される小破片が数点出土している(不掲載)。何れも小破片のため、明確ではないが、後期中葉のものと思われる。

<第VI群土器>

工字文などの文様を施文する土器で、晩期後葉の大洞A式に相当すると思われる。小片が数点出土している。器種は、浅鉢もしくは高杯と推定されるが明確ではない。薄手で、口縁部の裏側に溝状の沈線が巡る。内面調整についても、非常に丁寧な作りで、前期や中期の土器とは明らかに違いが見られる。

<第VII群土器>

弥生時代後期の天王山式に相当すると推定される小片が2点確認された。器種は鉢と推定されるが明確で

はない。

文様は、交互刻突文を施文し、RL横回転が施文される。縄文時代前期や中期の土器と比較して薄手の土器であるが、胎土や調整は晩期後葉の土器に比べて丁寧とは思われない作りである。

なお、過去の調査で頻繁に見られた弥生時代初頭の土器は出土を見ていない。

(2) 古代の土器

土師器と須恵器が出土している。総数で大コンテナ3箱分程であるが、その内2箱分以上がr97住居跡1号出土が占める。遺構外出土としては、3片の土師器片があるが、掲載していない。

土師器は、環と甕が出土している。環は、全てロクロ成形で、内面黒色処理を施されるものである。底部は回転糸切りによる。ある程度の残存率のものは、r97住居跡1号出土の155～161のみで、他は破片資料である。異質なのが、162の環である。内外面とも黒色処理及び丁寧なミガキが施される。甕は、163・164・193の他は小破片である。163・193はロクロ成形、164は非ロクロ成形である。

須恵器は、大甕と長頸壺が出土している。大甕の胴部片は、外面にタタキメ、内面に当て具痕が見られるものが多い。

2. 土製品

土製品は、ミニチュア土器、円盤状土製品などが出土している。

<ミニチュア土器> 118の1点が出土している。底部付近が残存するのみであるが、深鉢と推定される。

<円盤状土製品> 2点出土している(69・254)。何れも縄文時代前期と推定される。

3. 石器

出土した石器は、石鏃16点、石槍・尖頭器2点、石匙8点、不定形石器(削器・搔器・Uフレ)14点、磨製29点、石斧類5点、凹石1点、砥石1点、台石2点である。所属時期について、古代の住居跡出土の磨石を除き、全て縄文時代と思われる。

<石鏃> 16点出土した。形態は無茎鏃だけで、基部に挟入がはいる無茎凹基が主体となる。石材は全て頁岩で、赤色頁岩が2点含まれる。大きさは、最大で4.3cm、最小で2.2cm、平均すると約3.15cmである。

<石槍> 1点の出土である。315は全長13.6cm、幅3.5cm、厚さ1.4cmで頁岩製である。

<尖頭器> 1点の出土である。尖頭器とした326は、大形の石鏃型の石器である。あるいは石鏃の未製品の可能性も含むものである。

<石匙> 石匙は未製品と思われるものを含め8点出土している。摘まみ部を上にした場合、主要な刃部が縦に付くものが主体である。例外としては、305の横形の石匙が挙げられる。石材は全て頁岩である。

<石斧類> 未製品の可能性があるものを含めて5点出土している。内訳は、打製石斧2点、磨製石斧1点、磨製石斧の未製品と思われるもの2点である。

打製石斧は2点出土した。何れもP95住3号から出土したもので、60は粘板岩、120はホルンフェルスが使用されている。

磨製石斧は、p97住居跡2号から出土した317の欠損品1点と未製品と思われる遺構外出土2点が出土している。石材は頁岩である。

<不定形石器(削器・搔器・Uフレ・Rフレ)> 本稿では、剥片の形状に依存し、一定の形に仕上げてい

ない石器（形状を変えない）を不定形石器とした。削器、掻器、ユーティライズ・フレーク（Uフレ）、リクッチド・フレーク（Rフレ）、及び何らかの未製品が該当する。それらは、石鏃、石槍、尖頭器、石匙、打製石斧などの所謂定形石器を除いたものを一括する。14点出土した。

<フレーク類> フレークは総数で30点程であった。

<磨石> 29点出土した。磨石は縄文時代前期・中期の住居跡及び古代の住居跡からも出土した。石材は花崗閃緑岩、ヒン岩、チャートである。

<凹石> 1点出土した。古代の住居跡であるp97住居跡1号の床面から出土したもので、磨石からの転用品若しくは兼用品と思われる。石材は石英斑岩である。

<磁石> 1点出土した（不掲載）。o98住居跡1号から出土したもので、チャート製である。

<台石> 台石の可能性がある石器は2点出土した（何れも不掲載）。古代の住居跡であるp97住居跡1号1点とn97住居跡1号から1点である。

4. 石製品

石製品は蔦石と思われるもの18点と石棒と思われるもの3点が出土している。

<蔦石> 蔦石の可能性がある石製品は18点出土した。全てr97住居跡1号から出土したもので、出土地点はQ2床面直上を主体とする。規模は2～2.6cmで、擦過痕が確認できるものもある。筆者の色感的所見としては、黒石が338～351の14点、白石が352～355の4点である。

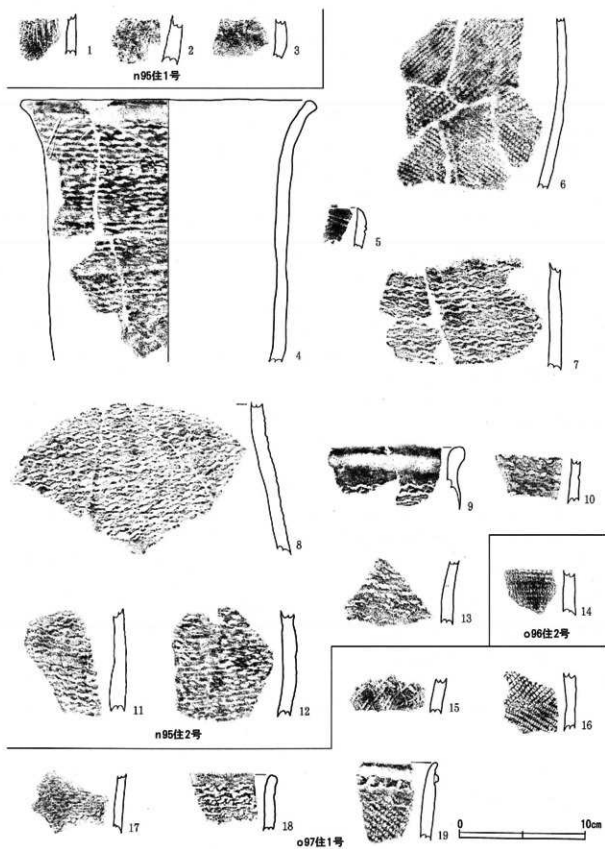
<石棒> 人的加工が施されているものか明確ではないが、石棒状の石が3点出土した（不掲載）。石材は、粘板岩とチャートである。

5. 鉄製品

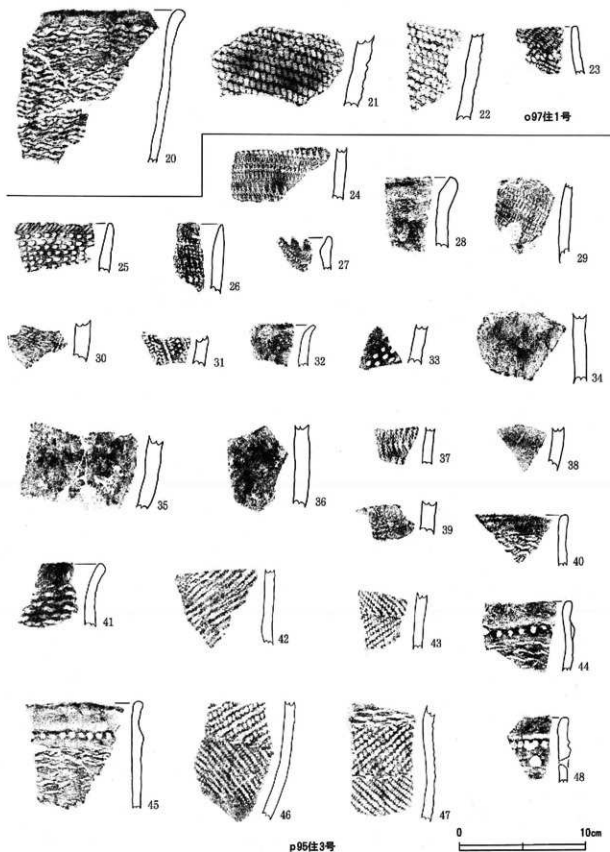
刀子4点、クギ2点、鉄滓約2kgが出土した。r97住居跡1号Q3地点から出土した364の刀子は、バラバラの状態出土したが、接合しはば完形品となった。柄の部分には木質の付着が確認できる。鉄滓は総量で約2kg出土したが、その内約1kgはr97住居跡1号Q3地点からの出土である。

6. その他

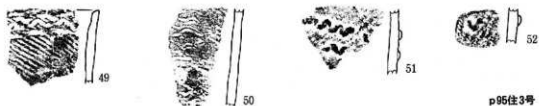
羽口の欠損品が3点出土した。r97住居跡1号から2点とp97住居跡1号から1点である。r97住居跡1号出土の176と177は、カマドの袖材（土材）から出土したもので、何れも残存部位は1/5程である。外面はケズリや指頭圧痕が確認できる。焼成痕は明瞭ではなく、フィゴの装着部などの推定はできない。



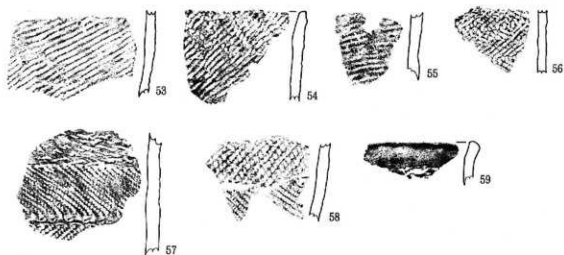
第27図 遺構内出土土器 1



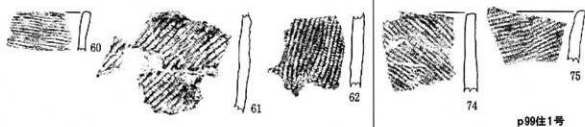
第28圖 遺構内出土土器 2



p95住3号



p98住1号



p99住1号

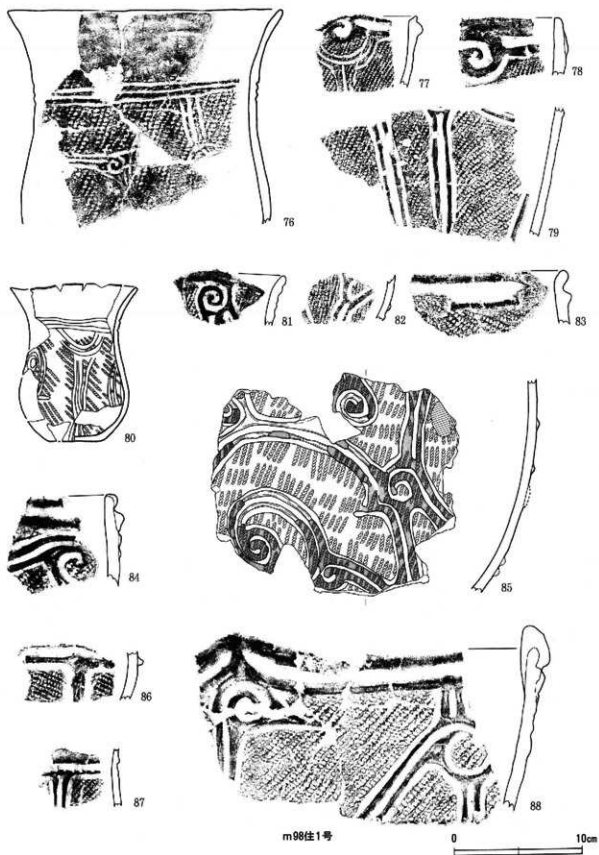


p97住2号

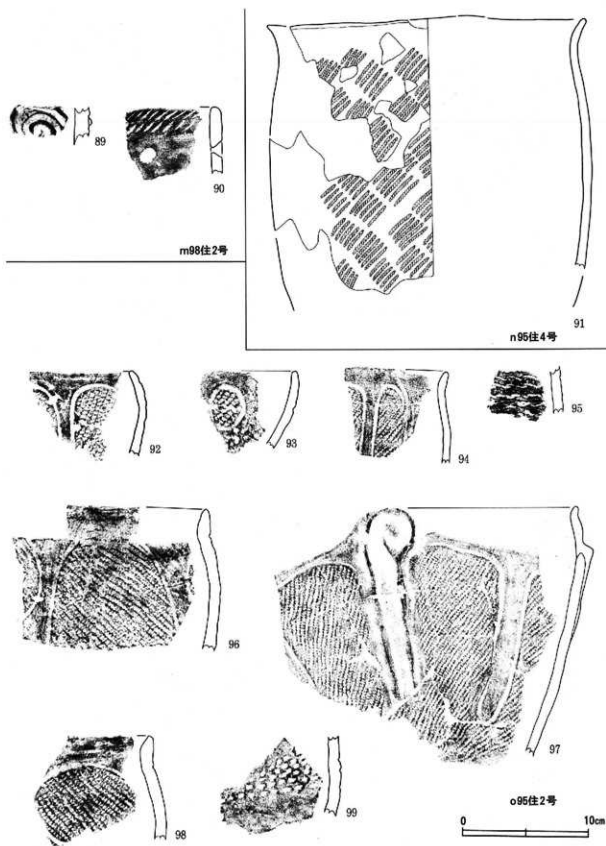
q98住1号

0 10cm

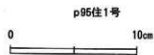
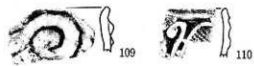
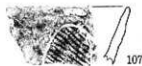
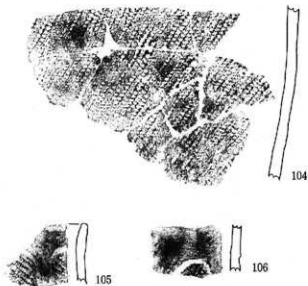
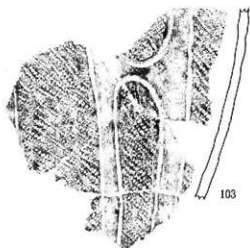
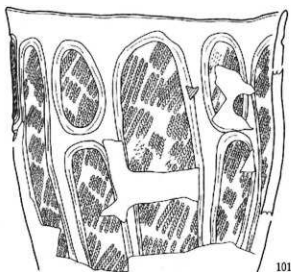
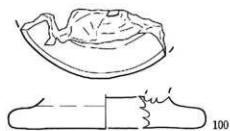
第29图 遺構内出土土器 3



第30圖 遺構内出土土器 4

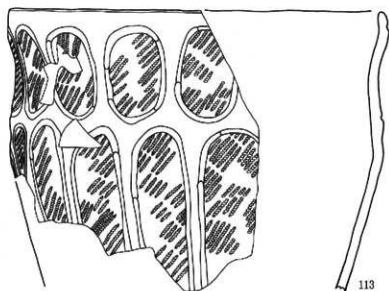
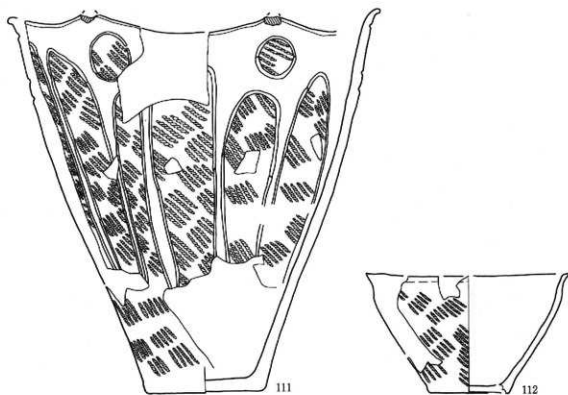


第31図 遺構内出土土器 5



o98住1号

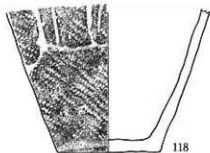
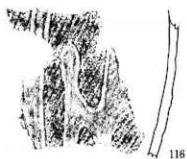
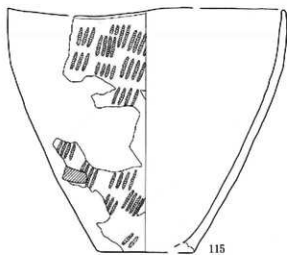
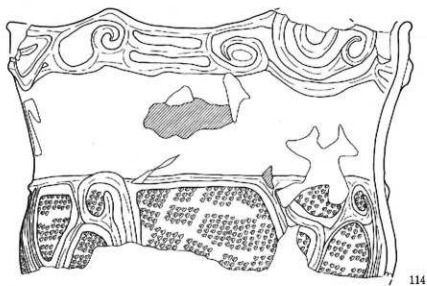
第32图 遺構内出土土器6



r99住1号 床面直上

0 10cm

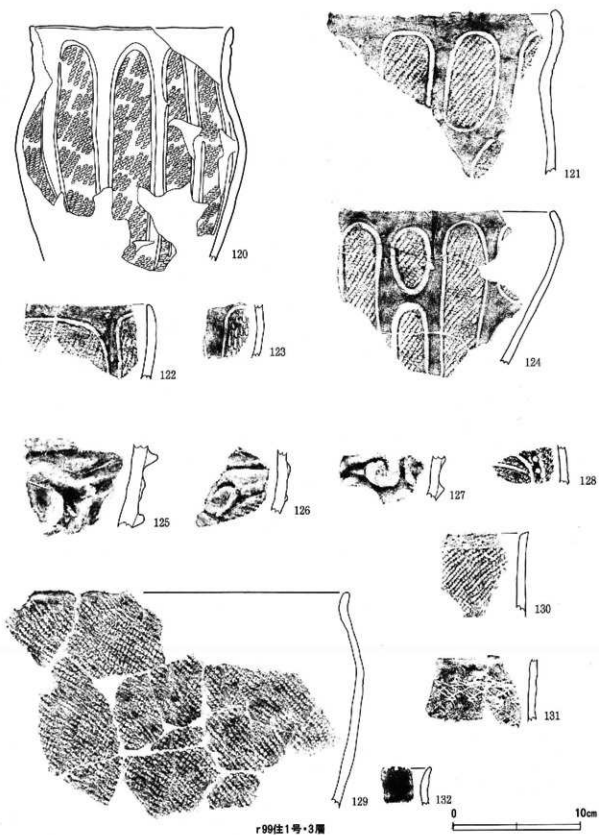
第33圖 遺構内出土土器 7



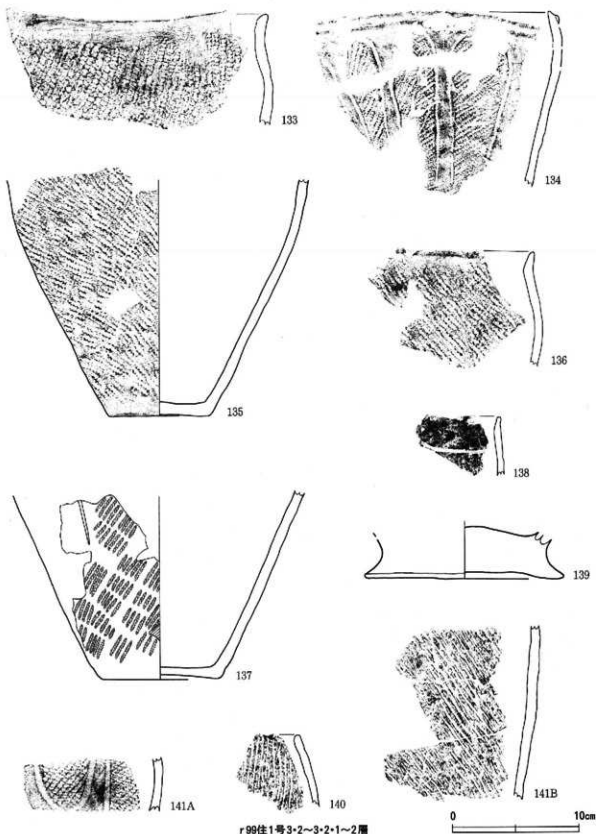
r99住1号 床面直上



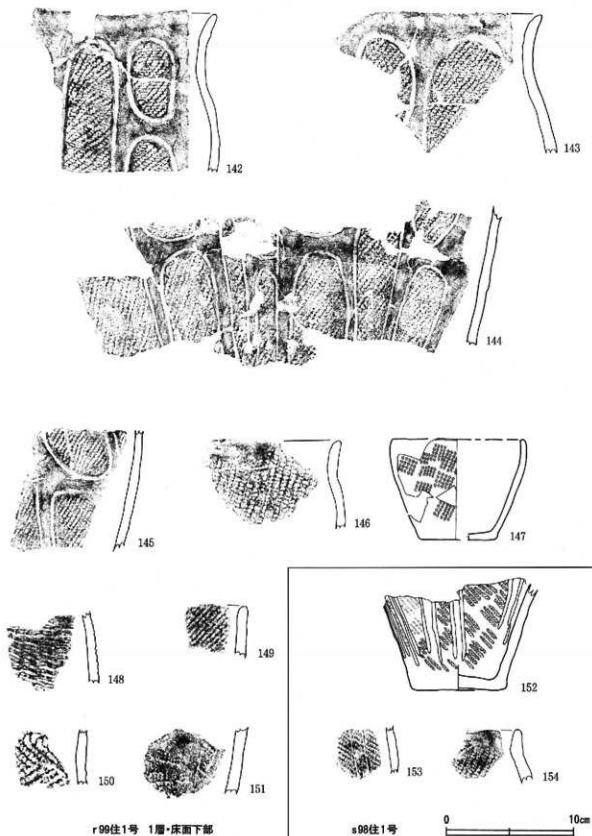
第34图 遺構内出土土器 8



第35圖 遺構内出土土器 9



第36図 遺構内出土土器10



第37図 遺構内出土土器11



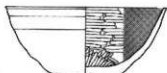
155



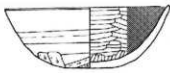
156



158



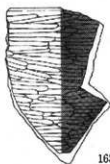
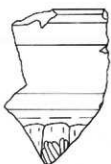
159



160



161

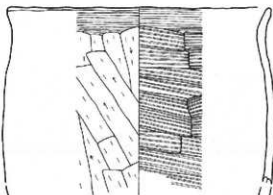


163



162

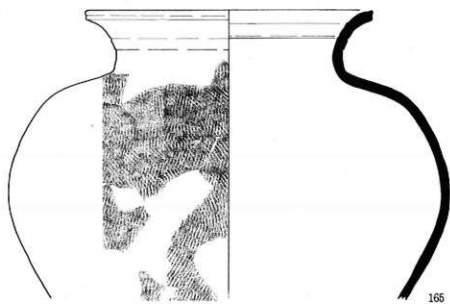
r97住1号



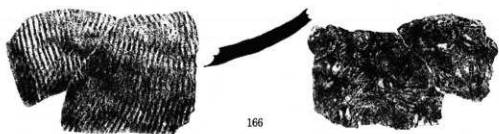
164



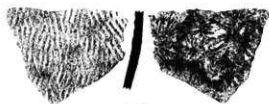
第38図 遺構内出土土器12



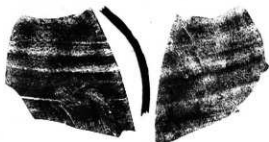
165



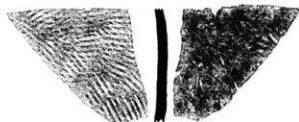
166



167



168



169

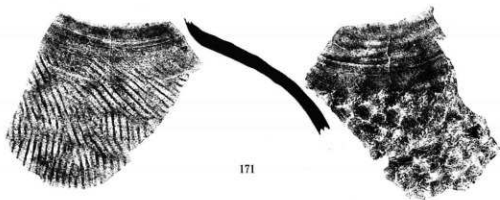
r97住1号



170

0 10cm

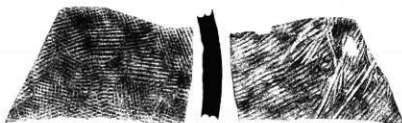
第39図 遺構内出土土器13



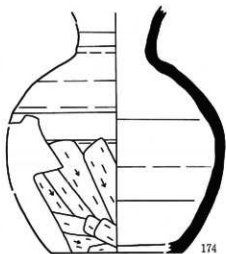
171



172



173



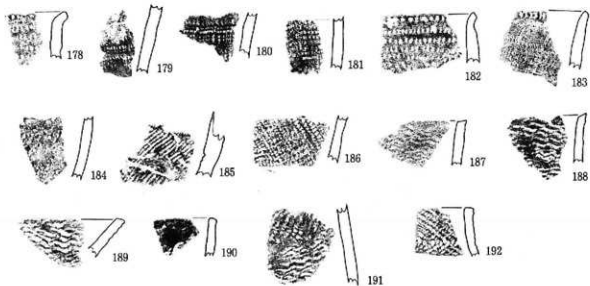
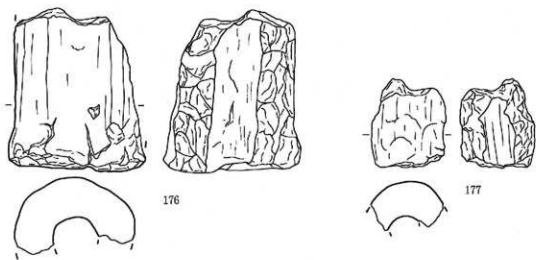
174



r 97住1号

0 10cm

第40图 遺構内出土土器14



r97住1号



n97住1号



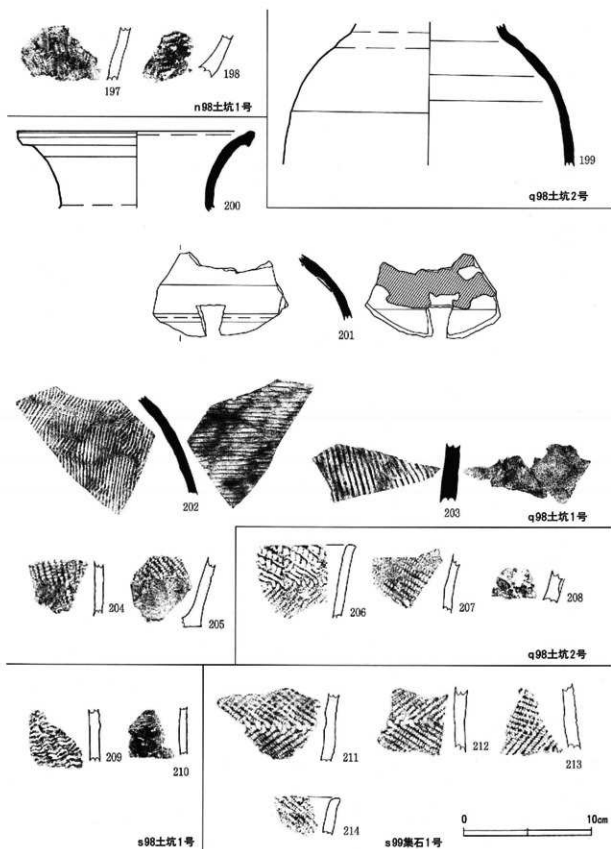
q97住1号



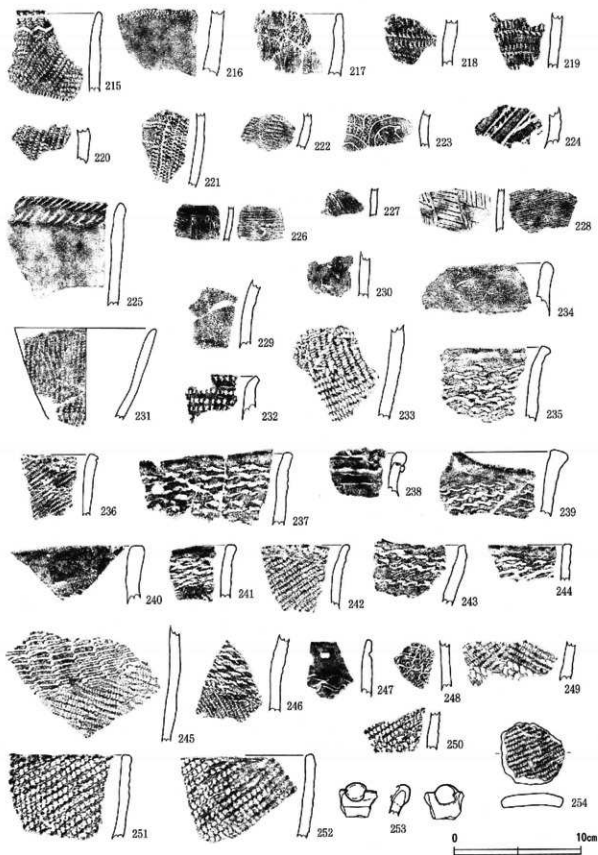
q98土坑1号



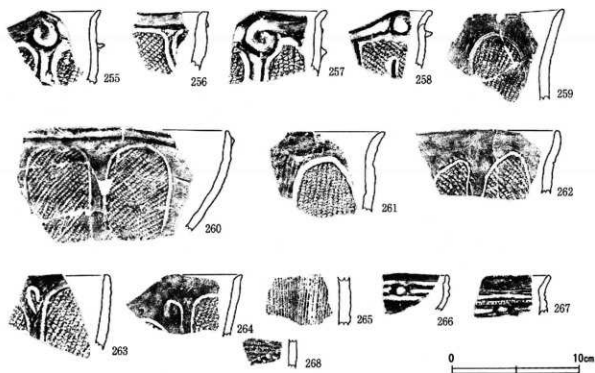
第41图 遺構内出土土器15



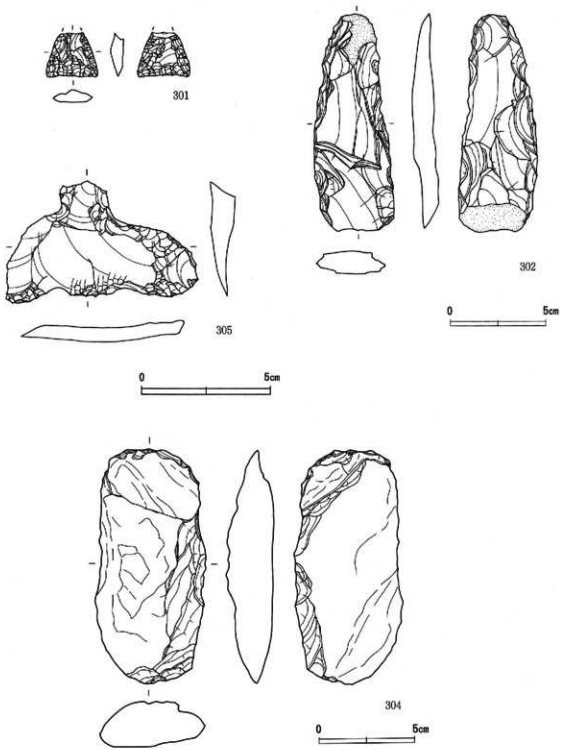
第42圖 遺構内出土土器16



第43圖 遠橋外出土土器 1

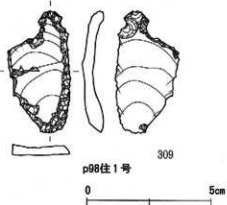
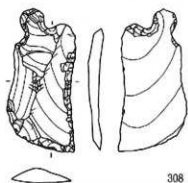
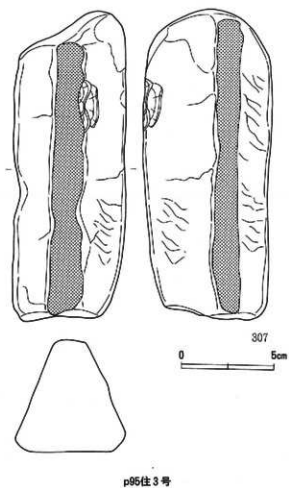
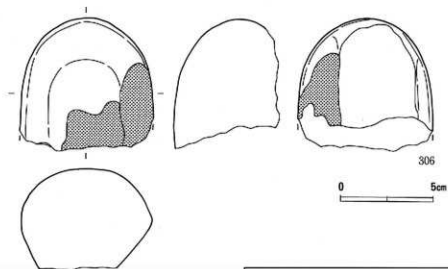


第44圖 遺構外出土器 2

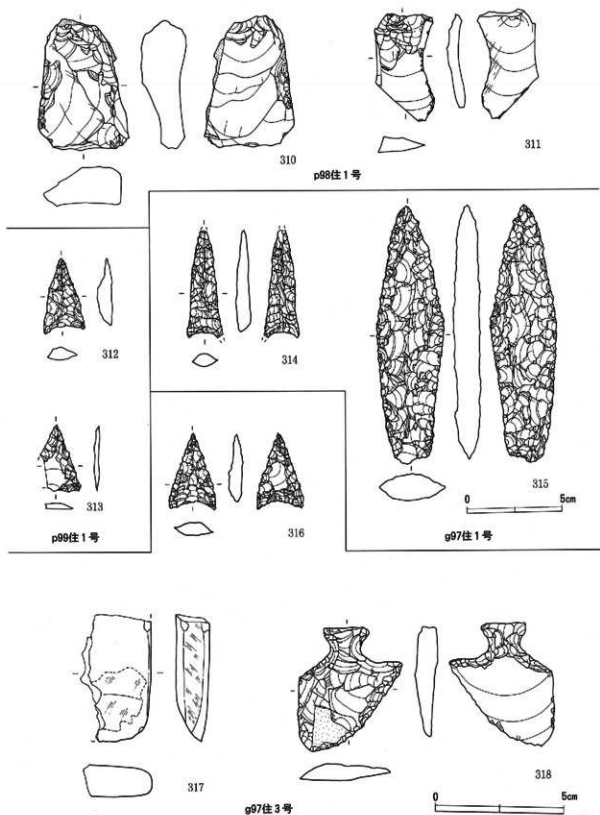


p96住3号

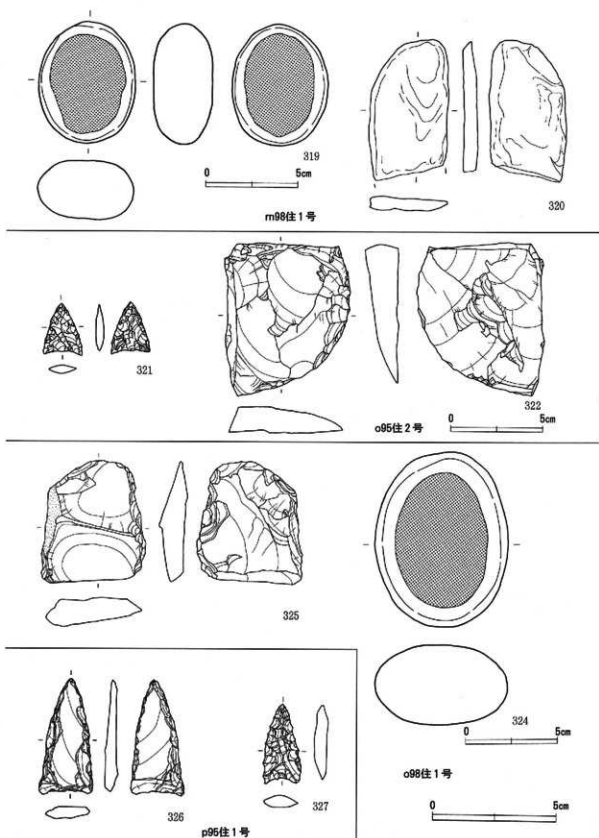
第45图 遺構内出土石器 1



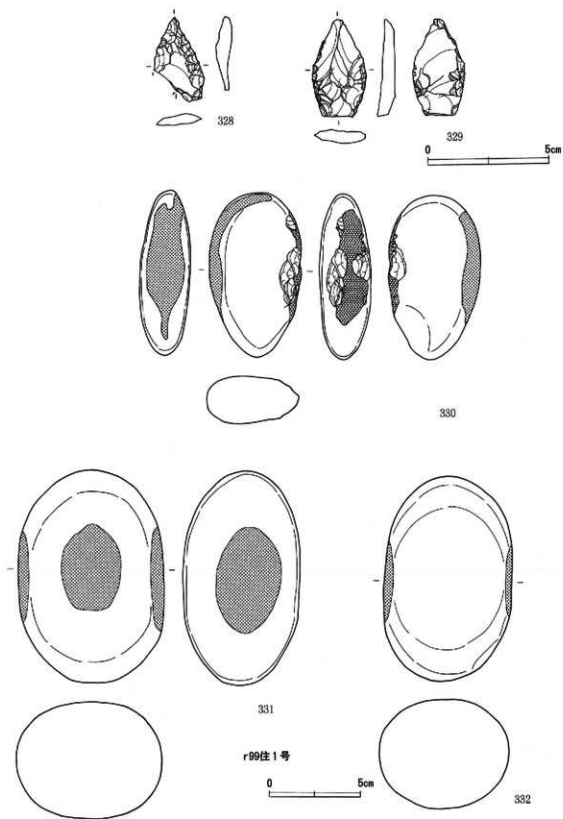
第46図 遺構内出土石器 2



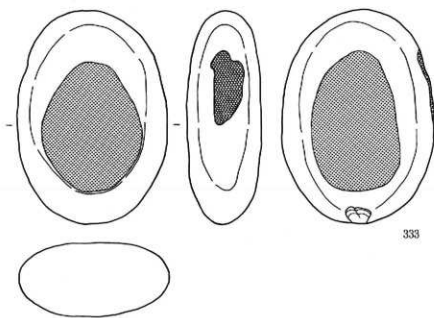
第47図 遠構内出土石器 3



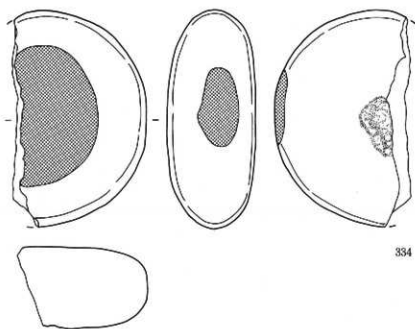
第48图 遺構内出土石器 4



第48図 遺構内出土石器 5



333

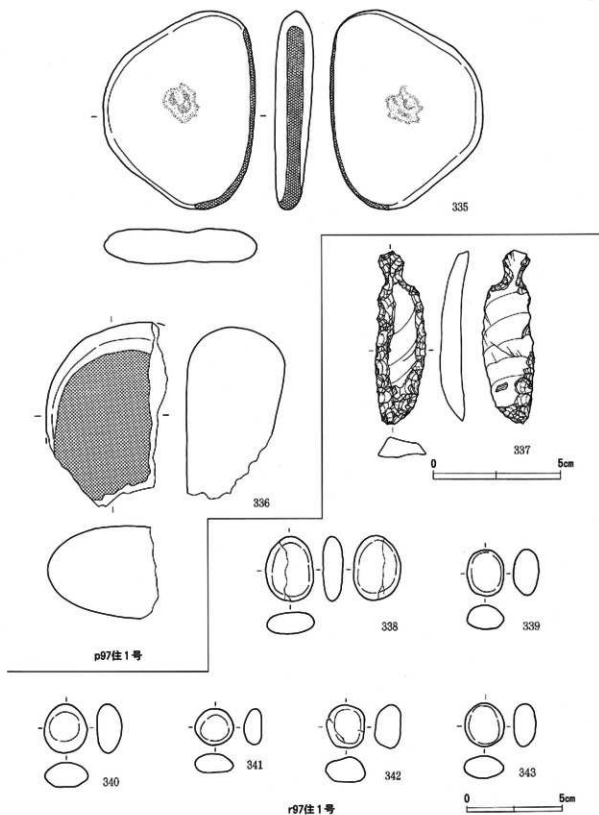


334

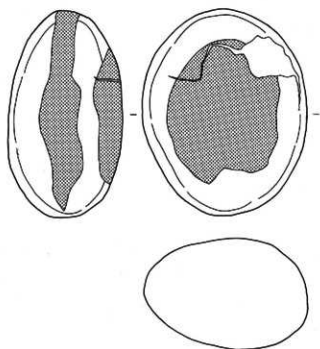
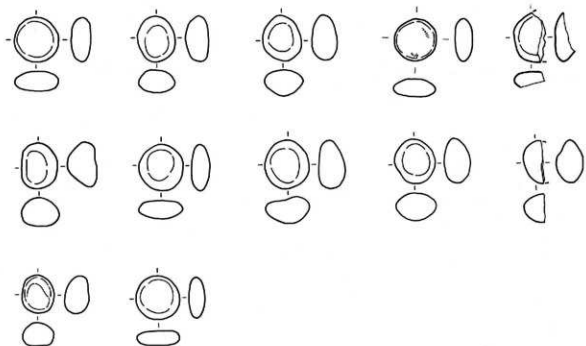
095住1号



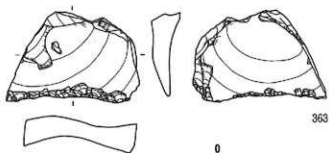
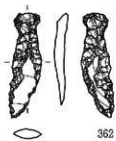
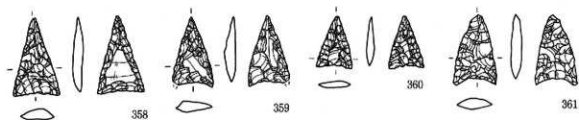
第50図 遺構内出土石器 6



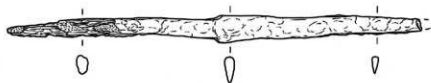
第51圖 遺構内出土石器 7



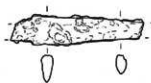
第52図 遺構内出土石器 8



0 5cm



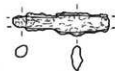
364



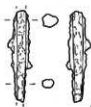
365



366



367



368



369

0 5cm

第53圖 遺構外石器、鉄製品

VI. 分析・鑑定

沢田 I 遺跡出土火山灰の分析鑑定

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は1点で、古代のものとされる竪穴住居址であるp97住居跡1号床面から出土した白色の粘土塊である。

2. 分析・測定方法

(1) テフラ組成分析（火山ガラス比・重鉱物組成分析）

テフラ組成分析的の方法は、次の通りである。

- 1) 超音波洗浄により泥分を除去
- 2) 80℃で恒温乾燥
- 3) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別
- 4) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの形態色調別組成を求める（火山ガラス比分析）
- 5) 偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）

(2) 屈折率測定

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井，1972，1993）による

3. 分析結果

試料のテフラ組成ダイヤグラムを図00に、火山ガラス比分析結果を下表に示す。試料からは、火山ガラスは検出されなかった。また重鉱物組成についても、ごくわずかに磁鉄鉱や黒雲母が含まれているものの、重鉱物が1/4-1/8mm粒子全体の2%に満たないために分析不能であった。本資料には、テフラ粒子はほとんど含まれていないものと考えられる。

※沢田 I 遺跡における火山ガラス比分析結果

試料採取地点	bw	md	pm	その他	合計
p97住居跡1号	0	0	0	250	250

沢田 I 遺跡放射性炭素年代測定

株式会社 古環境研究所

1. 試料

試料は1点で、古代のものとされる竪穴住居址であるp97住居跡1号床面直上から出土した木炭片である。

2. 測定の方法

- ・β線計測法（液体シンチレーション法）を用いた
- ・¹⁴C年代に加え、¹³Cによる補正を行った

試料の種類	重量	前処理・調整
炭化材	58.0 g	酸/アルカリ/酸洗浄 ベンゼン処理 ベンゼン処理

3. 測定結果

¹⁴ C年代 (年BP)	δ ¹³ C (0/00)	補正 ¹⁴ C年代 (年BP)	暦年代	測定No Beta-
1210±60	-26.3	1190±60	交点AD870	137667
			2σ AD685 to 990	
			1σ AD770 to 900	

1) ¹⁴C年代測定値

試料の¹⁴C/¹²C年比から、単純に現在（1950年AD）から何年前かを計算した値。¹⁴Cの半減期は5,568年を用いた。

2) δ¹³C測定値

試料の測定¹⁴C/¹²C比を補正するための炭素安定同位体比（¹⁴C/¹³C）。この値は、標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（0/00）で表す。

3) 補正¹⁴C年代値

δ¹³C測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、¹⁴C/¹²Cの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。

4) 暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動に対する補正により、暦年代（西暦）を算出した。具体的には年代既知の樹木年輪の¹⁴Cの詳細な測定、サンゴのU-Th年代と¹⁴C年代の比較により補正曲線を作成して暦年代を算出する。最新のデータベース（"INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration" Stuiver M., et al., 1998, Radiocarbon 40(3)）により、約19,000年BPまでの換算が可能となっている。ただし、10,000年BP以前のデータはまだ不完全であり、今後も改善される可能性がある。

暦年代の交点とは、補正¹⁴C年代値と暦年代補正曲線との交点の暦年代値を意味する。1σ（68%確率）・2σ（95%確率）は、補正¹⁴C年代値の偏差の幅を補正曲線に投影した暦年代の幅を示す。したがって、複数の交点が表記される場合や、複数の1σ・2σ値が表記される場合もある。

5) 測定No

測定は、Beta Analytic Inc.(Florida, U.S.A)において行われた。Beta-は同社の測定Noを意味する。

CALIBRATION OF RADIOCARBON AGE TO CALENDAR YEARS

(Variables: C13/C12=-26.3; lab mult.=1)

Laboratory Number: Beta-137667

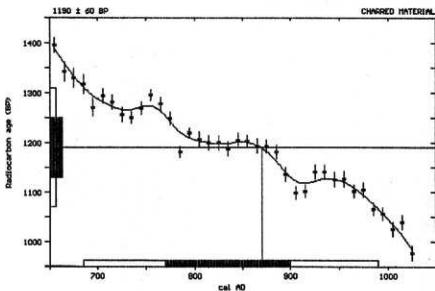
Conventional radiocarbon age: 1190 ± 60 BP

Calibrated results: cal AD 685 to 990 (Cal BP 1265 to 960)
(2 sigma, 95% probability)

Intercept data:

Intercept of radiocarbon age
with calibration curve: cal AD 870 (Cal BP 1080)

1 sigma calibrated results: cal AD 770 to 900 (Cal BP 1180 to 1050)
(68% probability)



References:

Calibration Database

Editorial Comment

Stuiver, M., von der Plicht, H., 1998, *Radiocarbon* 40(3), part-III

INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration

Stuiver, M., et al., 1998, *Radiocarbon* 40(3), p1041-1083

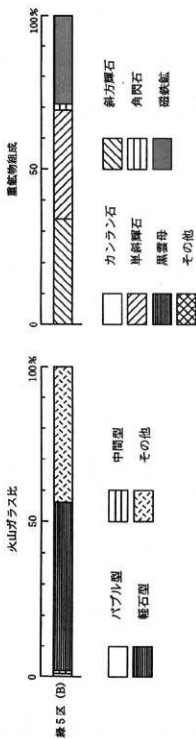
Mathematics

A Simplified Approach to Calibrating C14 Dates

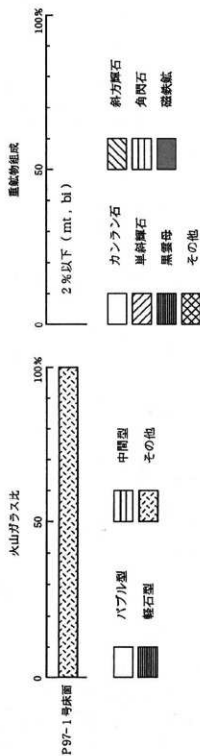
Talbot, A. S., Vogel, J. C., 1998, *Radiocarbon* 55(2), p317-322

Beta Analytic Radiocarbon Dating Laboratory

4985 S.W. 74th Court, Miami, Florida 33155 • Tel: (305)667-3167 • Fax: (305)663-0964 • E-mail: beta@radiocarbon.com



鳥田II遺跡におけるテフラ組成ダイヤグラム



沢田I遺跡におけるテフラ組成ダイヤグラム

第55図 沢田I遺跡における火山ガラス比分析

Ⅶ. まとめ

今回調査を行った第5次調査地は、沢口I遺跡の北西端部に相当すると思われる部分である。調査面積は480㎡、調査地の現況は畑地で、標高は25～26mである。検出された遺構は、縄文時代前期の住居跡14棟、中期の住居跡8棟、古代の住居跡8棟、土坑8基、集石1基である。出土遺物は、土器約15箱、土製品5点、石器類99点、鉄製品6点、鉄滓約2kgである。

検出された遺構の主体は、縄文時代前期前葉・中期中葉～後葉、奈良・平安時代の住居跡で、弥生時代の住居跡の検出はなかったものの、1～4次調査で検出されたのと同時期の範囲で捉えられる。

遺物については、土器は縄文時代中期中葉～後葉のものが多く見られ、住居跡出土を主体とする。古代の住居跡は、r97住居跡1号を除き、土師器や須恵器などの遺物が皆無に近い状態であった。

1. 住居跡

今回検出された住居跡については、調査区の全長が約40m、幅が6～14m（平均すると約12m）と狭い空間であったことと、縄文時代と古代の複合集落であることに起因して遺構同士の重複が激しく、全体像を把握できた住居跡は、o98住居跡1号、n97住居跡1号、p97住居跡1号、r97住居跡1号などの極少数棟に留まる。時代毎に概略する。

(1) 縄文時代前期前葉期の住居跡

該期の住居跡は、推定を含め14棟である。上位に構築されている古代の住居跡や縄文時代中期の住居跡に破壊を受け、完全な形を留めるものではなく、中腹火山灰や壁溝・柱穴・小柱穴の配列及び地床炉と推定される焼土の分布などにより住居跡の存在を認知したものである。残存状態は全般に非常に悪く、平面形や規模などは推測の域を越えないものが全てであるが、認知した住居跡は大形の住居跡が多い様相ではある。ただし、該期の住居跡については、1～4次調査成果を参考に認知したものが大半である。

(2) 縄文時代中期中葉～後葉期の住居跡

該期の住居跡は、推定を含め8棟である。従来土器型式で時期を分ければ、大木8b式期が2棟、大木9式期が6棟である。

平面形や規模については、調査区外に延びるものが大半であるため、詳細は不明であるが、円形を基調に楕円形で、4～5mと推定されるものが多い。なお、第5次調査では、方形と推定される平面形ものは検出されていない。

炉の形態については、炉を検出した住居跡5棟全て単式の石囲炉を持つ。複式炉や地床炉は検出されていないが、平面形・規模と同様に住居跡自体が調査区外に延びるため、全貌を明らかにしていない。

(3) 古代の住居跡

古代の住居跡は、8棟を検出した。

平面形は隅丸方形で、規模は2.5～6.7mまでのものである。その中でカマドの痕跡を検出したのは5棟であるが、全般に残存状態が悪い。カマド煙道部の構造が確認できるのは、o95住居跡1号、p97住居跡1号、r97住居跡1号で、何れも朝り貫き式である。他の2棟は、上部が削平を受けており、朝り貫き式か掘り込

み式が不明である。また、o96住居跡1号としたものは、カマド、柱穴の検出がなく、厳密には堅穴状遺構の域を越えないものである。

時期について、奈良時代と平安時代に大別されると思われるが、r97住居跡1号を除いて、全般に出土遺物が希少である。また、比較的出土遺物に恵まれたr97住居跡1号についても、住居廃絶後に遺物が廃棄された様相を示すことから、遺物の帰属時期が住居跡の機能した時期とは断定できない。さらに、今回の調査で出土した土師器環をみると、ロクロ成形で内面黒色処理を施されたもの以外は出土していない。よって、厳密には奈良時代と思われる遺物は認知していない。上述のことから、第5次調査で検出した住居跡は、1～4次調査成果によるカマドの構築方向から時期を推定したものである。

北カマドを持つものは、奈良時代と推定される。傾向としては、住居北壁の中央付近にカマドを構築する傾向が窺える。今回の調査においては、n95住居跡2号、n97住居跡1号が該当する。

西カマドを持つものは、平安時代と推定される。傾向としては、住居西壁の中央付近よりやや南に寄ってカマドを構築する傾向が窺える。また、奈良時代と比較して、作り替えも多い。今回の調査においては、o95住居跡1号、r97住居跡1号が該当する。

南西カマドを持つものは、沢田I遺跡の過去の調査からは検出されていないことから、今回の調査で検出されたp97住居跡1号が初めての例となる。土師器や須恵器等の出土遺物は皆無であった。単純に考えて北西にカマドを持つ住居跡が、南西にカマドを作り替えた可能性も考えられる。ただし、p97住居跡1号の北西壁付近は攪乱を受けており、また北西壁の床面付近からもカマドの痕跡は確認されていない。第4次調査で検出された北西カマドを持つ住居跡は、出土遺物から奈良と平安の移行期の可能性が窺えた。p97住居跡1号床面出土の炭化材を放射性炭素年代測定を行った結果としては、1210年±60年(年BP)と言う年代を示した。よって、西暦で言えば680年～800年であり、上述した北西カマドを持つ住居同様に奈良と平安の移行期の可能性は十分考えられる。第60図に示した沢田I遺跡の時期別住居跡分布図には、とりえず平安として示した(第1～4次調査検出の北西カマドのものは奈良時代としてある)が、今後に変更が考えられる。

(4) 住居跡出土の炭化材について

本遺跡において、過去に行われた1～4次調査成果も含めて捉えると、古代の住居跡には焼失住居と思われる類例が非常に多いことが挙げられる。対して、縄文時代前期前葉の住居跡からは炭化材の出土がなく、また中期の住居跡からの出土は少量と言える。

第5次調査からは、縄文時代中期後葉1棟及び古代の住居跡3棟から炭化材の出土を得た。分析の結果以下のようなことがわかった。

<縄文時代中期後葉の住居跡> r99住居跡の埋土3層から炭化材が少量得られ、クリの木と同定された。

<古代の住居跡> o95住居跡1号、p97住居跡1号、r97住居跡1号から炭化材が得られた。

o95住居跡1号(平安時代)の床面からは、焼土及び炭化材が多量に出土した。炭化材樹種同定の結果、クリの木であることがわかった。

p97住居跡1号(平安時代)は、床面直上及び埋土上下位付近から多量の焼土を検出した。炭化材は、焼土中からの出土を主体とする。量的には少量の出土で、半炭化(生木に近い)したような状態のものもあった。分析の結果、クリの木であることがわかった。本住居跡は、カマドの煙出し部に石が敷き詰められている様相であることから、意図的に産絶された可能性を示唆される住居跡である(註1)。ただし、上述のように多量の焼土の分布が認められたわりには、炭化材の出土が少ないことが指摘される。推測の域を越えないが、

屋根が土葺きでそれが焼失を受け焼土化した可能性と、消化時に土をかけた可能性が考えられる。

r97住居跡1号（平安時代）は、最も多量の炭化材が出土した住居跡である。分析の結果、クリの木、クサシゲ、ススキノと言う結果が得られた。床面直上で出土したのがクリの木とススキノ、埋土中位で出土したのがクサシゲである。クサシゲについて、鑑定を行った早坂松次郎氏によると、材に茎があればカヤ（ムシロであれば組むため）の可能性もあるが、茎がないことから、床の下に敷いたようなものではないかとご助言を戴いた。

2. 土坑

8基検出した。時代毎の内訳は、縄文時代と推定されるものが4基、古代4基である。

縄文時代の土坑の特徴としては、n98土坑1号やp99土坑1号のように土坑上位に花崗岩が乗るものが見られる。石は掘り方を持って設置されていた可能性はあるが、明確ではなかった。墓標的なものとして捉えれば、墓的な性格が考えられないでもない。時期について、n98土坑1号は時期の下限は縄文時代中期中葉より古いことは明確である。時期の上限は、明確ではないが早期の土器片が出土しており、あるいは早期の土坑の可能性も考えられる。p99土坑1号は、前期中葉の住居跡を破壊して構築されていることから、前期中葉より新しい時期である可能性が高い。

古代の土坑の特徴は、何れも人為により埋め戻しが行われていることが挙げられる。またそれらの土坑は、4基中3基がr97住居跡1号の構築に関わって埋め戻しが行われていることが併せて指摘される。その中でr97住居跡1号の床面下位より検出されたq98土坑1・2号は、炭化材に混じり須恵器片や鉄滓が数点出土した。精査当初、これらの土坑は鉄生産に関わる何らかの施設ではないかと推定していたが、周辺や埋土から鍛造刺片の出土がなかった。結果として、今回の調査では鉄滓・羽目が少量出土したが鉄生産に関わる遺構は検出されなかった。

3. 集石

s99集石と命名したものは、意図的に石が設置された遺構で、下部に浅い土坑状の掘り込みを伴うものである。上位に乗る大きめの花崗岩の下に意図的に敷き詰めたように小さめの花崗岩が集められている。s98住居跡1号（中期後葉）との重複関係や出土遺物・検出面などを加味すると縄文時代前期中葉の可能性が高い。

本遺構の性格については、不明である。推測の域は越えないが墓的なものである可能性も考えられるよう。沢田I遺跡の過去の調査からは、縄文時代前期中葉期の墓と思われる遺構は検出されていないことから、該期の墓の形態が明確ではない現状がある。今後課題を提供すると共に類例の増加に期待したい。

<注>

（注1）意図的に火がつけられている可能性で考えている住居跡である。ただし、細部まで検討すると、それを言及するには問題点が幾つか挙げられる。

VIII. 総括

沢田 I 遺跡は、第 1～5 次調査成果から縄文時代～古代に亘る集落跡であることがわかった。総数で 200 棟を超える住居跡の時期から、隆盛した時期と衰退した時期が存在する。

本遺跡が隆盛を見るのは、縄文時代前期前葉、中期中葉～後葉、弥生時代初期、奈良時代、平安時代の各時期である。

三陸縦貫自動車道の建設に関連して、述べ 5 年間にわたって行われてきた沢田 I 遺跡の発掘調査も、来年以降の調査予定がないことから、とりあえずの区切りを迎えたと思われる。よって、現段階での成果や課題について、とりあえずの総括を行っておきたい。

1. 沢田 I 遺跡の変遷について

沢田 I 遺跡の各時期の概略と問題点を挙げておく。

(1) 縄文時代

縄文時代早期中葉～後葉について、第 4 次調査で機ノ木 I 式を出土した住居跡を 2 棟得たが、何れも残存状態の悪いものである。遺物については、第 5 次調査で約 50 片程の早期中葉（吹切沢式主体）に相当する土器の出土を得た。1～4 次調査で、縄文時代前期～中期の住居跡を検出した調査区の標高は 12～21m 程である。対して、第 5 次調査区の標高は約 25m で、若干高位になることも早期の遺物分布に関係することが指摘できよう。ただし、早期中葉と同定される住居跡は検出できなかった（註 1）。

縄文時代前期前葉については、従来の土器型式で大木 1～2 b 式に比定される土器が出土している住居跡で、80 棟を検出した。主体となる時期は、大木 2 a 式期と捉えられる。住居跡の平面形は、方形、長方形を基調とする。規模は、10m を越える大形の住居跡と 3～4 m の小形の住居跡により構成される。特徴としては、大形の住居跡は地床が持ち傾向が窺えるが、小形の住居跡は持たない。また、本遺跡の特記事項の一つに中環火山灰を埋土中を含む住居跡を多数検出していることが挙げられ、大木式土器と中環火山灰の前後関係解明の資料となる可能性がある。それについては 1～4 次調査報告書において、中環火山灰を埋土中を含む住居跡出土土器と含まない住居跡出土土器として、佐々木清文が取り上げ集成を行っている。大木 2 a 式は中環火山灰降下年代より古く、大木 2 b 式は新しい可能性が示唆される。

集落の空間占地については、住居跡以外の遺構が希薄であることと、遺跡の北東部と南～南西部に相当する部分が未調査であることから、言及するのは時期尚早かもしれない。

現段階での住居跡の分布についてまとめると、大形・小形の住居跡共に長軸方向が、等高線に沿い南東～北西方向に比較的直線気味（並列気味）に分布する様相が窺える。大形と小形の占地としては、調査地南側から大形の長方形の住居跡が南北方向にほぼ直線的な分布を示した後に、小形の住居跡が密集するエリアがあり、遺構の空白地の後、再び大形の住居跡が分布する様相である。上述した遺構の空白地とは、第 5 次調査区と隣接する第 4 次調査区北端付近で、前期の住居跡の検出が空白部分があり、問題を提起する事象であろう。推測される要因としては、中期の住居跡が密集する部分であることから、中期住居構築に際して破壊されている可能性が第一に挙げられよう。ただし、前期前葉において遺構構築が忌避されている空間であるならば、広場など特別な空間である可能性も否定はできない。

縄文時代前期前葉に集落が隆盛を示した後、中期前葉までは人的活動に断絶が見られる。本遺跡に再び隆

感が見られるのは、縄文時代中期中葉である。

中期中葉～後葉の住居跡については、50棟の住居跡を検出した。平面形は円形を基調に楕円形、多角形、卵形などが見られる。住居跡の規模は3～8mで、4～5mを主体とする。炉は石囲炉、複式炉の両者が見られる。複式炉をもつ場合は、その前庭部が斜面下方向となる東あるいは南東壁際に築かれる場合がほとんどである。

集落の空間占地については、前期前葉同様に住居跡以外の遺構が希薄なことから、集落構造は明確ではない。住居跡の分布について言及すれば、等高線に沿って分布する様相で、山裾の緩斜面地全域に分布が見られる。その配列には環状や半環状と言った規則性は窺えないが、住居の長軸を南東～北西に取るものが多く、地形的要因(制約)が住居跡の構築に反映されていると思われる。詳細な時期について、出土土器で該期の住居跡を細分すれば、大木8b式の古い段階は少なく、大木8b式の新しい段階から、大木9式の古い段階に比定されるものが多い様相である。該期の土器については、2節で取り上げ、検討してみたい。また、後続する中期末葉の大木10式期の住居跡が極端に減少する傾向(ほとんどない)も併せて窺える。

縄文時代後期～晩期については、該期の土器は少量得られているが、遺構は確認されていない。本遺跡に限らず山田町で調査された遺跡からは、該期の遺構は確認されていない。調査地に起因する可能性も勿論あると思うが、後期～晩期が希少な現状について、現段階においては同町の全般的な傾向で捉えられる。

沢田I遺跡の縄文時代について、疑問点を幾つか提起するならば、墓域や捨て場の所在が明確ではなく、また土坑類の検出や出土遺物が少ないことが指摘できよう。墓と捨て場については、第5次調査成果から、その一端を覗く資料が検出された。ただし、前期・中期合わせて130棟の住居跡が検出されている現状を加味すると、絶対数は非常に少ない。また遺物についても同様の傾向で捉えられ、第1～4次調査の報告書中において佐々木清文が指摘するとおり、沢田I遺跡は該期の集落遺跡と比較すると石器の出土数が特に少ない。沢田I遺跡出土石器数量の表を見るとおり、石鏃、蔽石、石皿、石棒などの礫石器類はそれが顕著と言える。

(2) 弥生時代

弥生時代初頭においては、7棟の住居跡が確認された。平面形は円形で、規模は3～7m程のものが見られる。石囲炉を中央に持つものが主体である。調査地南部の比較的狭い範囲に占地する。

弥生時代後期については、土器が数点出土しているが、該期と判断される遺構の検出はない。岩手県内において、全般に該期の遺構・遺物は少なく、考古学資料として見た場合、最も希薄な時期の一つに数えられると思う。山田町内で発掘調査された遺跡の全般的な傾向として、該期の土器は比較的出土を得られている現状があることから、今後の調査成果に期待するものである。

(3) 古代

古代の住居跡は第1～5次調査合わせて、奈良時代28棟、平安時代23棟、合計51棟を検出した。

古代の住居跡は、カマドの方向が時代区分の一つの特徴として捉えられる。奈良時代は北、平安時代は西に構築される傾向である。まとめて上述したとおり、南西及び北西を向くカマドを持つ住居跡の時期は、今後に検討課題を残す。また、古代の住居跡には焼失住居跡と推定される状況のものが多く、焼土が多量に検出される場合が顕著である。意図的に火を付けたものか不測の事態的なものか興味ある事象である。カマドの残存状況が一つのキーを握ると思われるが、解明には結び付けられていない。

追記として、古代の鉄生産に関わると思われる遺構や鉄製品、鉄滓が、少数は得られるものの、何れも一端を示唆するにとどまる資料と言える。本遺跡の東側に位置する沢田Ⅱ遺跡からは、古代の製鉄遺構が検出されている。そして、地元の方の話によると、近隣の関口川やその近辺の山などからは羽口が相当数拾える場所があるらしい。本遺跡の未調査部分や周辺地域には、鉄に関わる施設が存在する可能性は極めて高いと思われる。

2. 縄文時代中期中葉～後葉についての若干の考察

上述してきたとおり、沢田Ⅰ遺跡は、縄文時代前期前葉、中期中葉～後葉、奈良時代、平安時代と大きくは4時期に隆盛したことがわかる。検討課題は山積みではあるが、検出された豊富な住居跡は貴重な資料となり得よう。本節では、それらの時代の中から、出土土器が比較的得られている縄文時代中期について取り挙げてみたい。

(1) 沢田Ⅰ遺跡の中期の様相について

沢田Ⅰ遺跡における縄文時代中期中葉～後葉は、50棟の該期住居跡が検出されているものの、全般に出土遺物が少なく、捨て場と思われる空間の発見がなかった。北上川中流域の該期の遺跡と比較して、出土遺物が少ない傾向が窺われ、本遺跡の特徴なのか若しくはこの周辺の沿岸地域的傾向なのか課題を提供すると思われる。

また、房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書中でも若干取り上げたが、沢田Ⅰ遺跡の西に隣接する山の尾根上に所在する房の沢Ⅳ遺跡（本遺跡の集落域との比高は約30mを測る）や東側に所在する沢田Ⅱ遺跡からも、該期の住居跡が検出されている状況も非常に興味深い。中期の人々の活動範囲の広さを物語るだけでなく、様々な事象を推定させるものである。

今回の第5次調査の遺構配置図を、佐々木清文が第1～4次調査報告書中で作成したものに合成して示したのが、第58図である。1節で上述したとおり、房の沢Ⅳ遺跡の立地する西側の山の裾全域にわたって50棟（その内第5次調査分8棟）の住居跡が分布するが、捨て場、墓域、土坑城などは不明と言える状況である。

今回行われた沢田Ⅰ遺跡第5次調査からは、竪穴住居跡を廃棄場として転用された可能性がある住居跡が検出され、当初は本遺跡の遺物廃棄の一端が窺える資料と判断された。ただし、土器の接合状況から遺物だけを投棄したのではなく、土器を包含する土毎捨てられている可能性が高いことがわかった。よって、新たな遺構構築時の排土を、廃絶された住居跡に投げ入れるなどの行為があったことを推定する資料と捉えられる。よって、遺物廃棄の解明には至らない。上記の空間が調査地以外にあるものか、若しくは存在しないのか、そして仮に後者であるならば、なんらかの事象がそこに存在するものと思われる。

(2) 土器の出土状況について

第5次調査は調査面積480㎡であるが、約10箱分程の中期土器が出土した。面積に対する出土土器の割合としては、過去の調査の中では最も高い出土割合である。比較的多くの出土土器を得られた竪穴住居跡として、m98住居跡1号、o98住居跡1号、r99住居跡1号が挙げられる。3棟共に細分の難しい黒色～黒褐色土を埋土とすることから、明確な土層堆積要因は把握できなかったが、何れの住居跡も住居機能時の家財道具ではなく、廃絶後に埋め戻された土中に土器が包含されていたと捉えられるものである。それらの住居跡からは、ほとんどが大木8b式の新しい段階と大木9式の古い段階に比定される土器が出土している。

この傾向は、第1～4次調査も同様の傾向で捉えられ、また両者が共伴関係を示した(註2)住居跡も相当数見られる。勿論、その出土状態や出土層位の問題を無視して言及するのは安易な判断になりかねないが、該期の土器編年に問題を提起する資料である可能性も否定できないと思われる。ただ、残念なことに第5次調査の資料では、該期住居跡同士で重複関係を明瞭に示すものがなく、またその出土状態は時間尺となり得るような廃棄ではない(註3)。ただし、従来から多くの研究者が取り上げながらも、明確な結論が出されていないと思われる大木8b式と大木9式の間隔的な位置付けの土器が、沢田I遺跡からは出土を見ている現状は無視できないと判断される。

沢田I遺跡で検出された50棟に及ぶ中期住居跡は、上述したような大木8b式と大木9式の中間的な土器の位置付けが可能であれば、それに炉の形態や住居跡同士の重複関係を加味させ、最低でも4時期以上の集落の変遷を示すことは可能ではないかと捉えている。そして、上述のような内容が示せれば、一時期の集落が何段階で構成されているものかを解明する手掛かりと該期に見られる複式炉の出現期などの推測資料にもなり得る可能性があるだろう。

(3) 沢田I遺跡出土の大木8b式と大木9式について

本項では、上述したような沢田I遺跡における中期の変遷を辿る足掛かりを示せればと思う。時間の都合もあり、今回は概ねの時間尺を示すことを目的に、出土した土器に着眼することとし、遺構の重複関係、住居跡の平面形・炉形態といった内容は今後の課題としておきたい。

先に大木8b式について、県内における大木8b式の研究としては、「柿の木平遺跡」(盛岡市)発掘調査報告書中に掲載された3種分案(1982高橋他)が有名である。その中で、大木8b式の最も新しい段階に比定されるのが、大木8b-3式とした土器群である。本項は、後統する大木9式との橋渡しとなる大木8b-3式を一つの指標として若干の分析を試みる。

本遺跡の基準資料としては、m98住居跡1号、o98住居跡1号、r99住居跡1号出土土器を中心に第5次調査分の大木8b式と大木9式について集成を行った(第59・60図)。ただし、完形個体がなく、また全体の器形を知り得る資料も非常に希少であるため、器形や文様帯の傾向を探る資料とは言い難い。よって、文様や諸特徴から分類を行い、大木8b式をA～Eに、大木9式をa～iに区分した。

<大木8b式>

- A類 口縁部に隆沈線による渦巻文が施文され、横若しくは縦方向に隆帯が連結される。
- B類 頸部に横位沈線が引かれることで、口縁部と胴部が分離する。口縁部は無文帯となり、胴部は頸部の横位沈線に連結した文様がモチーフされる。
- C類 口縁部に渦巻文が施文され、文様は沈線によりモチーフされる。A・B類の両者の要素が同化して見られる。
- D類 口縁部に渦巻文の施文が見られることは、A類と同様の特徴を有するが、頸部に無文帯を持つことで、口縁部文様帯と胴部文様帯が独立性を持つ。
- E類 小形の渦巻文が複数施文される。

<大木9式>

- a類 隆・沈線及び磨消縄文による懸垂文的区画が見られる。97は頂下に渦巻文の施文が見られる。
- b類 磨消縄文→沈線により方形的な区画が見られる。
- c類 区画の間(磨消縄文部分)に沈線による蕨手状文(渦巻文的文様)がモチーフされる。平縁と波

状口縁がある。

- d類 底部～口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。口縁部に円文、胴部上半～下半に規則性の弱い(窺えない)逆U字状文が施文される。
- e類 口縁部が、外反して立ち上がる器形で、楕円形文(沈線文)と推定される区面文が施文される。
- f類 頸部がやや括れ、口縁部が内湾して立ち上がる器形である。口縁部の楕円形文(沈線文)同士の間付近から、逆U字状文(沈線文)が垂下され、横方向に繰り返して施文される。
- g類 胴部中位に膨らみを持ち、頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形を呈する。口縁部～胴部下半にかけて逆U字状文(沈線)が連続して施文される。
- h類 口縁部の楕円形文と胴部中位～下位に垂下する逆U字状文が上下でセットとなり、その両側に口縁～胴部下半まで逆U字状文(沈線)が施文され、横方向にそれが繰り返される。器形的には、バリエーションが豊富な様相である。
- i類 口縁部が内湾する器形で、g類としたものに比べて、幅広い逆U字状文(沈線)が連続して施文される。

全般に第5次調査出土の大木8b式の資料は、大木8b-3式に比定される新しい段階の土器と捉えらる。大木9式については、上述の9分類した中で、a～d・i類は従来の大木9式の編年観から見て、古い段階に比定される可能性が高いと思われる。

次に沢田I遺跡第1～4次調査資料を取り挙げてみる。

該期の住居跡は42棟検出している。全般に言えることは、出土土器が少なく、完形個体は希少と言える。また、大木8b式においては、大木8b-3式に比定される新しい段階のものが多く、大木9式においては古い様相と捉えられものが多くことから、第5次調査資料と共通する傾向で捉えられる。

今回は、全ての住居跡を検討するのは時間的にむりであるため、多少恣意的では有るが、大木8b式主体、大木9式主体、両者が共存関係(註4)にあると捉えられる住居跡の3種に着眼して抽出してみた。

<大木8b式主体資料> RA164・RA205住居跡が挙げられる。RA164は、埋裏が検出された住居跡で、A・B・E類の土器が出土している。RA205は、大木8b式の中でも新・古の混在が窺え、A類は散見されるが他類は見られない。

追記として、RA164は出土土器的に見れば大木8b式の範疇で捉えられるものであるが、住居の平面形や炉の位置、炉石の配列などは、他とは相違する特徴を持つ住居跡である。現段階では推測の域を越えないが、複式炉との移行期的な時期である可能性が考えられる。

<大木8b式・大木9式共存資料> RA120・143・150・169住居跡は、大木8b式と大木9式が共存関係を示す例と捉えた。

RA120・RA143住居跡出土の中には、第5次調査資料に見られない文様モチーフや特徴を有する土器が存在する。また土器だけで見れば、共存性ではなく、時期的な混在が多い可能性で捉えるべき資料かもしれない。RA150は、A・D・E類とb・e類が共存して見られる。RA169は、A・C・E類とh類が共存する資料であるが、大木8a式と思われるものも含まれているなどの状況から、共存性と言うよりは時期の混在した土器群である可能性が高い。細部を検討すると、本項の趣旨に反した資料である可能性が高いが、今回は遺構の属性を加味していないので、今後検討する必要は残ると思われる。

<大木9式主体資料> RA109・RA144を取り挙げた。RA109は、口縁部付近に小形の渦巻文が残る、

沈線によるモチーフが描かれ、磨消縄文が見られる。器形は大木8b式的ではなく、大木9式の範疇で捉えられる土器であろう。この資料は、まさに大木8b式と大木9式の中間的な特徴を有している土器ではないかと思われる。RA144出土土器は、文様はg類に類似する土器群が主体であるが、内湾した後わずかに外反する口縁部の形態に特徴が窺える土器群である。

全般的な傾向をまとめると、第5次調査資料とは微妙に異質な要素が散見される土器が多いように思われる。沢田I遺跡の中においても、大木9式とする土器のバリエーションは非常に豊富なのであろうか。若しくは、若干の時期差が存在するのであろうか。

近年当センターで調査した該期事例としては、「山王山遺跡」(盛岡市)が挙げられる。報告書を散見する限り、中期においては限りなく大木8b式と言う一型式の時間で捉えられる集落跡で、特に隆盛を迎えるのが大木8b-3式に相当する新しい段階である。それに後続する時期である可能性が窺える資料としては、「上村貝塚」(宮古市)が挙げられる。同遺跡資料の中で着目したいのが、A-5号住居跡である。同住居跡は大木8b式の新しい段階や大木9式の古い段階の土器が多量に廃棄された住居跡である。先の分類でc類とした蕨手状文を伴う土器が、相当数散見できるなど大木8b式と大木9式のトランスキーを握る資料である可能性が高い。ただし、層位毎に出土土器を検討してみた結果としては、廃棄単位には多少の歪みが考えられ、上下関係を明示する資料とは思わなかった。ただし、型式学的には問題を提起する資料であろう。大木9式について、当センターの事例の中で大木9式による短時期に近い若しくは大木9式期主体の集落遺跡は、非常に希少であることを再認識した。「上米内遺跡」(盛岡市)、「館IV遺跡」(北上市)、「繁III遺跡」(盛岡市)などのように、大木8b式か大木10式と複合する遺跡が多く、また両者の隆盛に挟まれ、大木9式期としてはやや希薄な場合が多い。その中で、大木9式による短時期とは言えないまでも、大木9式期を主体とする数少ない事例として、「倍田遺跡IV」(岩手町)を挙げておきたい。同遺跡は、大木8a～大木10式期の住居跡が28棟以上(註5)検出されている。また、報告書が発刊されていないため詳細な内容は言及できないが、同じ岩手町に所在する「秋浦I遺跡」についても該期主体の集落と言える。時間の関係もあり、密に検索を行っていないため、推測の域を越えない内容ではあるが、岩手県南部や沿岸地域に良好と思われる資料が少ない現状を考えると、北緯40°線周辺地域に着眼してみるのも一考であるかもしれない。

結語として、今回取り挙げた中期中葉～後葉の分析は、自身が期待していたような結論は導けなかった。ただ、大木9式の分類に際して、c類とした蕨手状の沈線を伴う土器は、該期土器を研究するに際して、キーを握る可能性がある土器でないかと推定される。沢田I遺跡の集落変遷については、今後何れかの機会に、住居跡同士の切り合い関係や平面形態、炉形態などの要素からアプローチを試みたい事案と思っている。

課題ばかりを残した総括に終わってしまったが、2年間沢田I遺跡の発掘調査に参加できたことは、非常に有意義なことばかりであったと思っている。今後も山田町の発掘調査には関心を示して行きたい。

最後に、今回行った第5次調査は、調査終了間際の2週間雨続きに見舞われたが、その悪環境にも関わらず地元の作業員さん17名には御尽力いただいた。また、室内整理の作業員さんにも、整理最終日の定刻ぎりぎりまで図版作成に従事いただいた。文末ながら記して心から感謝申し上げる。(尾・前田)

<註>

(註1) 第V章で記述したとおり、調査方法や調査員の土の観察眼に起因して発見できなかった可能性も否定できない。それについては、早期末葉～前期初葉についても同様である。調査の反省も兼ねて記述しておく、沢田I遺跡の全般的な傾向としては、上位層で検出される古代、弥生時代の住居跡は、黒色～黒褐

色上中で検出される場合が多く、縄文時代中期は褐色土中で検出される場合が多い。問題は前期の住居跡である。埋土中に中礫火山灰が混入されるものは、比較的肉眼でプラン把握は可能である場合が多いものの、同火山灰の混入のない住居跡は黄褐色土中で黄褐色土によるプラン検出である場合があり、検出が非常に困難であった。その傾向は柱穴や壁溝にも言えることで、推定していた以上に地山土を使用した整地が行われている可能性が考えられる。よって、前期の住居跡の精査が難しいため、それより古い早期の住居跡は本当にないのか木当はあるのか試行錯誤を繰り返しつつも、結果としては不明と言う結果で終わってしまった。調査担当者の星の力量不足によることも大きく、今回は明確な結果を提示できないが、今後の沢田Ⅰ遺跡を始め同地域周辺の該期遺跡の発掘調査の機会には、上述のような問題点も視野においた調査を期待するものである。

(註2) 報告された資料で捉えれば相伴関係が窺える出土状態を示した住居跡は多い。大木8b-3式に後続する資料が含まれている可能性も考えられるので、あえて言及しておきたい。

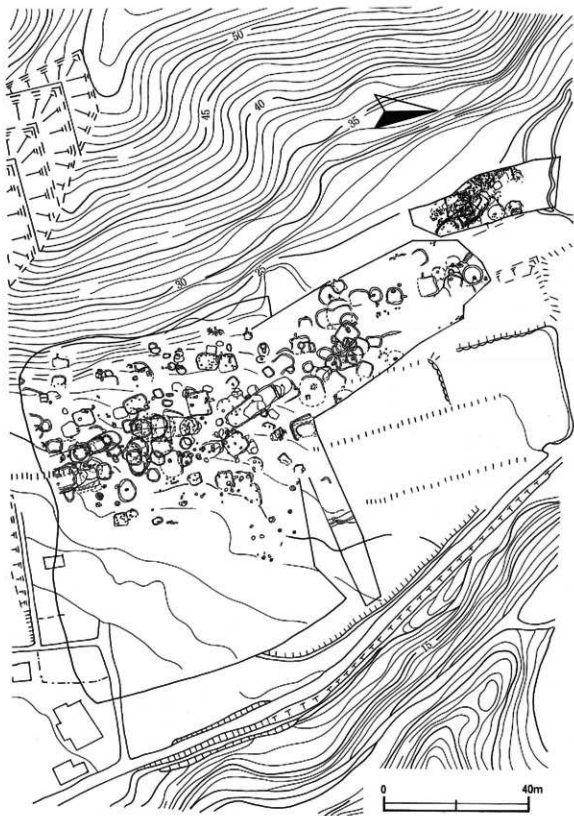
(註3) r99住居跡出土の土器の接合状況は、床面直上出土と埋土上位出土が接合する場合は顕著に確認されるなど、下層出土と上層出土に時間差は把握できない。

(註4) 大木8b式と大木9式が相伴関係を示した住居跡は、比較的多く散見される。ただし、全般に浅い堅穴住居や古代の住居跡に破壊を受けているものが多く、層位的に良好と判断される資料は少ない。

(註5) 縄文時代の住居跡は37棟検出されているが、報告書中で筆者は中期中葉4棟、中期中後葉12棟、中期であるが詳細不明9棟、時期不明が9棟と述べられている。

<参考引用文献>

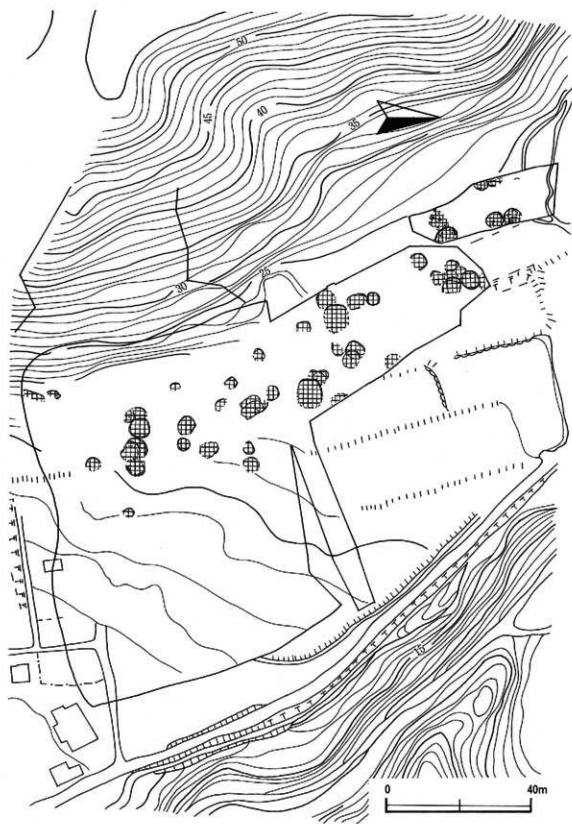
- 浅田知世(1993年)『蟹沢館遺跡発掘調査概報』北上市埋蔵文化財調査報告書14集
高橋憲太郎他(1989年)『トロノ木Ⅰ第1次～第7次』発掘調査報告書宮古市埋蔵文化財調査報告書17集
高橋憲太郎他(1982年)『柿ノ木平遺跡発掘調査報告書』盛岡市文化財調査報告書23集
小田野哲憲(1990年)『上村日塚発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター第158集
佐々木清文(1997年)『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター第268集
佐々木清文・千葉正彦(2000年)『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター第318集
神敏明(1994年)『信田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター第207集



第56圖 第1～5次調査遺構配置圖1



第57図 第1～5次調査遺構配置圖2（縄文時代前期住居跡）



第58圖 第1～5次調査遺構配置圖3（縄文時代中期住居跡）



第59図 第1～5次調査遺構配置図4（奈良時代住居跡）



第60圖 第1～5次調査遺構配置圖5（平安時代住居跡）

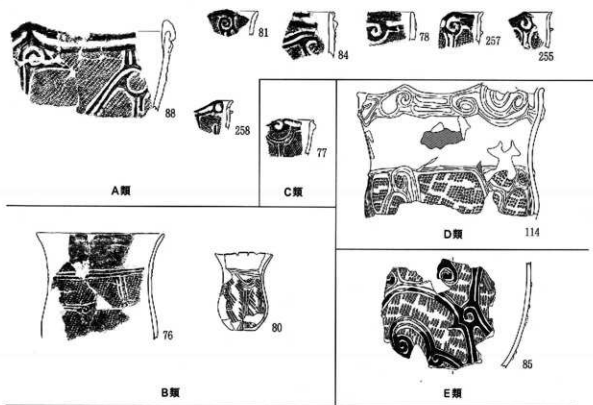
沢田 I 遺構表

遺構時期	1994年	1995年	1996年	1997年	1998年	計
縄文早期住居				2		2
縄文前期住居	5	9	6	46	14	80
縄文中期住居	4	3	3	32	8	50
縄文		10				10
縄文堅穴状	2	1		4		7
縄文土坑		13	9	18	4	44
縄文焼土	3	3	9	1		16
縄文落穴		1	1	1		3
弥生前期住居				7		7
奈良住居	4	5	2	14	3	28
平安住居	7	5	1	5	5	23
古代	1					1
古代堅穴状	1	1				2
古代建物跡				1		1
古代土坑	8	2		8	4	22
古代焼土	2			1		3
竈	1					1
不明堅穴状	1			2		3
不明土坑	36	6		32		74
溝	2			1		3
土	2			2		4
土	1					1
集石					1	1

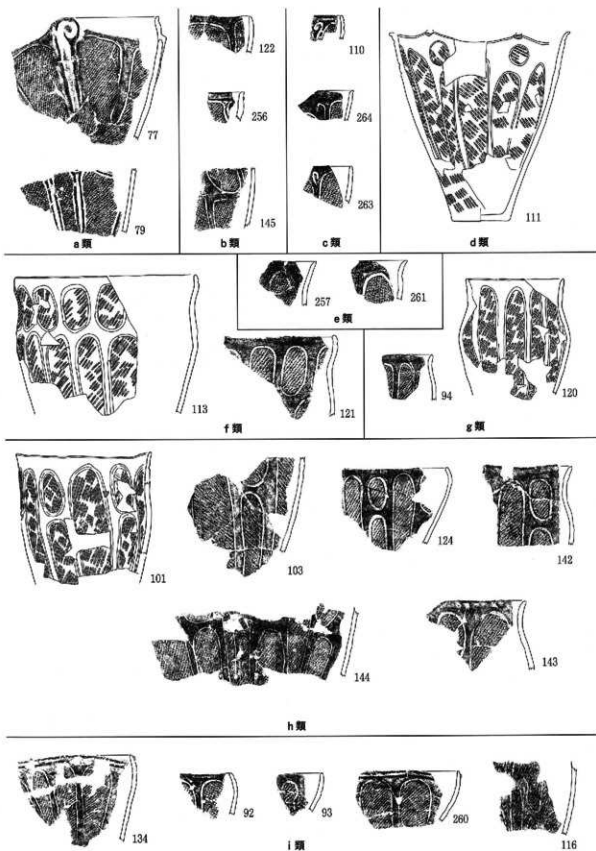
沢田 I 遺物 (石器) 表

器種	94遺構件出	94遺構外	95遺構件出	95遺構外	96遺構件出	96遺構外	97遺構件出	97遺構外	98遺構件出	98遺構外	遺構件出計	遺構外計	計
石鏃	5	14	41	13	23	26	53	92	9	7	131	152	283
石槍	0	4	2	1	1	2	6	2	2	0	11	9	20
石匙	4	19	25	18	20	19	26	60	4	4	79	120	199
削搔器	0	2	12	17	4	5	17	30	5	7	38	61	99
石錐	0	1	1	0	1	0	1	2	0	0	3	3	6
石鏃	0	0	2	0	0	1	0	3	0	0	2	4	6
楔形石器	0	0	1	3	3	1	1	2	0	0	5	6	11
打製石器	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	2	1	3
石鏃	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	1	2	3
石核	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2	0	2
U. F.	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	2	1	3
磨製石斧	0	6	8	7	1	1	10	13	1	2	20	29	49
礫石斧	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
磨石	2	7	46	19	6	7	48	25	26	3	128	61	189
凹石	0	4	1	1	0	0	1	0	1	0	3	5	8
敲打石	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1
石皿	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	2
台石	0	0	0	0	2	0	1	0	2	0	5	0	5
石棒	0	0	0	1	0	0	0	0	3	0	3	1	4
石剣	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	1	1	2
砥石	2	0	1	1	1	0	1	1	1	0	6	2	8
石製品	0	0	1	5	0	0	0	2	18	0	19	7	26

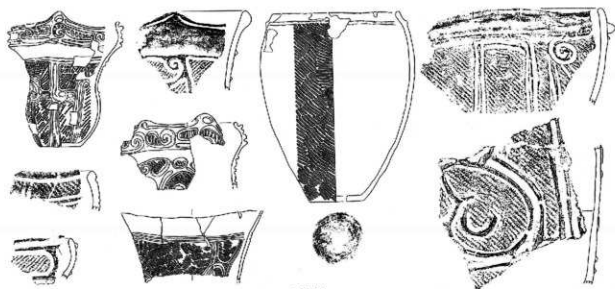
第 2 表 沢田 I 遺跡遺構・遺物総数



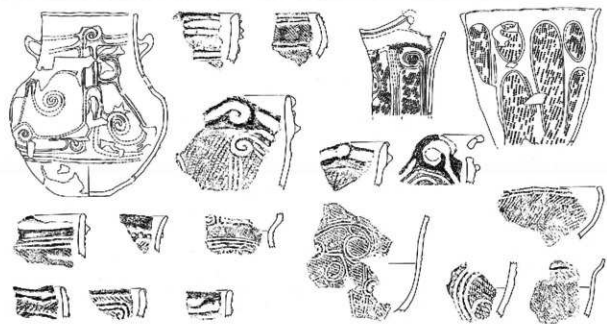
第61圖 「沢田」遺跡」第5次調査出土大木8b式集成図



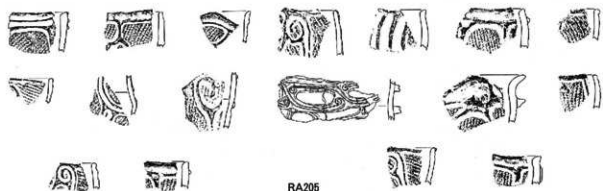
第62圖 「沢田 I 遺跡」第 5 次調査出土大木 9 式集成図



RA164

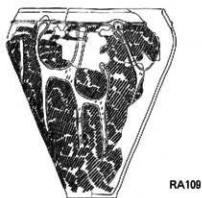
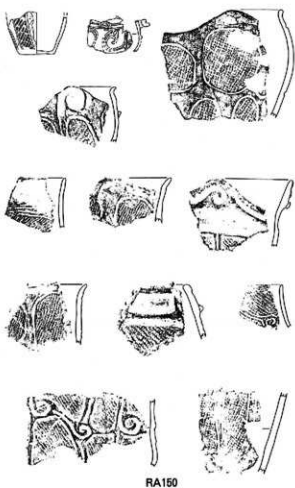
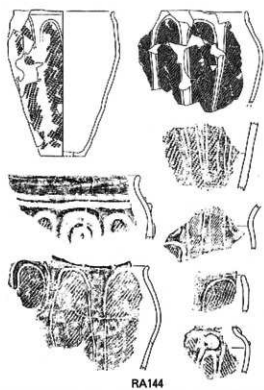
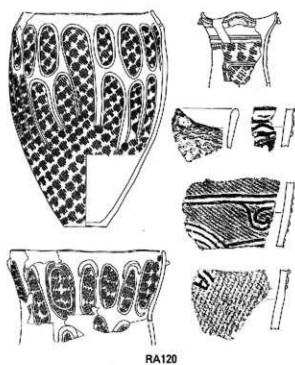
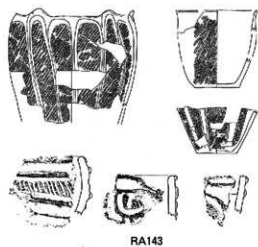


RA169



RA205

第63圖 「沢田1遺跡」第1～4次調査中期住居跡出土土器



第64図 「沢田」遺跡」第1～4次調査中期住居跡出土土器

第4表 遺物観察表

順番	出土地点	層位	器種	属	残存部位	口縁部形態	文様・特殊	文	底面調整	底面形態	分類	出土	備考
31	p55E37-Q6	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	自然隆起文？ 自然文		自然隆起文		I	埴土 砂灰	埴土の形式、大弁式に付行
32	p55E39-Q1	埴土中	深鉢	深鉢	口縁部	平縁、丸み	斜状文(深竹管)		自然隆起文		I	埴土 砂灰	55と同一個体の可能性
33	p55E39-Q5	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み					I	埴土 砂灰	55と同一個体の可能性
34	p55E39-Q5	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み					I	埴土 砂灰	55と同一個体の可能性
35	p55E39-Q6	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み					I	埴土 砂灰	55と同一個体の可能性
36	p55E39-Q6	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み					I	埴土 砂灰	55と同一個体の可能性
37	p55E39-Q2	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	自然隆起文		自然隆起文		I	埴土 砂灰	55と同一個体の可能性
38	p55E39-Q1	埴土中	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み					I	埴土 砂灰	55と同一個体の可能性
39	p55E39-Q1	埴土中	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み					I	埴土 砂灰	55と同一個体の可能性
40	p55E39-Q1	埴土中位	深鉢	深鉢	口縁部	平縁、丸み					I	埴土 砂灰	55と同一個体の可能性
41	p55E39-Q5	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	車輪筋条体		車輪筋条体		II-1	埴土 砂灰	外面に付着
42	p55E39-Q5	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	車輪筋条体		車輪筋条体		II-1	埴土 砂灰	外面に付着
43	p55E39-Q3	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-1	埴土 砂灰	外面に付着、口縁部外反り
44	p55E39-Q3	埴土中位	深鉢	深鉢	口～胴部	平縁、丸み	車輪筋条体		車輪筋条体		III-2	埴土 砂灰	外面に付着、45と同一個体の可能性
45	p55E39-Q3	埴土中位	深鉢	深鉢	口～胴部	平縁、丸み	車輪筋条体		車輪筋条体		III-2	埴土 砂灰	外面に付着、42と同一個体の可能性
46	p55E41-Q3	埴土中	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L.・L.R. 車輪筋条体		R.L.・L.R. 車輪筋条体		III-1	埴土 砂灰	内外面に付着
47	p55E39-Q0-Q1	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L.・L.R. 車輪筋条体		R.L.・L.R. 車輪筋条体		III-2	埴土 砂灰	内外面に付着
48	p55E41-Q3	埴土中位	深鉢	深鉢	口縁部	平縁、丸み	車輪筋条体		車輪筋条体		III-2	埴土 砂灰	外面に付着、補修孔在り
49	p55E41-Q3	埴土中位	深鉢	深鉢	口～胴部	平縁、丸み	車輪筋条体		車輪筋条体		III-2	埴土 砂灰	外面に付着
50	p55E39-Q6	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-2	埴土 砂灰	外面に付着
51	p55E39-Q3	埴土中位	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	車輪筋条体		車輪筋条体		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
52	p55E39-Q4	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	車輪筋条体		車輪筋条体		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
53	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
54	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
55	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
56	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
57	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
58	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
59	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
60	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
61	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
62	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
63	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着
64	p55E41-Q3	埴土中上	深鉢	深鉢	胴部	平縁、丸み	R.L. 筋位		R.L. 筋位		III-4	埴土 砂灰	外面に付着

第5表 遺物観察表

調査番号	出土地点	層位	器種	形状部位	口縁部形状	文様・特徴	用途	内面調査	底部形状	分類	胎土	備考
65	597住2号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	上川名口式相当と推定される
66	597住2号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	初期弥生の前期後半に在り
67	597住2号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内面硝化物質
68	597住2号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	外面保存
69	597住2号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	外面保存
70	597住2号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	外面保存
71	597住2号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	外面保存
72	598住1号P1	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
73	598住1号P1	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	外面硝化物質
74	598住1号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
75	598住1号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
76	598住1号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
77	m98住1号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
78	m98住1号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
79	m98住1号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
80	m98住1号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
81	m98住1号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
82	m98住1号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
83	m98住1号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
84	m98住1号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
85	m98住1号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
86	m98住1号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
87	m98住1号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
88	m98住1号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
89	m98住2号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
90	m98住2号	最上位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
91	n5574号	庭(一社跡)	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
92	o5512号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
93	o5512号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
94	o5512号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
95	o5512号	床面	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
96	o5512号	埋土1位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
97	o5512号	埋土1位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
98	o5512号	埋土1位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
99	o5512号	埋土1位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
100	o58住1号	Q埋土上	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
101	o58住1号	埋土1位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
102	o58住1号	埋土1位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
103	o58住1号	埋土1位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
104	o58住1号	埋土1位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
105	o58住1号	埋土1位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質
106	o58住1号	埋土1位	深鉢	胴部	口縁部	丸縁	丸縁	丸縁	丸縁	Ⅱ	細粒多量	内外面硝化物質

第6表 遺物類表

照会番号	山土層点	層位	層名	保存部位	口縁部形状	文様・特徴	和文	内面図	底面形状	分類	備考
107	r59E1号	埋土下位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-2	外面灰土層
108	r59E1号	埋土上層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-2	外面灰土層 用途不明の灰土層
109	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	大木8.5m式の遺層跡
110	r59E1号	埋土中位	深鉢	1/2芝形	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	内外面灰土層
111	r59E1号	埋土中位	深鉢	1/2芝形	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	成形技法は117と類似する (制作者が同じか)
112	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	粗縁少量
113	r59E1号	埋土上層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-2	粗縁少量
114	r59E1号	埋土上層	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	文様の高さはないものの精製土器とみられる
115	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	外面灰土層
116	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	外面灰土層
117	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	外面灰土層
118	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	外面灰土層
119	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-5	時期は検討を要する
120	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	粗縁少量
121	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	外面灰土層、内面割落あり
122	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	外面灰土層
123	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	外面灰土層
124	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	内面黒色を写す
125	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-2	砂粒
126	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-2	砂粒
127	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-2	砂粒
128	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-5	裏系土層の可能性あり
129	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-2	粗縁少量
130	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-6	粗縁少量
131	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	内外面灰土層、時期検討を要する
132	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-5	
133	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	全体に土色が深褐色を帯びる
134	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	粗縁少量
135	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-3	粗縁少量
136	r59E1号	埋土中位	深鉢	口縁部	平縁、丸み	文様なし	平縁、丸み	ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ	IV-5	外面灰土層

第8表 遺物觀察表

遺物番号	出土地・坑名	層位	器種	器位	保存部位	口縁部形態	文様・特徴	地文	内面調整	底面形態	分類	加工	備考
208	Q88土坑2号	Ⅱ層上位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			I-4	粗漚	
209	Q88土坑1号	Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	外面深漚面付着 若し薄手
210	Q88土坑1号	Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-5?	粗漚	
211	Q88土坑1号	Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1~2	粗漚	
212	Q88土坑1号	Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1~2	粗漚	
213	Q88土坑1号	Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1~2	粗漚	
214	Q88土坑1号	Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	外面保存着
215	Q86	Ⅱ層上位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	外面保存着
216	Q88	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	外面保存着
217	Q85-m97	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	内面灰化物付着
218	Q88	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	
219	Q87	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	
220	Q87	Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	
221	Q86	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	
222	Q86	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	
223	Q86	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	
224	第5トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	薄手 比較的丁寧なつくり
225	Q86	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	石英
226	Q88	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-1	粗漚	灰燼とよもど能くはくする
227	Q86	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-3	粗漚	
228	Q86	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-3	粗漚	
229	Q86	Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-4	粗漚	
230	Q87	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-4	粗漚	
231	Q87	Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-4	粗漚	外面保存着
232	Q88	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-4	粗漚	口縁部は外反する
233	Q88	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-4	粗漚	内面灰化物付着
234	Q85	Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	2個と同一体の可能性あり
235	Q88	Ⅱ層下位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	外面保存着
236	第41トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2?	粗漚	外面保存着
237	Q89	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2?	粗漚	外面保存着
238	第51トレンチ	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2?	粗漚	外面保存着
239	Q86	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	外面保存着
240	Q85	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	外面保存着
241	Q85	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	外面保存着
242	Q86	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	外面保存着
243	第5トレンチ	Ⅱ層中位	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	外面保存着
244	Q85	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	外面保存着
245	Q86	表層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	外面保存着
246	Q89	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-2	粗漚	外面保存着
247	Q88	Ⅱ層	深鉢	口縁部	略	平縁、丸み	不整然糸文	単軸筋糸体			Ⅱ-3	粗漚	外面保存着

第9表 遺物調査表

掲載番号	出土地点	層位	器種	残存部位	口縁部形態	文様・特徴	埋文	内面調査	底面形態	分類1	胎土	備考
248	p85	II層	深鉢	口縁部		S字状波文	R.L.R.位			III-3	織物少量	内面黒色を認む
249	p99	II層	深鉢	口縁部		羽状波文	R.L.R.位			III-2	織物少量	
250	p59	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			III-6	織物少量	内面煤付着、p52と同一個体の可能性在り
251	p96	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			III-6	織物少量	外側煤付着、p51と同一個体の可能性在り
252	p96	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			III-6	織物少量	
253	p96	II層	深鉢	口縁部	波状、丸み		R.L.R.位			III-6	織物少量	内外面黒色を認む、大木8の形式を考慮し、可成りな土質である可能性在り
254	p97	II層	深鉢	口縁部	平縁、角状		R.L.R.位			III-6	織物少量	外側黒色を認む、大木8の形式を考慮し、可成りな土質である可能性在り
255	q96	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			IV-2	砂粒少量	
257	p88	II層	深鉢	口縁部	小波状、丸み		R.L.R.位			IV-2	砂粒少量	
258	p86	II層	深鉢	口縁部	波状、丸み		R.L.R.位			IV-2	砂粒少量	
259	q88	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			IV-2	砂粒少量	
260	p85	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			IV-3	粗砂少量	
261	q88	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			IV-3	粗砂少量	
262	第15トレンチ	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			IV-3	砂粒少量	口縁部外収する 外側黒色を認む、大木8 b~9式の波状と推定さ れる
263	p88	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			IV-3	砂粒少量	
264	p89	II層	深鉢	口縁部	波状、内縁を		R.L.R.位			IV-3	砂粒少量	
265	第15トレンチ	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			IV-5		
266	p86	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			VI		外側煤付着
267	p88	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			VI		
268	p85	II層	深鉢	口縁部	平縁、丸み		R.L.R.位			VI		

掲載番号	出土地点	層位	器種	種類	器種	部位	外側調査 (断面・底面)	内面調査 (口縁部)	底面	口径	底径	器高	備考
155	p97住1号Q4	坪面	土師器	土師器	土師器	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	13.7	5.2	5.3	口縁部、内面、内面煤付着
156	p97住1号Q3	坪面	土師器	土師器	土師器	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	12.8	5.2	5.2	口縁部、内面、内面煤付着
157	p97住1号Q4	坪面	土師器	土師器	土師器	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	12.8	5.2	5.2	口縁部、内面、内面煤付着
158	p97住1号Q4	坪面	土師器	土師器	土師器	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	12.8	5.2	5.2	口縁部、内面、内面煤付着
159	p97住1号Q1・ Q2・Q3・468 1号	坪面	土師器	土師器	土師器	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	12.8	5.35	5.5	口縁部、内面、内面煤付着
160	p97住1号Q3	坪面	土師器	土師器	土師器	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部	13.2	4.8	6.1	口縁部、内面、内面煤付着、 丸底を認む
161	p97住1号PP1	坪面	土師器	土師器	土師器	口縁部	口縁部	口縁部	口縁部				口縁部、内面

第10表 遺物観察表

掲載番号	出土地点	層位	種類	部位	外面調整 (口蓋部)	外面調整 (脚・底面)	外面調整 (口蓋部)	内面調整 (口蓋部)	口径	底径	器高	備考
162	1979年19Q4・ 698土坑1号 (土坑)	埴土中位・上位 (4上)	土師器 甕	口～底部	ミガキ	ミガキ・底 面(ミガキ)	ミガキ	ミガキ	15.9	(4.4)	5.9	ロクロ、内底、内外面割落、 ほぼ全周に割落ミガキ
163	1979年19Q4 床面遺上	埴土中位	土師器 甕	口～底部	ロクロナ ケズリ	ケズリ	ミガキ	ミガキ				ロクロ、内底
164	1979年19Q4 下堀内	埴土中位	土師器 甕	口～底部	ナデ	ケズリ	ハケメ	ミガキ				ロクロ、内底
165	1979年19Q1-Q2 698土坑1号、 698土坑2号	埴土上～下位・床 面遺上	須恵器 甕	口～底部	ロクロ	タタキメ	ロクロ	ロクロ	38.2		(38.7)	出土時はQ1床面、採掘及び Q1掘削に際しては50.0cmを測る
166	1979年19Q2 698土坑2号	埴土中位	須恵器 大甕	口～底部	ロクロ	タタキメ	ロクロ	ロクロ				
167	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
168	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
169	1979年19Q4	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
170	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
171	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
172	1979年19Q3	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
173	1979年19Q3	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
174	1979年19Q4	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
175	1979年19Q4	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
194	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
195	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
196	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
199	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
200	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
201	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
202	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
203	1979年19Q1	埴土中位	須恵器 大甕	胴・下半部	タタキメ	タタキメ		アチグ				
301	1956年3号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	11.8	2.0	0.5	石製	北山	北山		備考
302	1956年3号	埴土中位	石製 甕(欠)	胴・下半部	4.2	1.2	0.2	石製	北山	北山		備考
305	1956年3号	埴土中位	石製 甕(欠)	胴・下半部	4.5	1.4	0.6	石製	北山	北山		備考
304	1956年3号	埴土中位	石製 甕(欠)	胴・下半部	12.3	5.7	2.5	石製	北山	北山		備考
306	1956年3号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	17.4	7.3	5.8	石製	北山	北山		備考
307	1956年3号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	17	6.4	6.2	石製	北山	北山		備考
308	1956年1号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	5.9	2.7	0.9	石製	北山	北山		備考
309	1956年1号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	5.0	2.5	0.9	石製	北山	北山		備考
310	1956年1号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	3	1.6	0.6	石製	北山	北山		備考
312	1956年1号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	2.6	1.1	0.2	石製	北山	北山		備考
313	1956年1号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	2.6	1.1	0.2	石製	北山	北山		備考

掲載番号	出土地点	層位	種類	部位	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(kg)	石質	産地	備考
301	1956年3号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	(1.8)	2	0.5	11.4	頁岩	北山	備考
302	1956年3号	埴土中位	石製 甕(欠)	胴・下半部	4.2	1.2	0.2	4.5	頁岩	北山	備考
305	1956年3号	埴土中位	石製 甕(欠)	胴・下半部	4.5	1.4	0.6	12.3	頁岩	北山	備考
304	1956年3号	埴土中位	石製 甕(欠)	胴・下半部	17.4	7.3	5.8	17	頁岩	北山	備考
306	1956年3号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	5.9	2.7	0.9	9.76	頁岩	北山	備考
307	1956年3号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	5.0	2.5	0.9	7.2	頁岩	北山	備考
308	1956年1号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	3	1.6	0.6	3	頁岩	北山	備考
309	1956年1号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	2.6	1.1	0.2	2.6	頁岩	北山	備考
310	1956年1号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	2.6	1.1	0.2	2.6	頁岩	北山	備考
312	1956年1号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	2.6	1.1	0.2	2.6	頁岩	北山	備考
313	1956年1号	埴土中位	石製 甕	胴・下半部	2.6	1.1	0.2	2.6	頁岩	北山	備考

第11表 遺物観察表

埋蔵番号	出土地点	層土位置	器	種	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)	石	質	産地	備
314	a97住1号	西土上	石鏡	鏡	4.3	1.4	0.6	2.07	頁岩	北山	無茎凹基、大形	
315	a97住1号	西土上	石鏡	鏡	3.6	3.5	1.4		頁岩	北山	無茎凹基	
316	a97住2号	東土上	石鏡	鏡	3	1.8	0.5		頁岩	北山	無茎凹基	
318	a97住2号	東土上	石鏡	鏡	3.5	5.2	0.6		頁岩	北山	無茎凹基	
317	a97住2号	東土中	磨石	磨石	2.7	1.25			頁岩	北山	黒色物質付着、片打	
319	m96住1号	東土上	磨石	磨石	5.6	5.25	3.2		花崗閃緑岩	北山		
320	m96住1号Q3	床面直上	磨石	磨石	8.2	3.2	0.6	17.8	花崗閃緑岩	北山		
333	a96住1号Q1	東土中	磨石	磨石	10.2	8	3.9	560	花崗閃緑岩	北山		
334	a96住1号	東土中	磨石	磨石	11.6	7.1	4.4		花崗閃緑岩	北山		
321	a96住2号	柱穴	石鏡	鏡	2.2	1.6	0.3		頁岩	北山	無茎凹基	
324	a96住1号	東土上	石鏡	鏡	6.3	5.1	1.3		頁岩	北山		
325	a96住1号	東土上	石鏡	鏡	9.5	7.2	4.1		頁岩	北山		
326	a96住1号	東土中	石鏡	鏡	4.9	4.2	1.2		頁岩	北山		
327	a96住1号	東土中	石鏡	鏡	4.8	2.2	0.56		頁岩	北山		
328	a96住1号	東土中	石鏡	鏡	3.3	1.6	0.5		頁岩	北山		
329	a96住1号	東土中	石鏡	鏡	(3.6)	2.1	0.7		頁岩	北山		
330	a96住1号	東土中	石鏡	鏡	4.1	2.2	0.7		頁岩	北山		
331	a96住1号	東土中	石鏡	鏡	9.2	5.1	2.8		頁岩	北山		
332	a96住1号Q1	東土中(3層)	磨石	磨石	11.95	8.05	6.6		花崗閃緑岩	北山		
335	a97住1号Q1	床面直上	磨石	磨石	11.5	7.15	6.2		花崗閃緑岩	北山		
336	a97住1号Q3	床面直上	磨石	磨石	9.9	6.5	4.8		花崗閃緑岩	北山		
337	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	5.5	2.1	1.2		頁岩	北山		
338	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	5.5	2.6	1.2		頁岩	北山		
339	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.2	2.2	1.3	9	頁岩	北山		
340	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	1.9	2.2	1.3	10.89	頁岩	北山		
341	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	3.3	1.1	1.4	5.63	頁岩	北山		
342	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.3	2.1	1.2	9.04	頁岩	北山		
343	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.3	2.1	1.2	8.23	頁岩	北山		
344	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.4	2	1.2	8.18	頁岩	北山		
345	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.4	1.9	1.3	8.1	頁岩	北山		
346	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.25	2.2	0.9	8.4	頁岩	北山		
347	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	(3.6)	(1.0)	(0.7)	0.479	頁岩	北山		
348	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.85	1.9	1.5	9.48	頁岩	北山		
349	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.85	2.3	1.5	8	頁岩	北山		
350	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.6	2.3	1.4	11.37	頁岩	北山		
351	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.2	2.1	1.5	8.02	頁岩	北山		
352	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2.3	1.5	(1.0)	(4.44)	頁岩	北山		
353	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	2	1.6	1.3	5.91	頁岩	北山		
354	a97住1号Q4	床面直上	磨石	磨石	2.3	2.3	0.8	6.1	頁岩	北山		
355	a97住1号Q4	床面直上	磨石	磨石	10.9	8.6	6.96		頁岩	北山		
356	a97住1号Q2	床面直上	磨石	磨石	3.2	1.9	0.5	1.7	頁岩	北山	無茎凹基	
358	a96	I層下位	石鏡	鏡	2.9	1.6	0.4	1.69	頁岩	北山	無茎凹基	
359	a96	II層上	石鏡	鏡	2.1	1.45	0.3	0.7	頁岩	北山	無茎凹基	
360	a96	II層上	石鏡	鏡	2.9	1.7	0.4		頁岩	北山	無茎凹基	
361	a96	II層上	石鏡	鏡					頁岩	北山	無茎凹基	

第12表 遺物観察表

採集番号	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	産地	備考
562	956	Ⅱ層下位	石匙	4.2	1.1	0.4	頁岩	山崎不明(奥羽産?)
383	999	Ⅱ層中	スプレーバー	3.7	5.4	1.5	赤色頁岩	北上山塚
357	1977年1号Q4	Ⅱ層中	磨石	10.8	5	2.9	286.79	チャート	北上山塚
923	956付2号	Ⅱ層中	ウフレ	頁岩	北上山塚
303	955付3号Q3	Ⅱ層中	Rフレ(ノッチ)	頁岩	北上山塚

採集番号	出土地点	層位	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	産地	備考
364	r97住1号・s981号	床面・埋土中	刀子	22.6	1.5	0.3~0.6	28.83	覆板片が嵌合
365	p97住1号Q4	床面	刀子	(7.3)	1.5	0.6	13.55
366	r97住1号Q3	埋土中位	刀子	(9.6)	1.5	0.5	15.63
367	r97住1号Q3	埋土下位	刀子	(5.3)	0.9	0.7	7.76
368	r97住1号Q3	埋土中位	刀子	(4.8)	0.5~0.8	0.5~0.7	7.14
369	r97住1号Q3	埋土下位	刀子	(4.1)	0.5	0.4~0.5	2.39

写 真 图 版





道跡遺景 (南から)



道跡遺景 (南から)

写真図版 1 道跡遺景



遺跡全景（東から）



遺跡近景（南東から）

写真図版2 遺跡全景



調査前風景 (南から)



調査前風景 (北から)



調査前風景 (北から)



調査前風景 (南から)

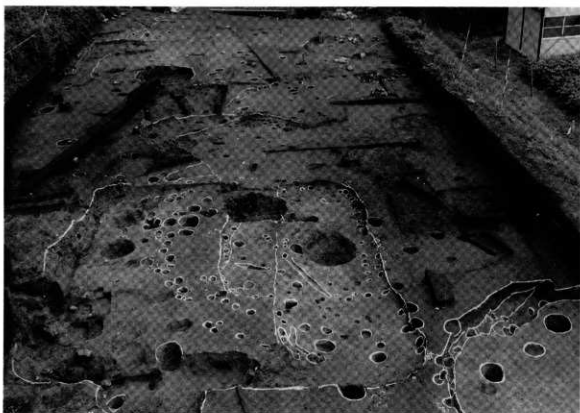


粗掘り終了時 (北から)

写真図版3 調査前風景

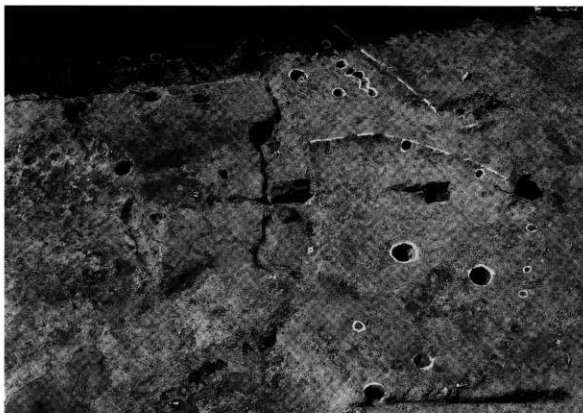


古代住居跡検出作業中（北から）

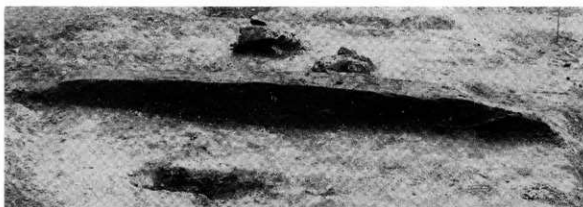


前期住居跡精査中（南から）

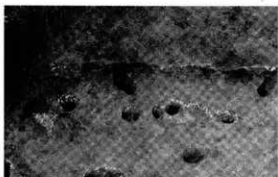
写真図版 4 第 1・3 遺構面の状況



n 95住 1号・3号・4号平面 (東から)



n 95住 3号土層断面 (西から)

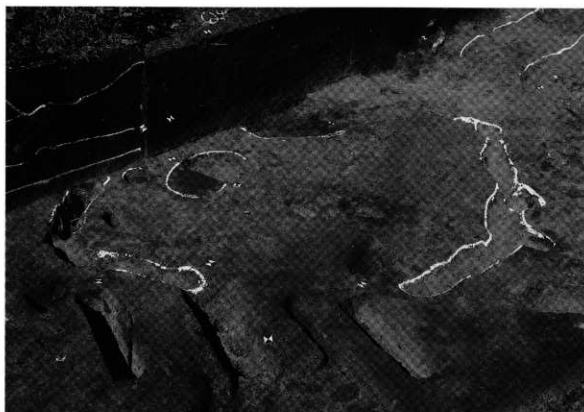


n 95住 1号壁溝 (南から)

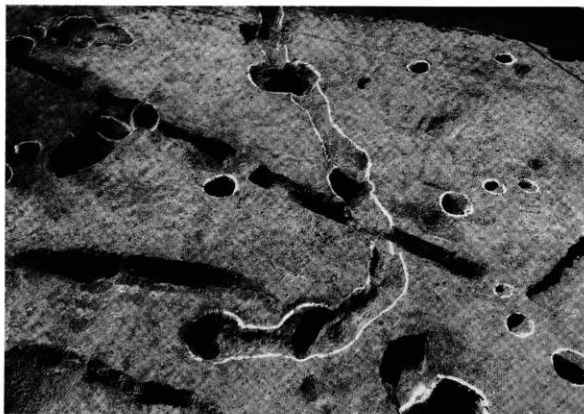


n 95住 4号一括土器出土状況

写真図版 5 n 95住 1・3・4号

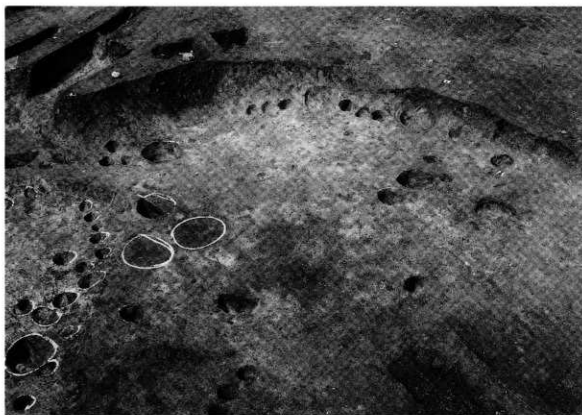


○96住2号平面（南東から）

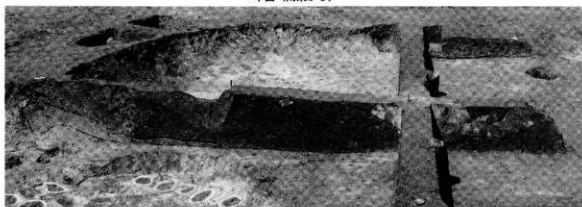


○96住1号平面（北東から）

写真図版6 ○96住2号、○96住1号



平面（南東から）



土層断面（南から）

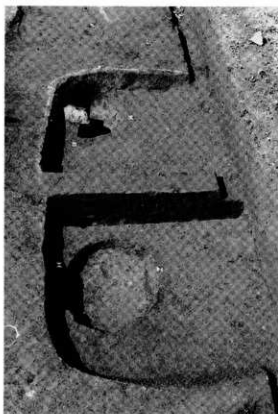


土層断面（西から）

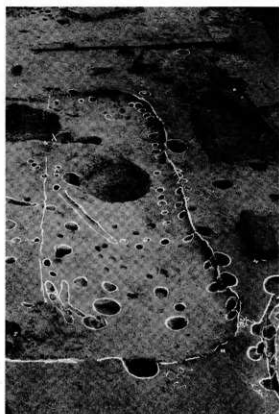
写真図版7 097住1号



p97住2号・3号・4号 p98住1号平面(南東から)



p99住1号平面(南から)

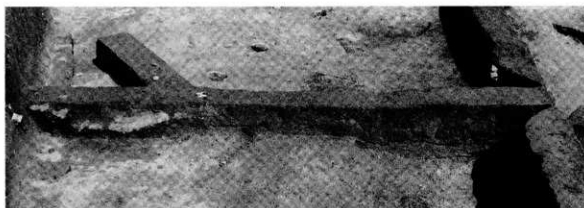


q98住1号平面(南から)

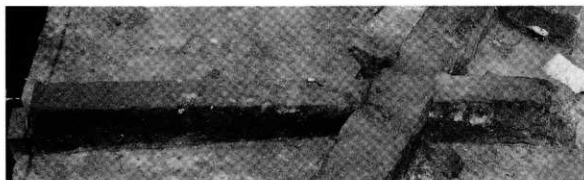
写真図版8 p97住2~4号、p98住1号、p99住1号、q98住1号



平面（南から）



土層断面（南から）

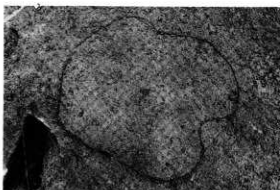


土層断面（南東から）

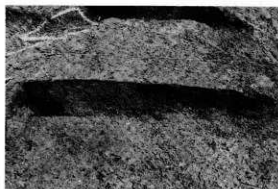
写真図版9 p95住3号



土層断面 (東から)



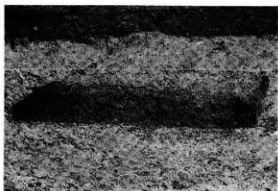
焼土A平面 (南から)



焼土A断面 (南から)



焼土B断面 (南から)



焼土C断面 (南から)



柱穴 (PP5) 断面 (西から)

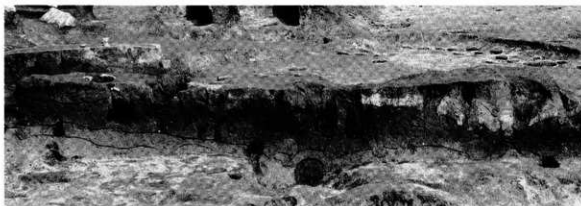


柱穴 (PP11) 断面 (北から)

写真図版10 p95住3号



平面（南東から）



層断面（南から）



土層断面（南から）

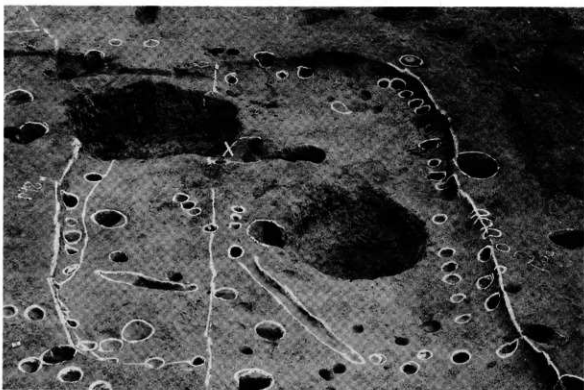
写真図版11 p97住2号



p97住2号土層断面(南から)



p97住2号土層断面(西から)



q98住2号平面(南から)

写真図版12 p97住2号、q98住2号



m98住1号平面（西から）

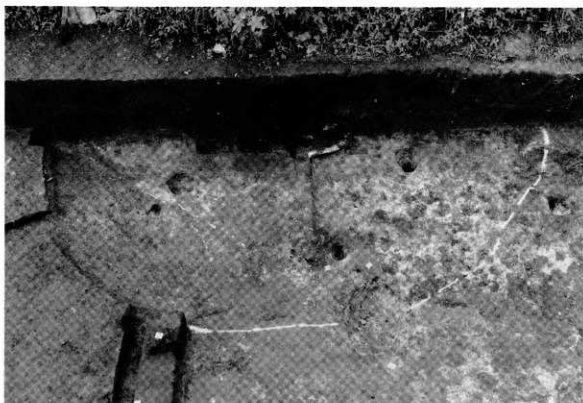


m98住2号平面（西から）

写真図版13 m98住1・2号



m98住1・2号断面（西から）



o95住2号平面（東から）



o95住2号断面（東から）

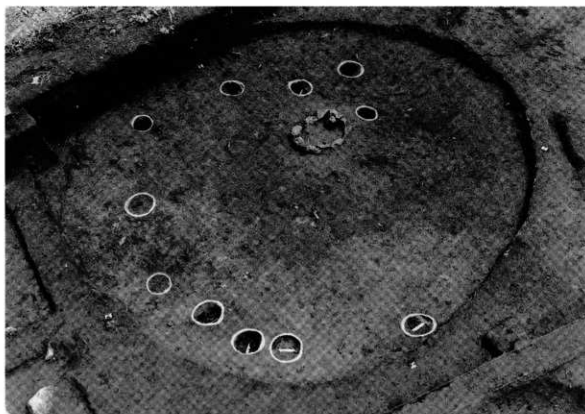
写真図版14 m98住1・2号、o95住2号



○95住2号炉断面(東から)



○95住2号炉断面(南から)



○98住1号平面(北西から)



○98住1号炉精査中



○98住1号炉断面(南から)

写真図版15 ○95住2号、○98住1号



○98住1号断面(南から)



○98住1号断面(西から)

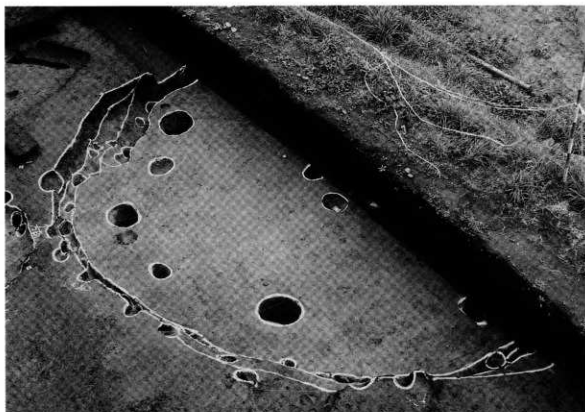


p95住1号平面(東から)



p95住1号断面(南から)

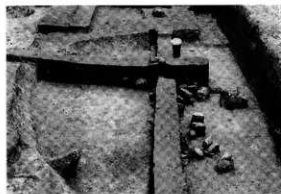
写真図版16 ○98住1号、p95住1号



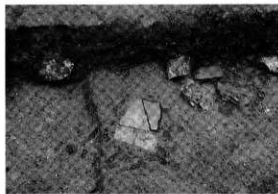
平面（南西から）



断面（西から）

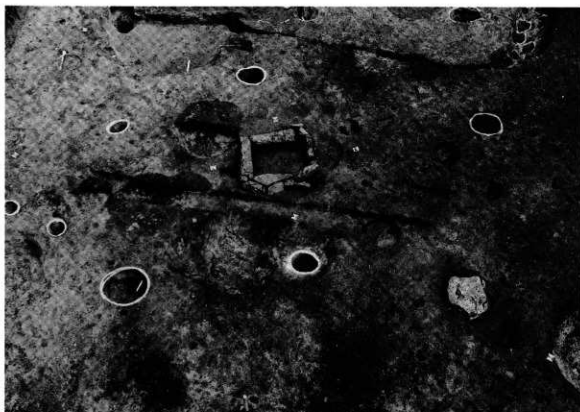


遺物出土状況（南から）



土器出土状況（西から）

写真図版17 r99住1号



平面（南から）



断面（南から）



炉 断面

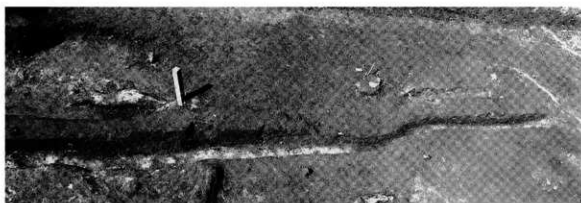


炉 断面（アップ）

写真図版18 s 98住1号



平面 (南から)



土層断面 (東から)

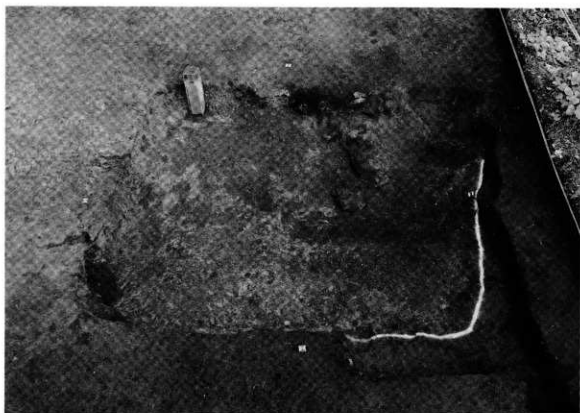


カマド検出状況



煙道部断面 (東から)

写真図版19 n85住2号



平面（南から）



断面（西から）



カマド検出状況（南から）



カマド断面（南から）

写真図版20 n 97住1号



平面（東から）



断面（東から）



断面（南から）

写真図版21 ○96住1号



焼土、炭化材検出状況（東から）



煙道部検出（東から）

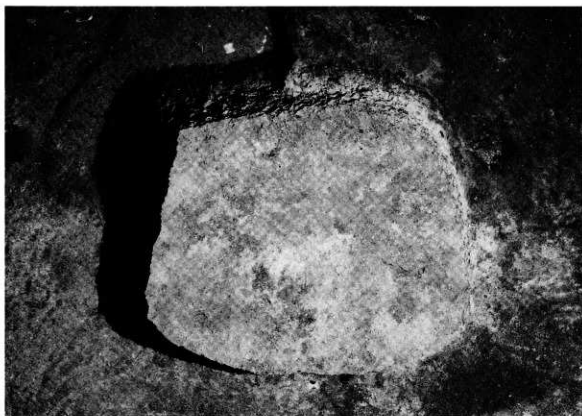


煙道部断面（南から）



煙道部完備（東から）

写真図版22 o95住1号



o96住1号平面 (東から)



o96住1号断面 (南から)

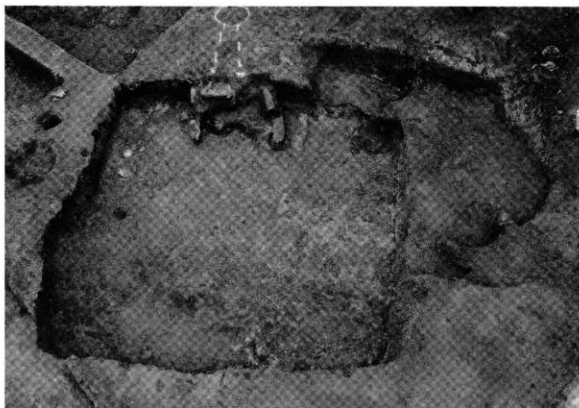


p95住2号断面 (東から)



p95住2号平面 (南から)

写真図版23 o96住1号、p95住2号



平面（北東から）

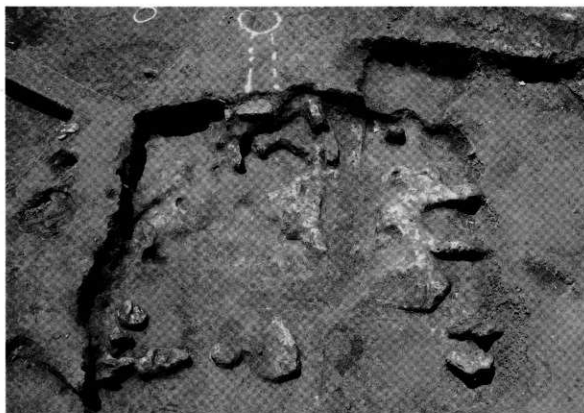


断面（北東から）



断面（北西から）

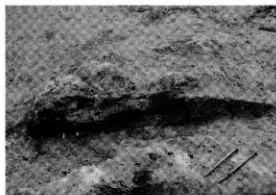
写真図版24 p 97住1号



焼土検出状況（北東から）



焼土断面（西から）



焼土断面（西から）



カマド検出状況（北東から）



煙道部完備

写真図版25 p 97住1号



平面（南から）



断面（南から）



断面（東から）

写真図版26 r 97住1号



カマド平面（東から）



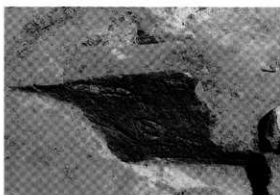
カマド断面（北から）



煙道部断面（北から）



出入口施設？（東から）



土層断面（クサシゲ流入層）（西から）



主柱穴断面（北から）



須恵器出土状況（東から）

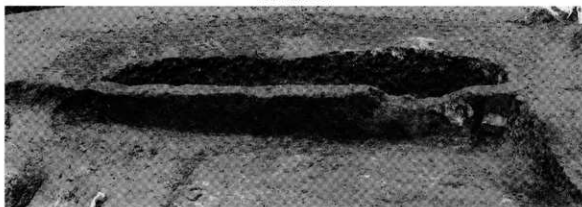


小刀出土状況（東から）

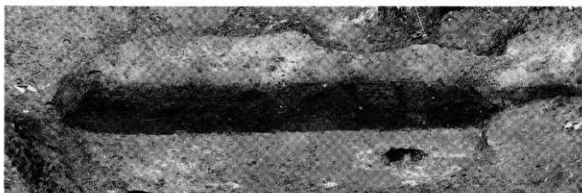
写真図版27 r 97住1号



平面（北東から）

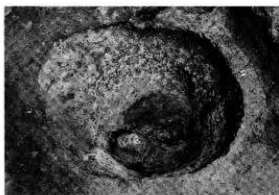


土層断面（東から）



貼床断面（東から）

写真図版28 q 97住1号



q98土坑1号平面(南から)



q98土坑1号断面(南から)



q98土坑2号平面(東から)



q98土坑2号断面(東から)



q98土坑1・2号発掘全景(西から)

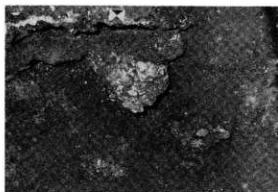


s98土坑1号平面(北東から)



s98土坑1号断面(南西から)

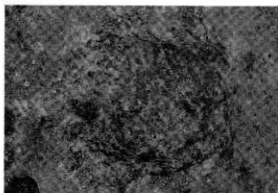
写真図版29 q98土坑1・2号、s98土坑1号



n98土坑1号検出状況 (西から)



n98土坑1号断面 (北東から)



o96土坑1号平面 (南から)



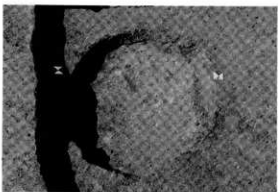
o96土坑1号断面 (南から)



p99土坑1号平面 (北から)



p99土坑1号断面 (東から)

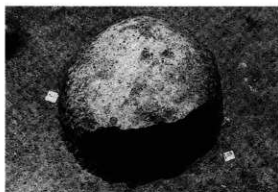


q99土坑1号平面 (南から)

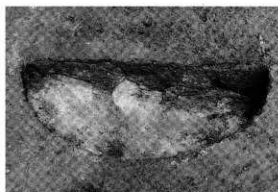


q99土坑1号断面 (南から)

写真図版30 n98土坑1号、o96土坑1号、p99土坑1号、q99土坑1号



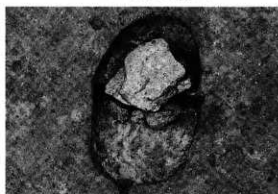
s99土坑1号平面 (南東から)



s99土坑1号断面 (南東から)



s99集石検出段階 (南東から)



s99集石第1次平面



s99集石第2次平面 (南から)

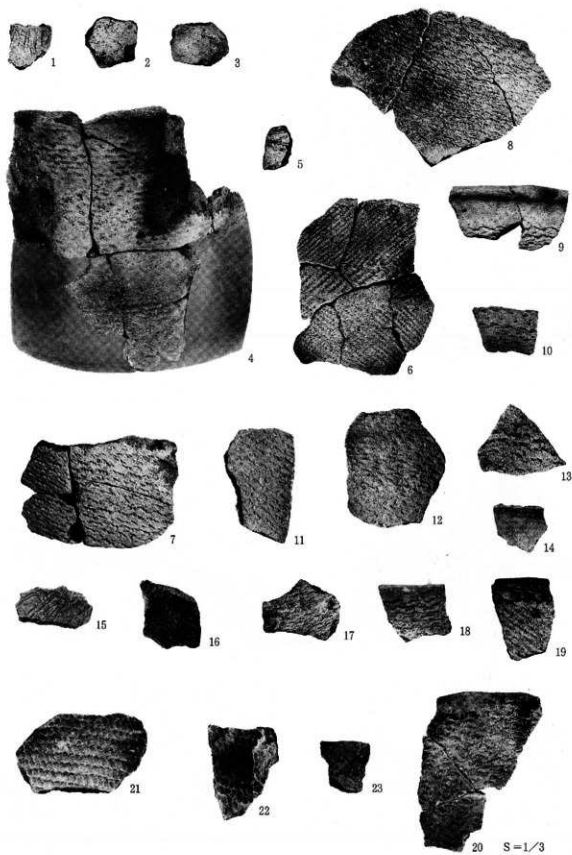


s99集石第2次断面 (南から)

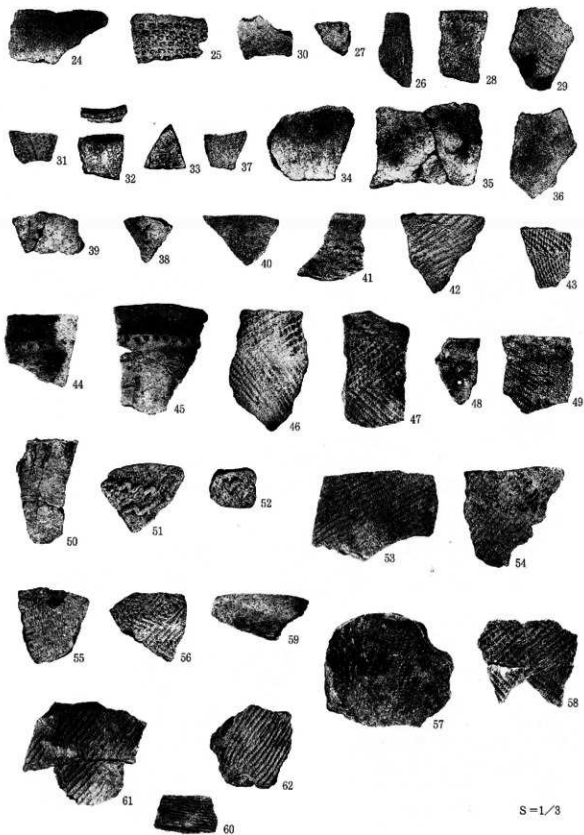


s99集石上石除去段階 (南から)

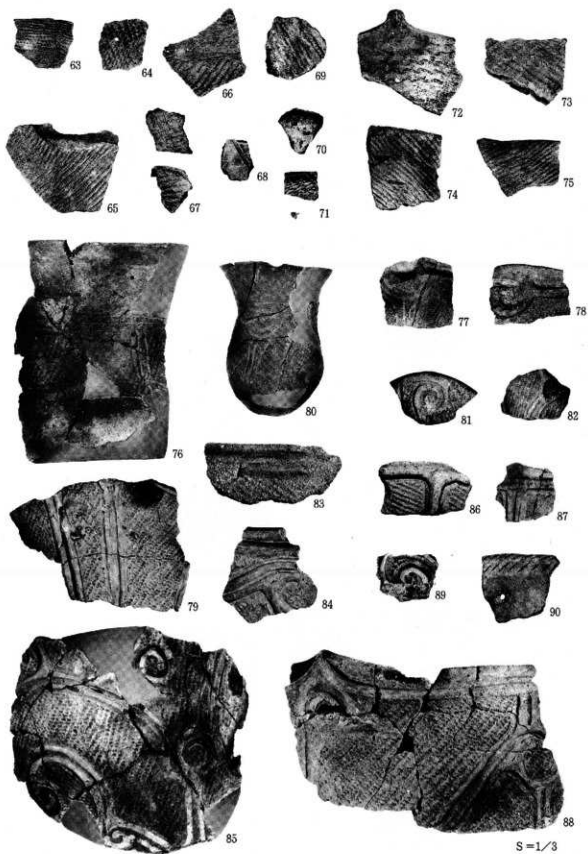
写真図版31 s99土坑1号、s99集石1号



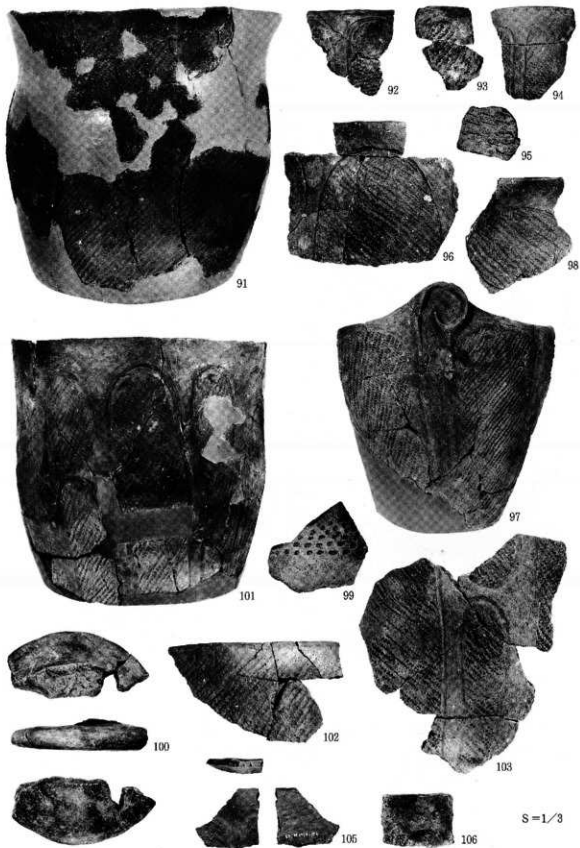
写真図版32 n95住1・3号、o96住2号、o97住1号出土土器



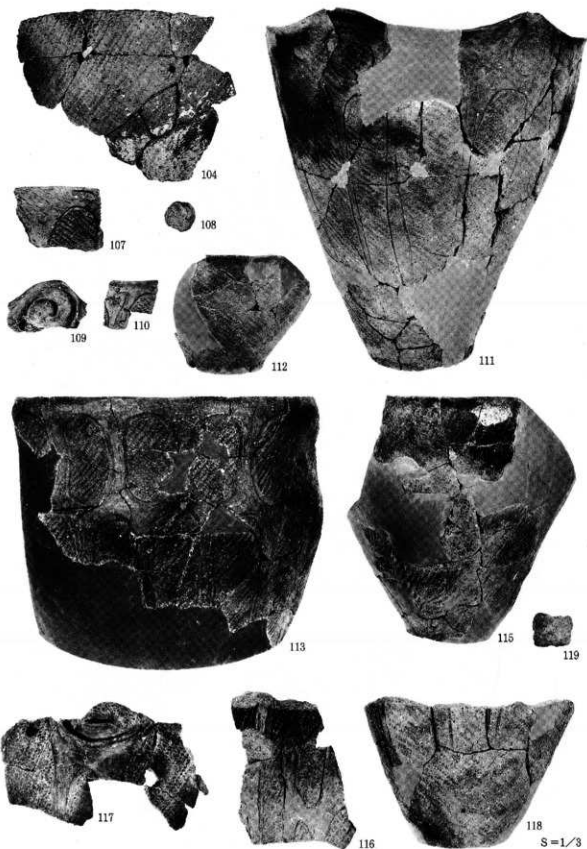
写真图版33 p96住3号、p98住1号出土土器



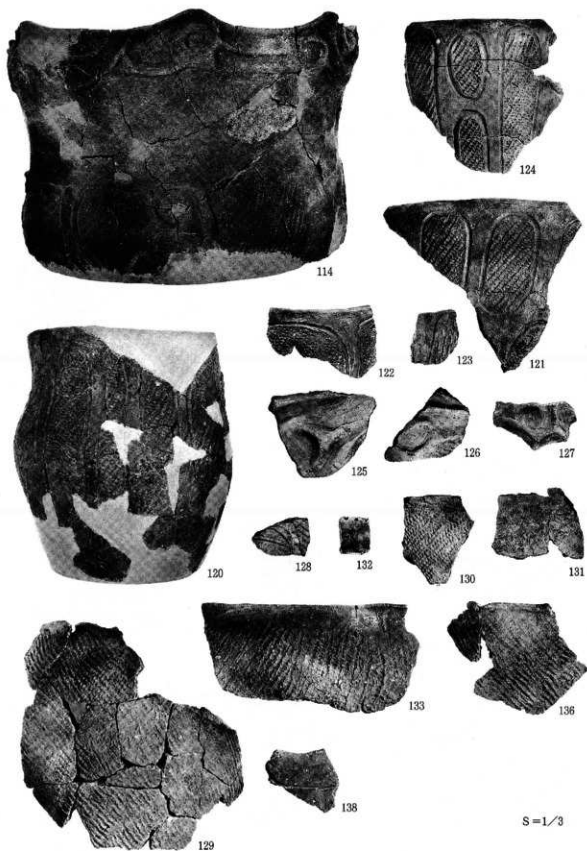
写真图版34 p97住2号、q98住1号、p99住1号、m98住1号出土土器



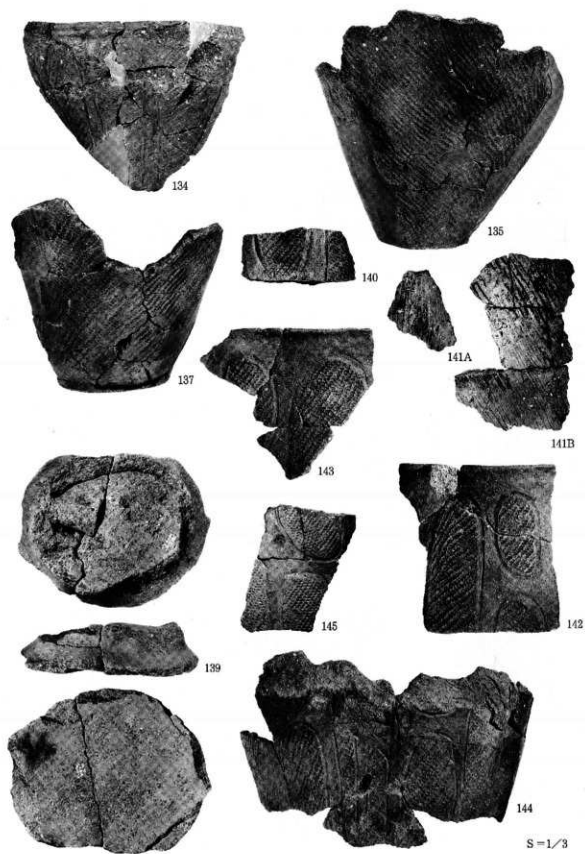
写真图版35 n95住4号、o95住2号、o98住1号出土土器



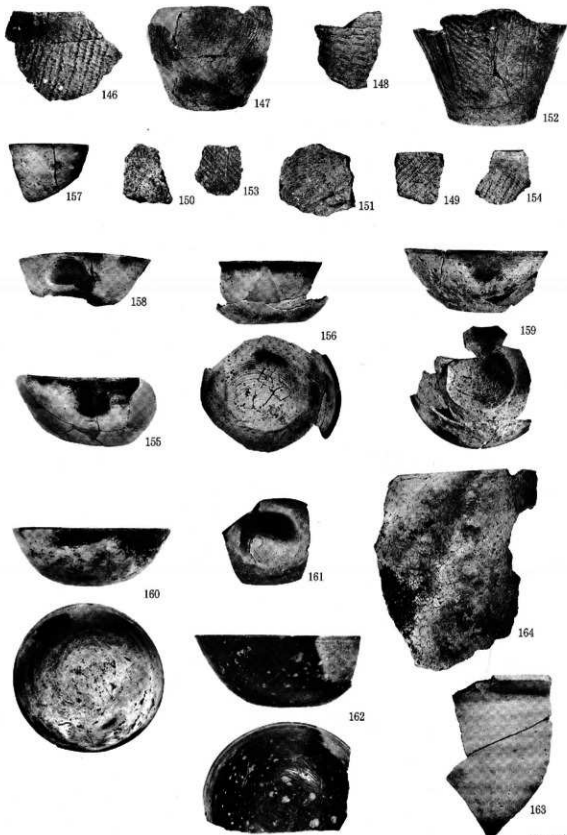
写真図版36 o98住1号、p95住1号、r99住1号出土土器



写真图版37 r 99住1号出土土器



写真図版38 r 99住1号出土土器



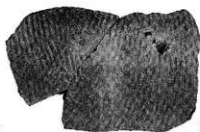
S=1/3

写真图版39 r 99住1号、s 98住1号、r 97住1号出土土器



165

S=1/6



166



167



168



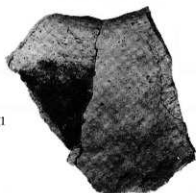
169



170

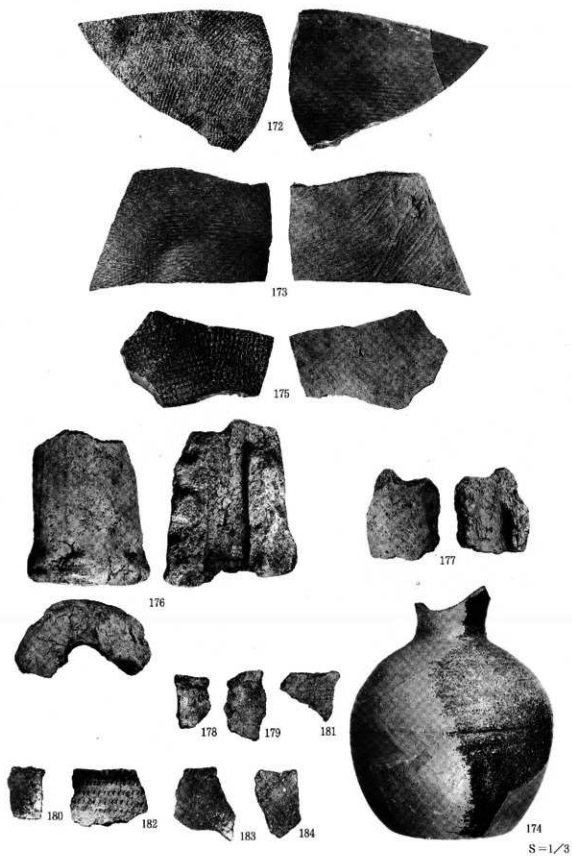


171

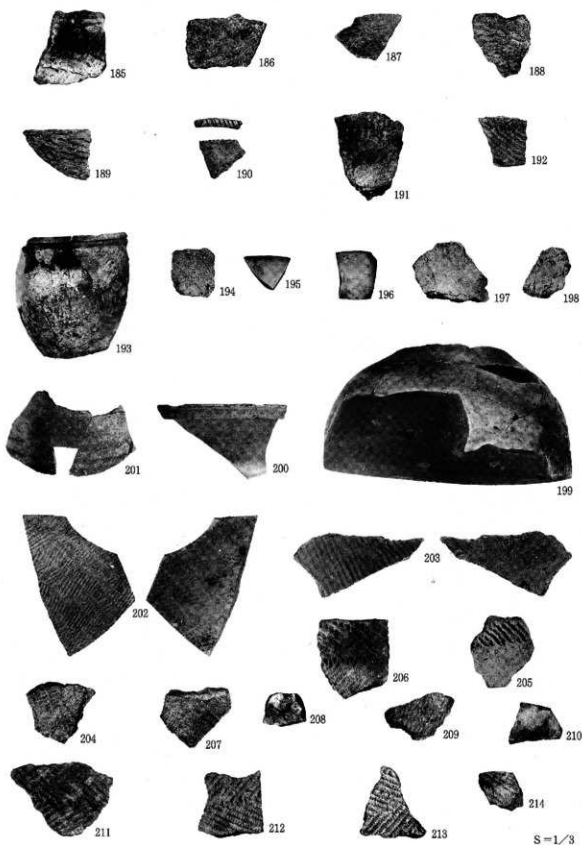


S=1/3

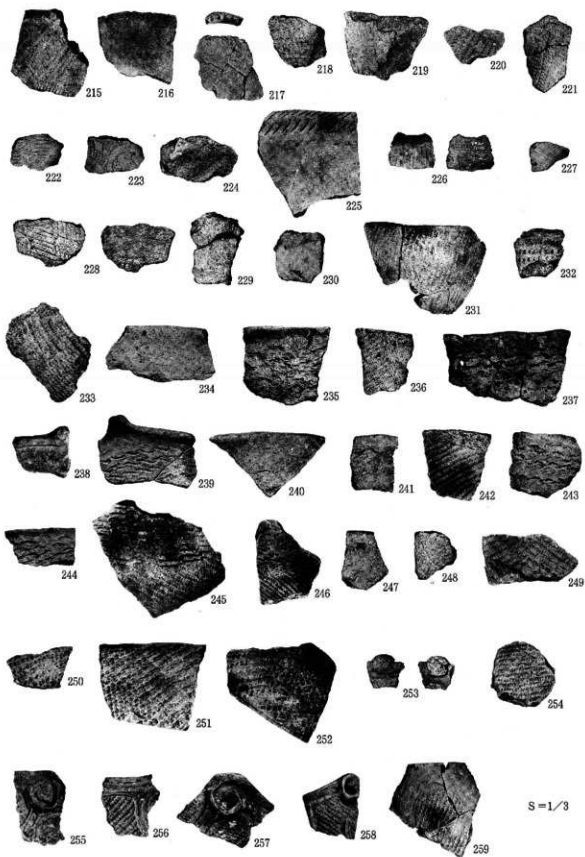
写真図版40 r 97住1号出土土器



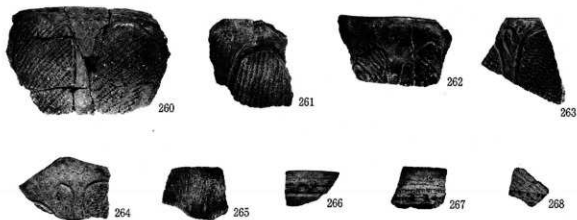
写真图版41 r 97住1号出土土器



写真图版42 r 97住1号、n 97住1号、q 97住1号、土坑、s 99集石出土土器

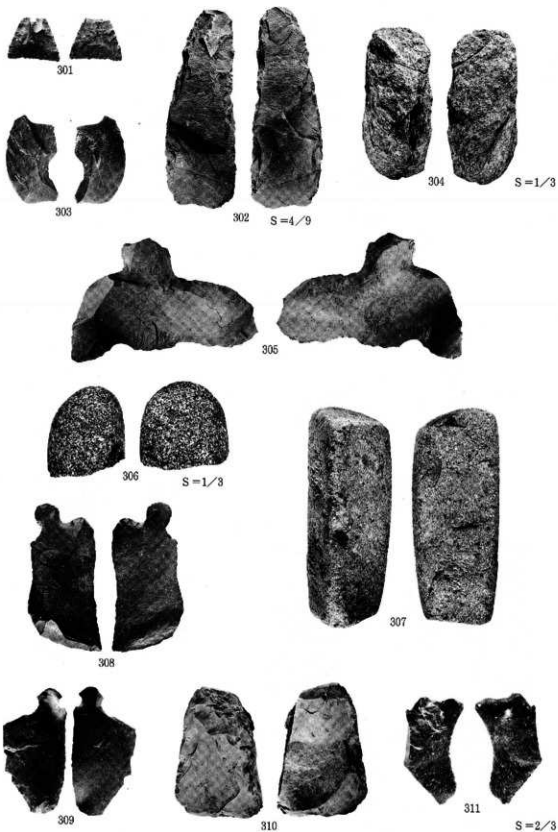


写真图版43 道清外出土土器 1

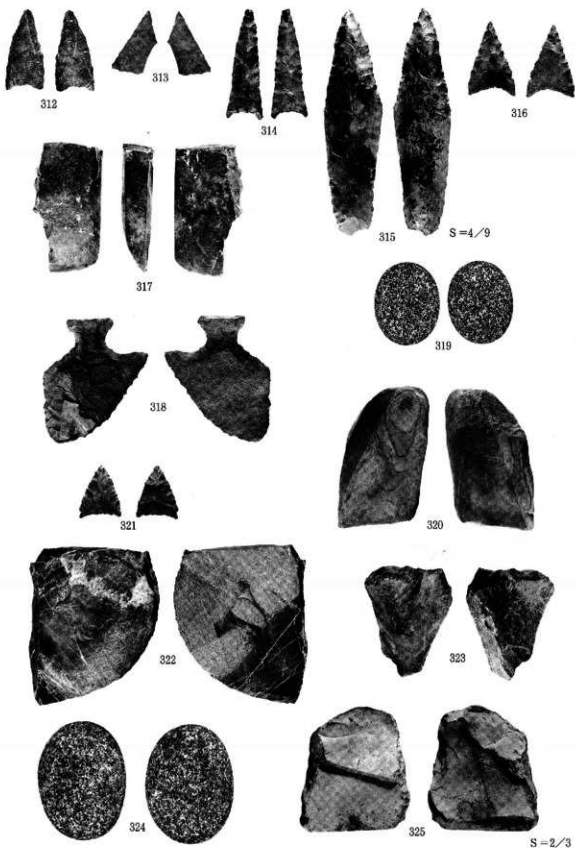


S=1/3

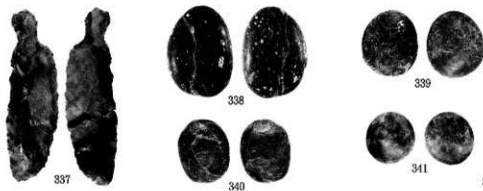
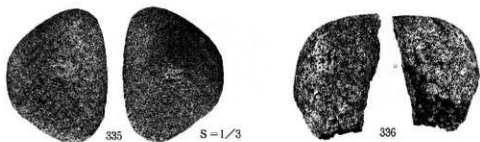
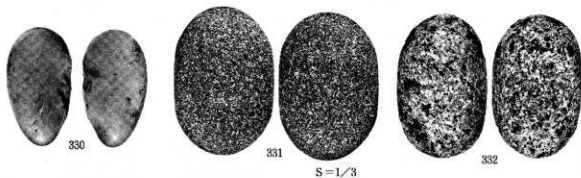
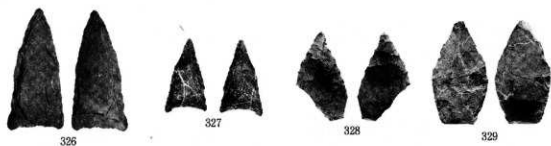
写真图版44 遼溝外出土土器 2



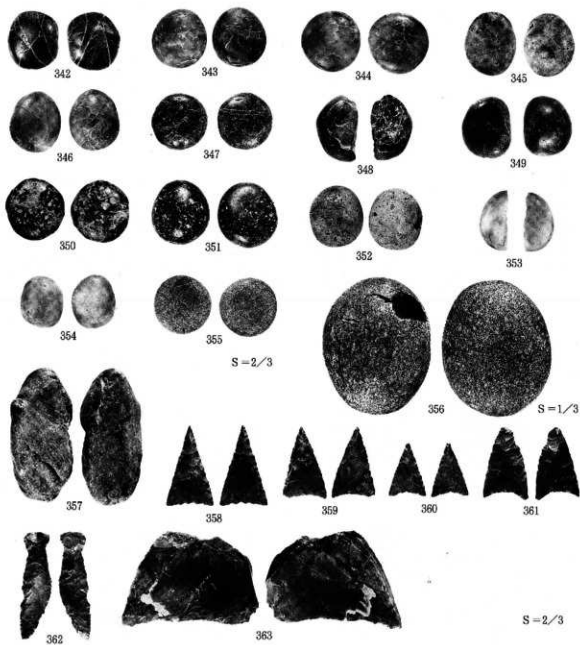
写真图版45 p96住3号、p98住1号出土石器



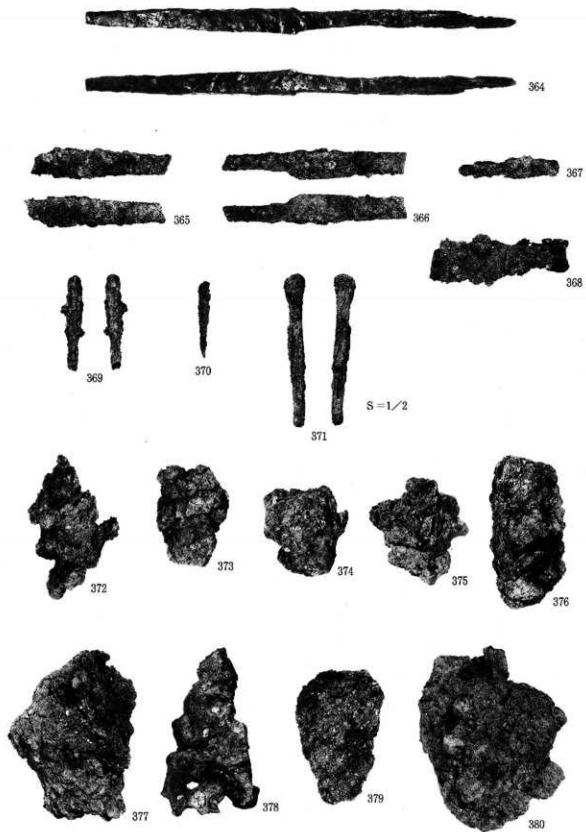
写真图版46 p 99住 1号、q 97住 1号、p 97住 2号、m 98住 1号、o 95住 2号出土石器



写真図版47 p 95住1号、r 99住1号、o 95住1号、p 97住1号、r 97住1号出土石器



写真図版48 r 97住1号、遺構外出土石器



写真図版49 鉄製品、鉄滓

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所 長	伊 藤 民 也		
副 所 長	櫻 田 次 男		
[管理課]			
課 長	川 浪 清 徳	嘱 託	千 葉 芳 夫
課 長 補 佐	山 崎 善 光	"	藤 島 恵 子
主 査	立 花 多 加 志	"	新 田 ト ヨ
主 事	日 影 睦 夫	"	佐 々 木 光 重
[調査第一課]		[調査第二課]	
課 長	佐々木 勝	調 査 第 二 課 長	高橋 與右衛門
課 長 補 佐	佐々木 清 文	調 査 第 二 課 長 補 佐	中 川 重 紀
主任文化財専門調査員	小山内 透	主任文化財専門調査員	高 橋 義 介
文化財専門調査員	赤 石 登	"	金 子 佐 知 子
"	吉 田 充	文化財専門調査員	中 田 油
"	小 原 眞 一	"	工 藤 道 孝
"	小笠原 健一郎	"	古 館 貞 眞
"	金 野 進	"	阿 松 尾 方 幸
"	鳥 居 達 人	"	工 藤 藤 徹
"	金子 昭 彦	"	前 岩 口 稔
"	東海林 淳 美	"	岩 沢 計 悟
"	阿 部 勝 則 人	"	早 坂 田 宏
"	羽 柴 直 之	"	安 藤 由 紀 夫
"	小野寺 正 男	"	高 木 晃 彦
"	菅 原 克 稔	"	千 葉 正 彦
"	長 村 浩 二 郎	"	佐 藤 淳 一
"	溜 池 貴 広	"	半 澤 武 昭 人
"	村 上 準 一 郎	"	杉 中 直 美
"	本 北 村 忠 昭 治	"	星 村 雅 之
"	丸 山 浩 敬	期 限 付 専 門 職 員	鈴 木 聡
期 限 付 専 門 職 員	村 木 弘 卓	"	古 川 徹
"	小 林 藤 敦 徳	"	北 田 田 和
"	江 藤 原 賢 (6月退職)	"	吉 北 里 美 津 子
"	菊 池 信 介	"	原 齋 藤 麻 紀 子
"	井 上 信 介	"	島 原 弘 征
"	川 又 晋	"	
"	吉 田 真 由 美	"	
"	北 田 博 義	"	

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第342集

沢田 I 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道(山田道路)関連遺跡発掘調査

印刷 平成12年10月25日

発行 平成12年10月31日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡11-185

電話(019) 638-9001

FAX(019) 638-8563

印刷 樹興版社

〒020-0816 盛岡市中野1-4-14

電話(019) 624-3456

